中折地内栗遺跡

福岡県筑後市大字中折地所在遺跡の埋蔵文化財調査

筑後市文化財報告書
第54集

2004

筑後市教育委員会

中折地内栗遺跡

福岡県筑後市大字中折地所在遺跡の埋蔵文化財調査

2004

筑後市教育委員会

序

筑後平野の中央部、矢部川中流域北岸に位置する筑後市は、古代より水稲耕作の適地として開発が進み、また交通の要衝として多くの人々が往来することにより、歴史を刻んできました。

この度報告する中折地内栗遺跡は筑後市の南西部に位置し、筑後市が誕生する以前には「下妻村」の役場所在地でもありました。今回の発掘調査では中世、戦国時代の集落の一部が確認されました。当時の村落の姿を考える上で貴重な資料を提示してくれました。

発掘調査から報告書作成に至るまで、各工事関係者、各関係機関、有識者各位には多大な御協力と御援助を頂きました。ここに心から感謝を表する次第であります。本書が文化財保護への理解を深める一助となり、併せて研究資料として御活用いただければ幸いです。

平成16年３月

筑後市教育委員会

教育長　城戸　一男

例　言

1．　本書は、工場建設に伴い、株式会社ハヤシの依頼を受けて、筑後市教育委員会社会教育課文化スポーツ係が平成14年度に大字中折地において実施した埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
2．　本書使用の遺構実測図は立石真二が製作し、浄書を平塚あけみが行なった。
3．　本書使用の遺物実測図は製作・浄書を平塚が行なった。
4．　本書使用の写真は立石が撮影した。なお、遺跡の気球写真は㈱空中写真企画に依頼した。
5．　本書使用の標高は海抜高であり、方位はG.N.である。
6．　本書が使用した座標は、国土調査法第Ⅱ座標系を使用している。
7．　本書に掲載した遺構の縮尺は1／40を基本とする。
8．　本書に掲載した遺物の縮尺は1／3を基本とする。
9．　本書の執筆は第２章３節本文を奥村太郎が、その他を立石が行なった。編集は立石が行なった。
10．　本書に関わる図面・写真・遺物などの資料は筑後市教育委員会で保管・管理され、今後公開・活用される予定である。

目　次

第１章　調査経過と組織 …… 1
　1　調査に至る経過
　2　調査組織
　3　調査経過
　4　調査経過抄録
第２章　位置と環境 …… 7
　1　地理的環境
　2　遺跡周辺の地理的環境
　3　歴史的環境
第３章　調査成果 …… 9
　1　基本層序
　2　検出遺構
　3　出土遺物
第４章　結語 …… 51
付　表 …… 54
Tab. 1　遺構一覧
Tab. 2　掘立柱建物一覧
Tab. 3　出土土器一覧
Tab. 4　出土石器一覧
Tab. 5　出土木器一覧
図　版

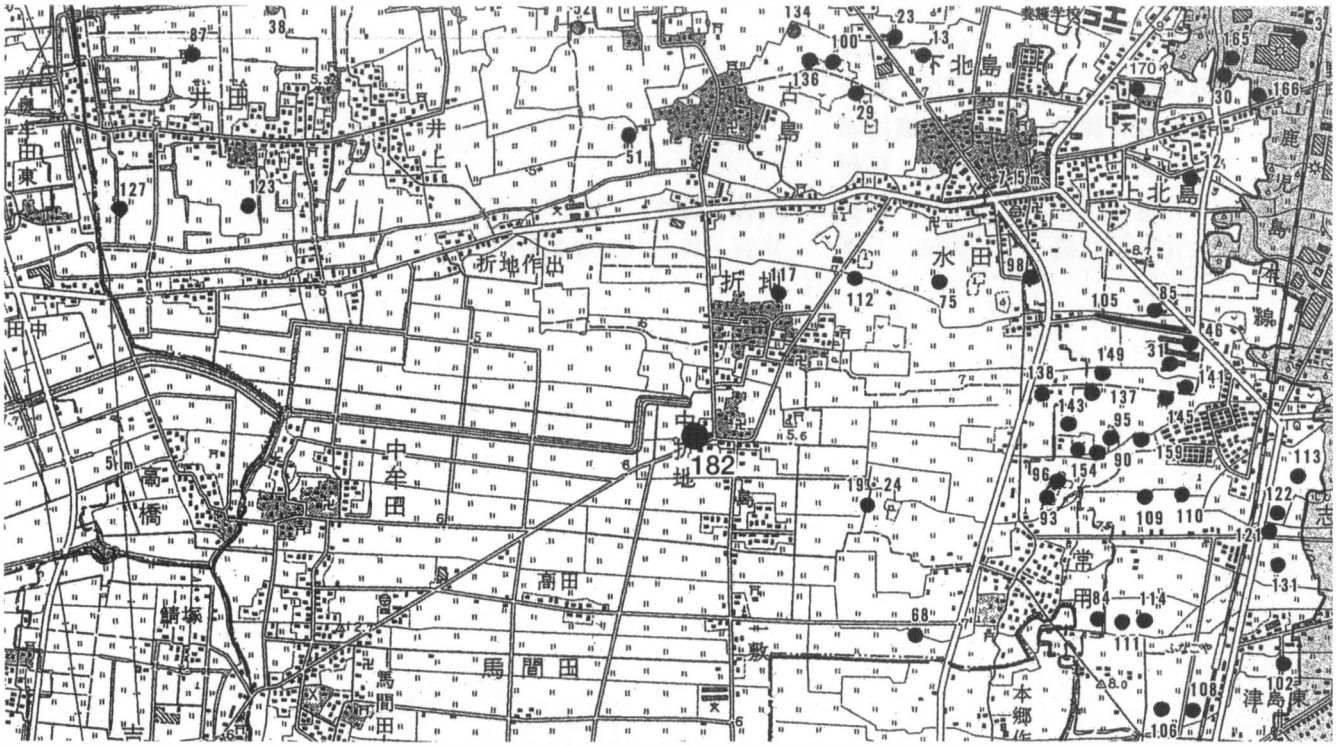
第１章　　調査経過と組織

1　調査に至る経過

中折地内栗遺跡は福岡県筑後市大字中折地に所在する。ここは筑後市南西部の標高５ｍほどの平野部にあたり、米麦を中心とした二毛作が行なわれる豊かな穀倉地帯である。

平成９年、地権者より筑後市教育委員会社会教育課社会教育係（当時、現在は文化係を経て文化スポーツ係、以降「乙」とする）に対し、該当地区における埋蔵文化財の有無の照会がなされた。対象面積は5,828.6㎡である。「乙」はこれを受け平成９年９月18日から19日の２日間にかけ試掘調査を行ない、地表より0.9～1.5mのところで溝状の遺構を確認、この結果を地権者に解答した。

平成13年８月、株式会社ハヤシ（以降「甲」とする）より「乙」に対し、工場建設に伴い埋蔵文化財に関する照会がなされた。「乙」は以前の試掘調査の結果をもって「甲」への回答とした。両者は埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行い、発掘調査を行なう事で合意した。対象面積は約1,800㎡である。整理作業を含めた発掘調査の予定期間は、平成14年10月１日より平成15年12月31日までとした。



3　狐塚遺跡	84　津島南佛生遺跡１次	109　常用相割遺跡	137　水田上平霊石遺跡１次
12　上北島前田遺跡	85　水田杉ノ元遺跡１次	110　常用野々下遺跡	138　水田下平霊石遺跡
13　下北島久デ遺跡	87　井田栗ノ内遺跡	111　津島南佛生遺跡２次	141　水田上仁良葉遺跡１次
19　梅島遺跡１次	90　常用日田行遺跡１次	112　水田伊勢ノ脇遺跡	143　水田上平霊石遺跡２次
23　下北島久清遺跡	93　常用長田遺跡１次	113　志野添遺跡	145　水田上仁良葉遺跡２次
24　梅島遺跡２次	95　常用日田行遺跡２次	114　津島南笹原遺跡	149　水田上平霊石遺跡３次
29　下北島榎崎遺跡	96　常用長田遺跡２次	117　折地長間寺遺跡	154　常用日田行遺跡３次
30　上北島花畑遺跡１次	98　水田下桜町遺跡	121　常用野中遺跡	159　常用ニラバ遺跡
31　水田山伏遺跡１次	100　古島榎崎遺跡１次	122　志下婦計遺跡１次	165　上北島花畑遺跡２次
46　水田山伏遺跡２次	102　津島西美田遺跡	123　井田堀越遺跡	166　上北島塚ノ本遺跡
51　古島島相遺跡	105　水田杉ノ元遺跡２次	127　井田下堀越遺跡	170　上北島篠島遺跡
68　常用ビンセ田遺跡	106　津島北石伏遺跡	131　志西田遺跡	**182　中折地内栗遺跡**
75　水田正吹遺跡	108　津島皿ヶ町遺跡	136　古島榎崎遺跡３次	

Fig. 1　中折地内栗遺跡　位置図（S＝1/25,000）

※上記遺跡の番号は当市が採用している発掘調査番号による

2　調査組織

中折地内栗遺跡に関する調査組織は以下の通りである。

（1）確認調査体制（平成9年度）

調査主体	筑後市教育委員会
教育長	森田　基之
教育部長	津留　忠義
社会教育課長	山口　逸郎
社会教育係長	田中　清道
文化財専門職	永見　秀徳　　小林　勇作　　田中　剛（確認調査担当）
	上村　英士（6/1～）
文化財学芸員	柴田　　剛　　上村　英士（4/1～5/31）　　立石　真二（8/1～）

（2）発掘調査体制（平成14年度）

調査主体	筑後市教育委員会
教育長	牟田口和良
教育部長	下川　雅晴
社会教育課長	松永盛四郎
文化係長	成清　平和
文化財専門職	永見　秀徳　　小林　勇作　　上村　英士
文化財学芸員	柴田　　剛　　立石　真二（発掘調査担当）

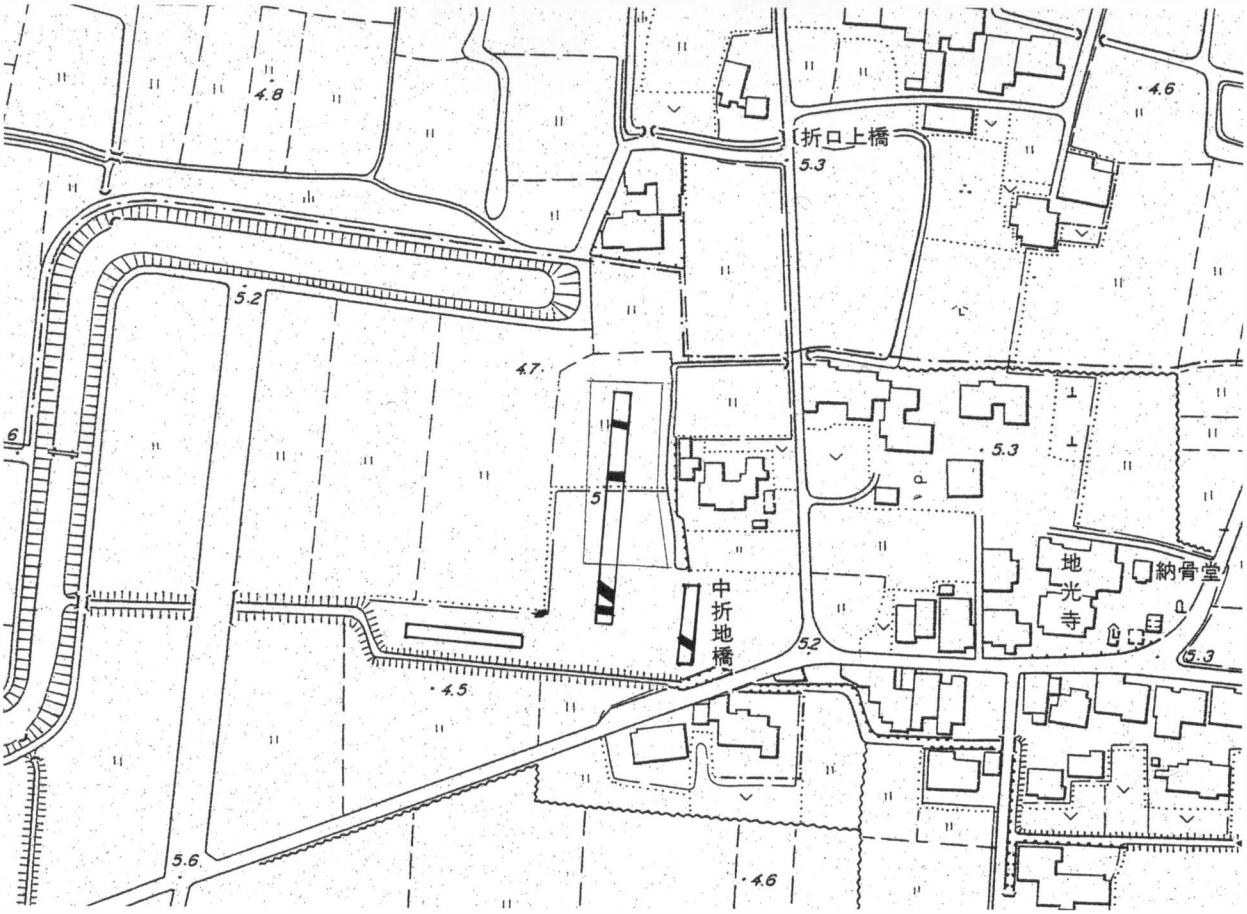


Fig. 2　中折地内栗遺跡　試掘調査範囲位置図（S＝1／2,500）

調査作業	石橋香代美	今山三咲子	植田　勝子	江崎　末廣	江崎トシ子
	奥村　太郎	加藤ちゑ子	川添　幸子	古賀　明美	古賀三ツ保
	近藤　澄子	城崎マスヨ	壇　幸恵	辻　名草	辻　勝
	富永八重子	富安　英子	中村　富男	平尾　仁子	深町　順子
	福島　浩純	松尾喜代美	本村　修一	渡辺　茂喜	
整理補助員	仲　文恵	平塚あけみ			
整理作業	妹川　玲子	佐々木寿代	野口　晴香	野間口靖子	湯川　琴美
	横井　理絵	福井　円			

（３）整理作業体制（平成15年度）

調査主体	筑後市教育委員会
教育長	牟田口和良（～９/30）
	城戸　一男（10/１～）
教育部長	菰原　修
社会教育課長	松永盛四郎
文化スポーツ係長	成清　平和
文化財専門職	永見　秀徳　小林　勇作　上村　英士
文化財学芸員	立石　真二
整理補助員	仲　文恵　平塚あけみ
整理作業	佐々木寿代　野間口靖子　横井　理絵

Fig. 3　中折地内栗遺跡　調査範囲位置図（S＝１／2,500）

3　調査経過

当初、発掘調査を平成14年10月１日の予定で開始する事になっていたが、対象地を借り受けていた建設業者が運び込んでいた残土の撤去が遅れ、10月24日からの作業開始となった。当初は地表面を海抜5.5mと考えていたが、このレベルから0.8m程下がるところまで残土が積まれ、重機による遺構面までの掘り下げは11月11日までかかった。11月13日より作業員による作業を開始し、途中11月26日から12月５日までの間中断せざるをえなかったが、平成15年１月15日までに測量までを含む作業を終了した。同日に気球による空中写真の撮影を終え、翌16日には校区である下妻小学校の児童３年生から６年生までを対象とした現場説明会を実施した。埋め戻し作業は１月20日から２月４日まで重機により行なわれ、翌５日に開発関係者立ち会いのもと現場の引き渡しを行ない発掘調査の全日程を終了した。

4　調査経過抄録

14.	10. 22	大字古島より水準点移動（～23日まで）
	10. 24	調査区設定
	10. 25	重機搬入、盛り土の除去を開始（～11月11日まで）
	11. 1	ユニットハウス、仮説トイレ搬入
	11. 5	配電盤工事（～７日まで）
	11. 12	資材搬入、光波測距儀による座標測量（国土調査法第Ⅱ座標系に拠る）
	11. 13	作業員による調査作業開始
	11. 14	ＳＤ001・ＳＸ010掘り下げ開始
	11. 18	ＳＸ010より骨片が出土
	11. 19	ＳＤ005掘り下げ開始、ＳＸ010より骨片・白磁Ｃ類出土
	11. 20	ＳＫ015・ＳＤ020掘り下げ開始
	11. 22	ＳＫ015土層断面より明染付を確認
	11. 26	作業中断（～12. ５まで）
	12. 6	作業再開
	12. 10	北側柱穴群掘り下げ開始
	12. 17	ＳＤ025～029（中央の東西方向の溝状遺構群）掘り下げ開始
	12. 26	ＳＤ005、下位遺構の関係上土層断面Ｄ軸で出土遺物を分離、ＳＤ030掘り下げ開始
	12. 29	年末年始休業（～15. １. ５）
15.	１. 6	作業再開
	１. 7	ＳＥ040、南側柱穴群掘り下げ開始
	１. 14	ＳＤ035掘り下げ開始
	１. 15	気球による空中写真撮影
	１. 16	下妻小学校児童３年生～６年生現場説明会
	１. 20	重機による調査区の埋め戻し開始（～２. ４まで）
	１. 22	ユニットハウス、トイレ返却
	２. 5	開発関係者立ち会いのもと、現場の引き渡し　→　発掘作業終了

Fig. 4　中折地内栗遺跡　遺構配置図（S＝1/300）

なお、発掘調査および報告書作成に際し、株式会社ハヤシ、各工事関係者、各関係機関に多大な御協力を頂いた。また、下記の方々・各機関からは調査・整理作業に際し、貴重な御教示・御指導を頂いた。記して謝意を表したい（順不同、敬称略）。

小田　和利、小川　泰樹（福岡県教育庁）、徳永　貞紹、白木原　宣（佐賀県教育庁）、山村　信榮、高橋　学、森田　レイ子（太宰府市教育委員会）、中村　渉（大牟田市教育委員会）、大田黒　保位

第２章　　位置と環境

１　地理的環境

筑後市は福岡県の南西部、筑後平野の中央部に位置する。市域をJR鹿児島本線と国道209号が縦断し、国道442号が横断する。また、市の北部には倉目川、中央部には花宗川や山ノ井川、南部には一級河川の矢部川があり、それぞれ西流している。北部地域は耳納山地から派生した八女丘陵が西へと延び、灌漑用の溜池が点在している。一方、低位扇状地である東部や低地である南西部には各河川より派生した農業用水路が発達している。当市は県内有数の農業地帯であり、北部を中心とする丘陵地帯では果樹園や茶畑、東部や南西部では米麦中心の田園地帯が広がる。市街地は市の中央部、国道に沿って形成されている。

２　遺跡周辺の地理的環境

筑後市大字中折地は筑後市の西部に位置している。地勢的には筑後川水系花宗川の左岸に広がる標高５～7.5mの平野部で、主に米・麦の二毛作が盛んな水田地帯が広がる農業地域である。以前は筑紫平野を象徴するクリークが発達した、小区画の農地と狭い農道が入り組んだ地域であったが、筑後川下流域農業開発計画に基づく県営ほ場整備事業下妻地区（昭和50年～平成２年）、干拓地等農地整備事業筑後西部地区（昭和61年～平成７年）などの実施により、現在では近代的な農業経営に適した景観が広がっている。また、近年の農業形態の変化に伴い、イチゴや蔬菜（そさい）などの栽培を行なうビニルハウスも見られるようになってきている。

３　歴史的環境

先史時代の遺跡については、周辺での旧石器時代の遺跡の確認報告は今の所はない。縄文時代についても同様である（註１）。弥生時代については水田杉ノ元遺跡（85・105）や水田山伏遺跡（31・46）弥生中期～後期の集落跡が（註２）、水田上平霊石（ひられいし）遺跡（149）から弥生時代前期～中期初頭の支石墓が確認されている（註３）。

古代、当地は律令体制下で下妻（しもつま）郡に編成された。当時の条里区画はその一部が歴史地理学の立場から復元されている（註４）。また、南に位置する大字下妻には郡衙があったと考えられている（註５）。

中世、この地域は水田荘に属し、南に位置する下妻荘と共に筑前太宰府の天満宮安楽寺の支配下にあった。周辺の折地長間寺遺跡（117）や水田下桜町遺跡（98）からは当時の溝が（註６）、水田上仁良葉遺跡（141・145）からは井戸が確認されている（註７）。

近世の初期、下妻郡の領主は安定しなかったが、元和６年（1620）以降は久留米藩有馬氏の領地となった。歴史上中折地の地名が始めて出てくるのもこの頃である。有馬氏は庄屋・大庄屋の制度を設け、各農村の行政にあたらせた。享保７年（1722）、中折地村は大田黒氏が大庄屋となり、下妻郡19ヶ所村支配の中心として幕末まで栄えた。

明治22年（1889）、下妻村に編成され、中折地に村役場が置かれた。初代村長は最後の大庄屋、大田黒子之吉である。

（奥村　太郎）

註　中折地内栗遺跡の周辺、特に遺跡の南部・西部において、大規模なほ場整備事業が行なわれているにも関わらず遺跡の調査事例は少ない。これはこの地域の開発が、筑後市の埋蔵文化財に関する体制が成立する以前のものであることも関係するであろうが、福岡県の遺跡分布調査（1979年・昭和54年刊行）でも、この地域には埋蔵文化財は確認されていない状況であった。この状況は筑後市が近年行なった遺跡分布調査でもほぼ変更

されない所だが、このような状況はこの一帯の遺跡が、地表面より１ｍを超える深さにあるため、地表面の観察のみでは不十分であることに起因するもので、今後の開発により新たに遺跡が発見される可能性が残されている。

1　常用地区の遺跡からは近年の整理作業の進展によって夜臼系の土器が出土していた事が明らかとなってきているが、その所属時期については慎重にならざるを得ないため、ここでは提示していない。

2　この他にも水田地区の南に位置する常用地区、北に位置する古島地区・下北島において弥生時代の集落遺跡が確認されている。常用地区には常用日田行遺跡（弥生後期を中心とする集落遺跡、旧称常用遺跡、90・95・154）・梅島遺跡（弥生後期を中心とする集落遺跡、不定形周溝状遺構を多く検出、19・24）・常用長田遺跡（弥生時代全般の集落遺跡、93・96）、古島には古島榎崎遺跡（100・134・136）、下北島は下北島榎崎遺跡（29）・下北島久清遺跡（23）がある。水田地区はこの他に水田上平霊石遺跡第１次・第２次（137・143）、水田伊勢ノ脇遺跡（弥生後期、112）がある。

3　この地区には小字名の由来となった「平霊石」というテーブル状の石墨片岩の巨石が所在し、「イボ神様」として地域住民から信仰の対象として祭られている。地元郷土史会の記録によると、この巨石を移動した際、この下から甕棺が発見され、中から人骨および陰陽石を４個出土したとの記録がある。この陰陽石は現在、平霊石の下に埋納されている。また、巨石の一部が江戸時代に中折地八幡宮の境内に運ばれたという記述があり、この中で支石墓がこの他にも数基存在したのではないかと指摘されている。筑後市教育委員会の調査はほ場整備事業に伴う形で行なわれ、以前平霊石が所在したと思われる場所から甕棺を確認している（水田上平霊石遺跡第３次、149）。字平霊石の北側に位置する字居流には弥生時代の集落跡および甕棺群が所在したという記録もみられる。地元の人々からの話によるとこれに隣接する筑後中学校（字上居流、留主）の建築工事の際、多くの甕棺が発見されたが未調査のまま取り壊されたとのことであり、中学校敷地内の水田山伏遺跡第１次調査（31）では、半壊した甕棺が発見されている。平霊石の南側、常用日田行遺跡、常用長田遺跡においてもいくつかの甕棺が確認されている。

4　現在この地域の条理復元については再考する動きもあり、明確に復元されているとは言えない。

5　郡衙が所在したと考えられている根拠としては、ここが下妻郡の遺称地であり、小字名「群女」「蔵屋敷」「中道」の微高地をその所在地としている。ただし、これも案のひとつであり、郡衙の所在地を筑後市中部に比定する案も唱えられている。

6　この他に水田伊勢ノ脇遺跡でも同時期の溝を確認している。調査担当者はこれらを水田荘の土地区画に伴うものではないかと推論している。

7　水田上仁良葉遺跡第１次調査検出の井戸は時期を特定しうる遺物の出土を伴っておらず、調査担当者の埋土観察による推察である。

【参考文献】

福岡県教育委員会・編	『福岡県遺跡等分布地図（大川市・筑後市・三潴郡編）』	福岡県教育委員会	1979
右田乙次郎・編	『水田校区郷土史』	筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会	1981
右田乙次郎	『筑後下妻郷土史』	筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会	1985
永見秀徳	『梅島遺跡』	筑後市教育委員会	1992
筑後市史編さん委員会・編	『筑後市史』	筑後市史編さん委員会	1998
小林勇作・編	『筑後西部地区遺跡群　Ⅱ』	筑後市教育委員会	2000
小林勇作・編	『筑後市内遺跡群　Ⅱ』	筑後市教育委員会	2001
立石真二	『筑後西部第２地区遺跡群　Ⅳ』	筑後市教育委員会	2001
永見秀徳	『筑後市文化財分布地図』	筑後市教育委員会	2002
上村英士	『筑後市内遺跡群　Ⅲ』	筑後市教育委員会	2002
永見秀徳	『筑後西部第２地区遺跡群　Ⅵ』	筑後市教育委員会	2003

第3章　調査成果

1　基本層序

本調査区は調査前は北側は標高4.7mの水田、南側は標高5.0mの住宅地であったが、調査に入る数年前から建築廃材などを含む残土置き場として利用されていた。この残土は標高5.5m近くまで積み上げられていた。調査区北側では残土の層が地表から0.8mほど堆積し、標高4.5mほどで褐色の土壌に変化した。この層を0.1mほど掘り下げた所で遺構面となった。遺構面は標高約4.5mである。南側は旧地表面と思われる標高5.3m前後までは残土が堆積していたが、この下からは盛り土と思われる砂礫層に変化する。この砂礫層は0.5mほど堆積し、北側と同じく褐色土に変化、その下0.1mほどで遺構面となった。南側の遺構面の高さは標高4.7mである。遺構面は筑後市の南西部に広く分布する海性の青灰色粘土（シルト）である。

調査区内の境界部分にはコンクリートブロックにより境界が設けられていたが、遺構面をわずかに傷める程度に掘り込まれていた。またこの境界部分において段差等は確認できず、遺構面は南から北へ緩やかに低くなるものであった。

2　検出遺構

本調査では柵列2条、掘立柱建物4棟、溝状遺構10条、井戸1基、大型土壙2基、不明遺構1基、ピット多数を検出した。

柵列

ＳＡ０８０（Fig. 5）

Ｄ８～13グリットから南北方向に6間分を検出した。全長約13.4m。それぞれの柱穴間の距離はＰ１－Ｐ２間約2.55m、Ｐ２－Ｐ３間約2.0m、Ｐ３－Ｐ４間約2.6m、Ｐ４－Ｐ５間約2.45m、Ｐ５－Ｐ６間約1.55m、Ｐ６－Ｐ７間約2.0m、主軸の傾きはＮ－2°－Ｅを測る。Ｐ３・４・６・７は段を有する。

この遺構からはＰ１（Ｓ007）・Ｐ４（Ｓ011）より土師器片、Ｐ６（Ｓ018）より焼粘土塊と土師器片を出土しているが、図化しうる物ではない。

ＳＡ０９０（Fig. 5）

Ｄ４～７グリットから南北方向に4間分を検出した。全長約8.2m。それぞれの柱穴間の距離はＰ１－Ｐ２間約2.4m、Ｐ２－Ｐ３間約2.0m、Ｐ３－Ｐ４間約2.05m（Ｐ３－Ｐ４'間約1.95m）、Ｐ４－Ｐ５間約1.9m（Ｐ４'－Ｐ５間約2.05m）、主軸の傾きはＮ－3°－Ｅを測る。Ｐ１・３（・４'）は段を有する。

この遺構からはＰ４（Ｓ042）より焼粘土塊、Ｐ５（Ｓ041）より土師器片を出土しているが、図化しうる物ではない。

掘立柱建物

ＳＢ０７０（Fig. 6）

Ｄ15～16グリットから西辺と南辺の一部を検出した。南北棟と思われる建物である。調査時には柵列としたが、東西軸1間＋α×南北軸3間の掘立柱建物の可能性も出てきたので、ここに報告する。西辺は全長約4.4m、南辺約2.2m＋α。それぞれの柱穴間の距離はＰ１－Ｐ２間約1.6m、Ｐ２－Ｐ３間約1.6m、Ｐ３－Ｐ４間約1.0m、Ｐ４－Ｐ５間約2.2m。主軸の傾きはＮ－0°30′－Ｅ。床面積は約10.4m²＋α

（約3.1坪＋α）を測る。Ｐ２は段を有する。埋土はいずれも単一の灰茶色粘質土で、柱痕は認められなかった。

この遺構からはＰ１（Ｓ012）より土師器片、Ｐ４（Ｓ004）より黒耀石片と木杭、Ｐ５（Ｓ003）からは土師器片がが出土したが、いずれも図化しうるものではない。

ＳＢ０７５（Fig. 6）

Ｃ17～Ｄ19グリットから西辺と南辺の一部を検出した、南北棟であろうと思われる建物である。調査時点では柵列の可能性があるとして調査したが、その後東西軸１間＋α×南北軸２間の掘立柱建物となる可能性も出てきたので、ここに報告する。西辺は全長約4.1m、南辺約2.1m＋α。それぞれの柱穴間の距離はＰ１－Ｐ２間約2.0m、Ｐ２－Ｐ３間約2.1m、Ｐ３－Ｐ４間2.0m。主軸の傾きはＮ－2°30′－Ｅ。床面積は約7.0㎡＋α（約2.1坪＋α）を測る。Ｐ１、Ｐ４は段を有する。埋土はいずれも単一の灰茶色粘質土で、柱痕は認められなかった。

この遺構からの出土遺物はない。

ＳＢ０８５（Fig. 7）

Ｃ12～Ｄ13グリットから検出された、東西軸１間×南北軸３間の南北棟の掘立柱建物である。東辺には柱穴がコーナー部分しか見られないため、調査時には建物として認識していなかった。東辺は全長約4.5m、西辺は全長約4.3m、南辺は全長約3.0m、北辺は全長約3.0m。それぞれの柱穴間の距離はＰ１－Ｐ２間約1.8m、Ｐ２－Ｐ３間約1.2m、Ｐ３－Ｐ４m約1.4m、Ｐ５－Ｐ６間約4.5m、Ｐ１－Ｐ５間約3.0m、Ｐ４－Ｐ６間約3.0m。主軸の傾きはＮ－2°－Ｅ。床面積は約13.6㎡（約4.1坪）を測る。Ｐ１・２・６にはすぐ脇に別の柱穴が見られるが、支柱の痕跡か立て替えの際の痕跡かは判然としない。また、ＳＡ080と切り合い関係にあるが、出土遺物、主軸方向などからは前後関係を確認する事は出来なかった。

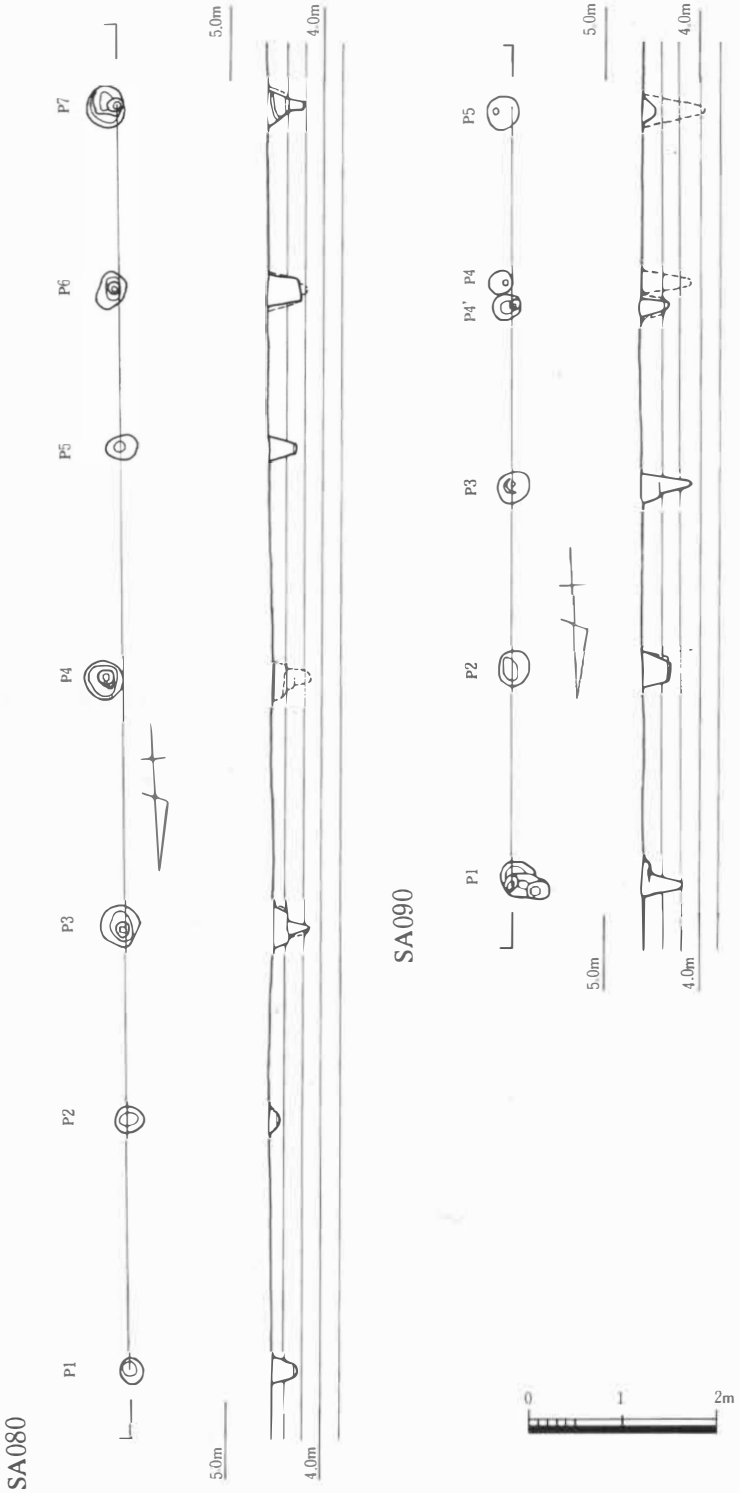


Fig. 5　ＳＡ０８０・０９０（Ｓ＝１／80）

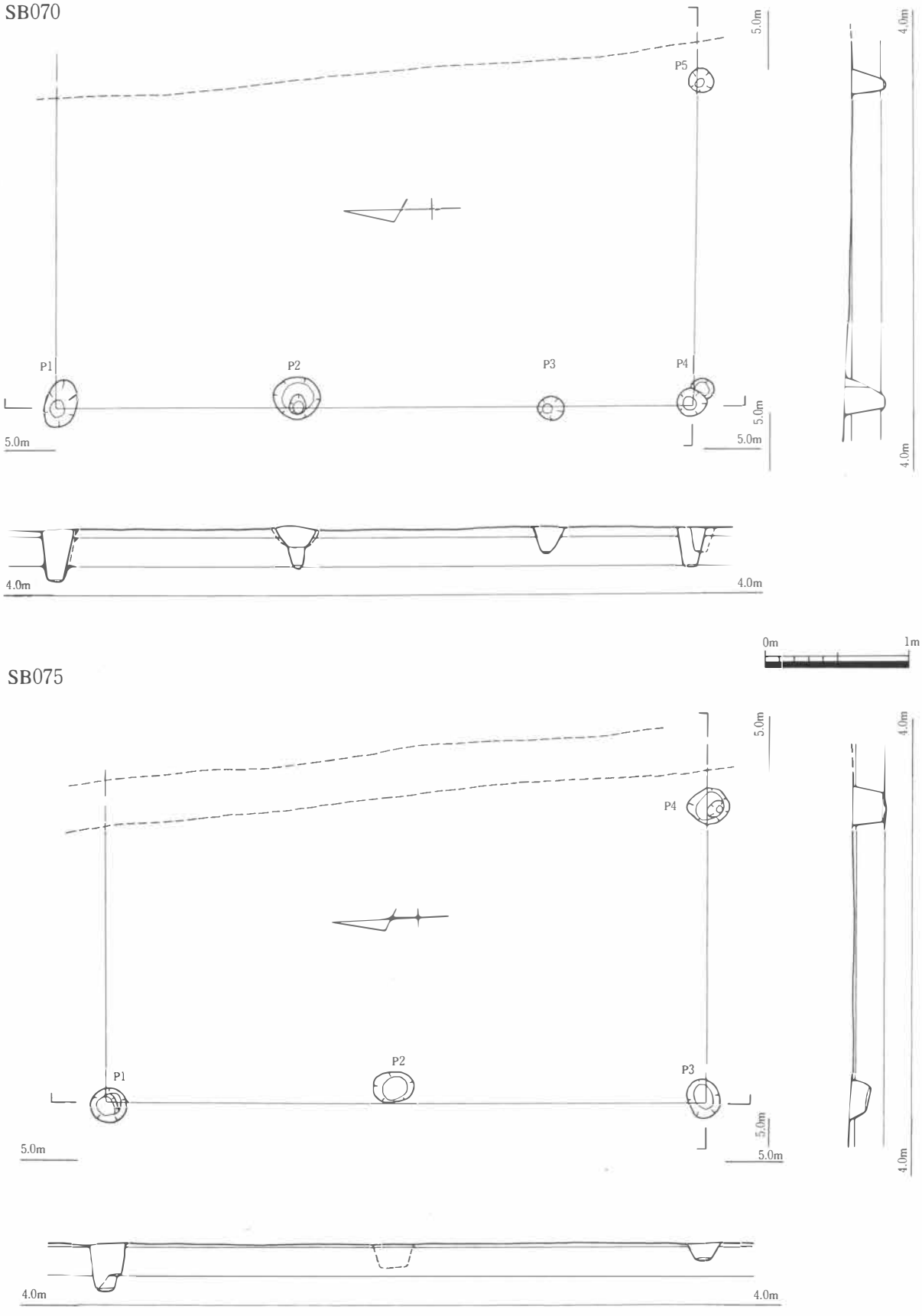


Fig. 6　ＳＢ０７０・０７５（Ｓ＝１／40）

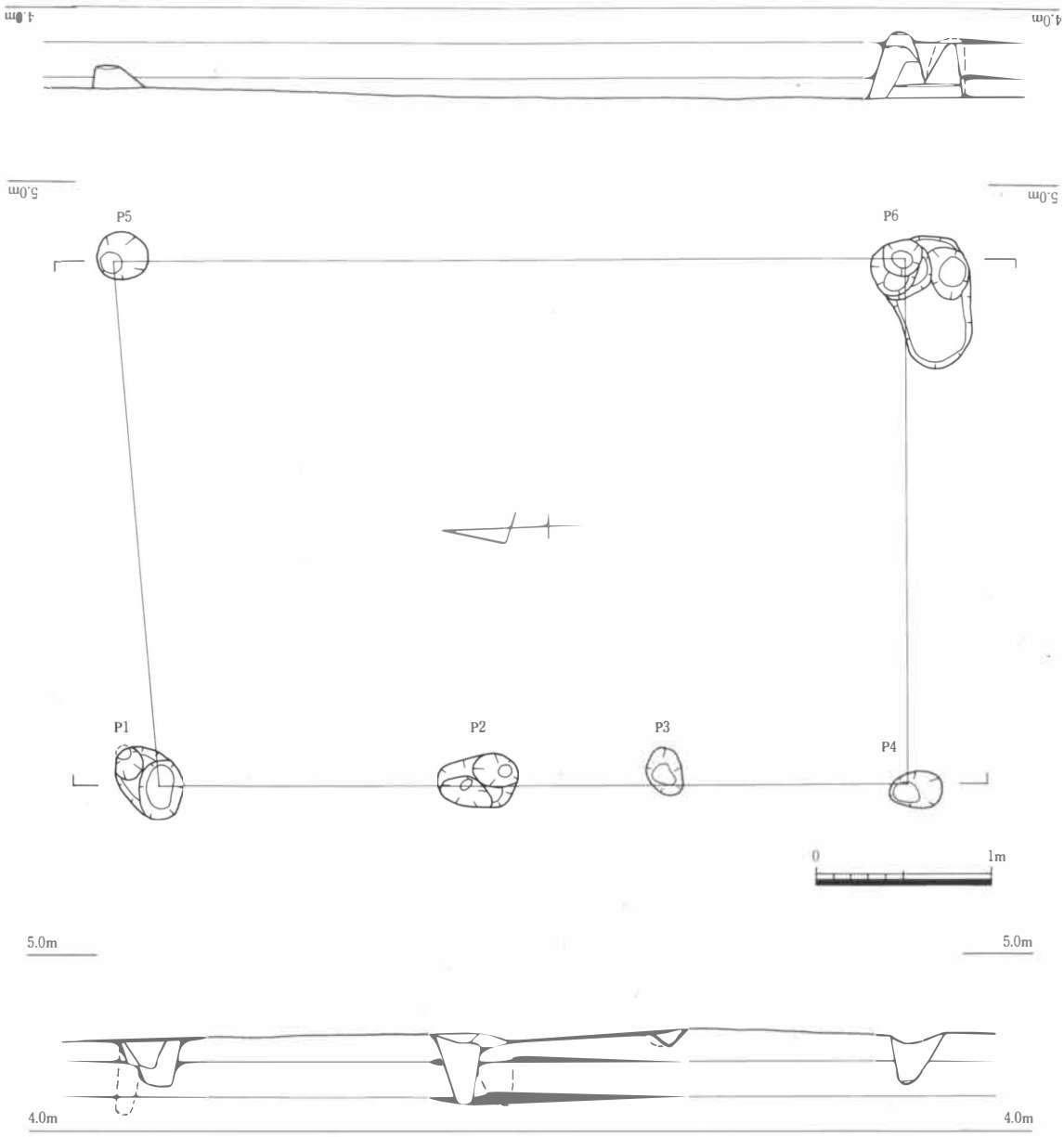


Fig. 7　ＳＢ０８５（Ｓ＝１／40）

この遺構からの出土遺物はない。

ＳＢ０９５（Fig. 8）

Ｄ９～Ｅ10グリットから検出された、１間×１間の掘立柱建物である。調査時には建物として認識しておらず、図面整理の際に確認された。それぞれの柱穴間の距離はＰ１－Ｐ２間（西辺）約2.4m、Ｐ３－Ｐ４間（東辺）約2.5m、Ｐ１－Ｐ３間（北辺）約2.6m、Ｐ２－Ｐ４間（南辺）約2.6m。主軸の傾きはＮ－１°30′－Ｅ。床面積は約6.3㎡（約1.9坪）を測る。Ｐ１・２は段を有する。

この遺構からはＰ２（Ｓ031）より木杭（Fig. 27－１）が出土している。

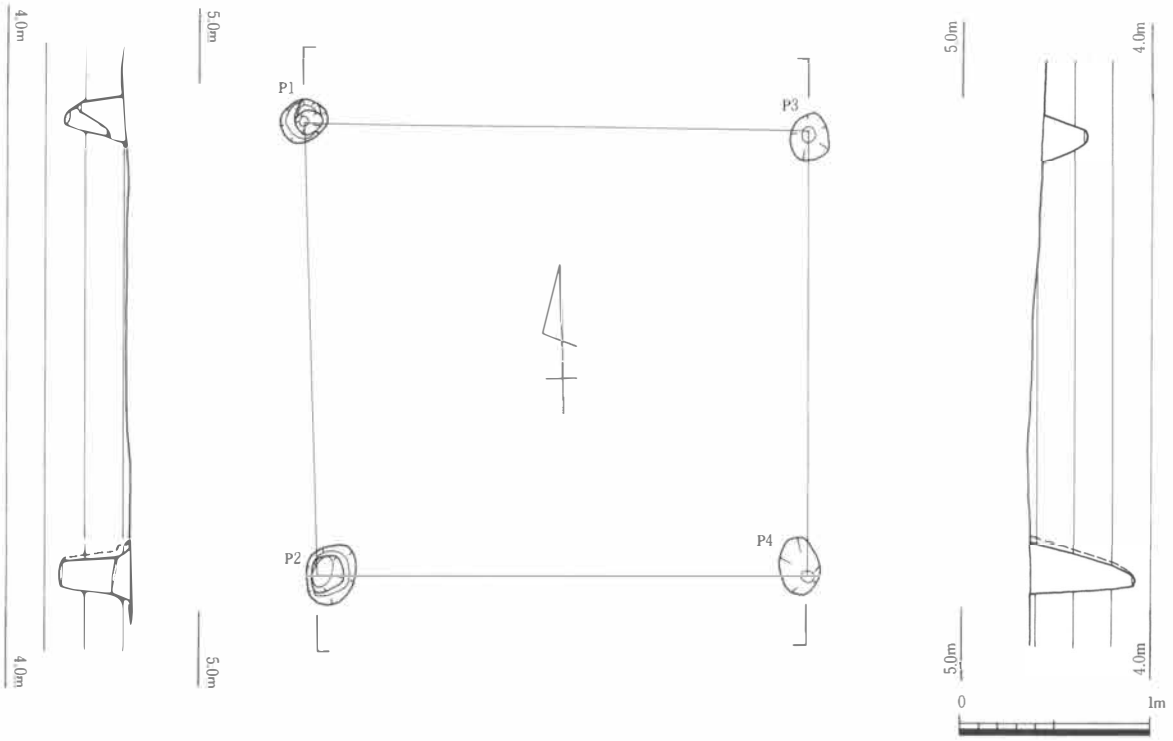


Fig. 8　ＳＢ０９５（Ｓ＝１／40）

ＳＢ１００（Fig. 9、ＰＩ.２－２）

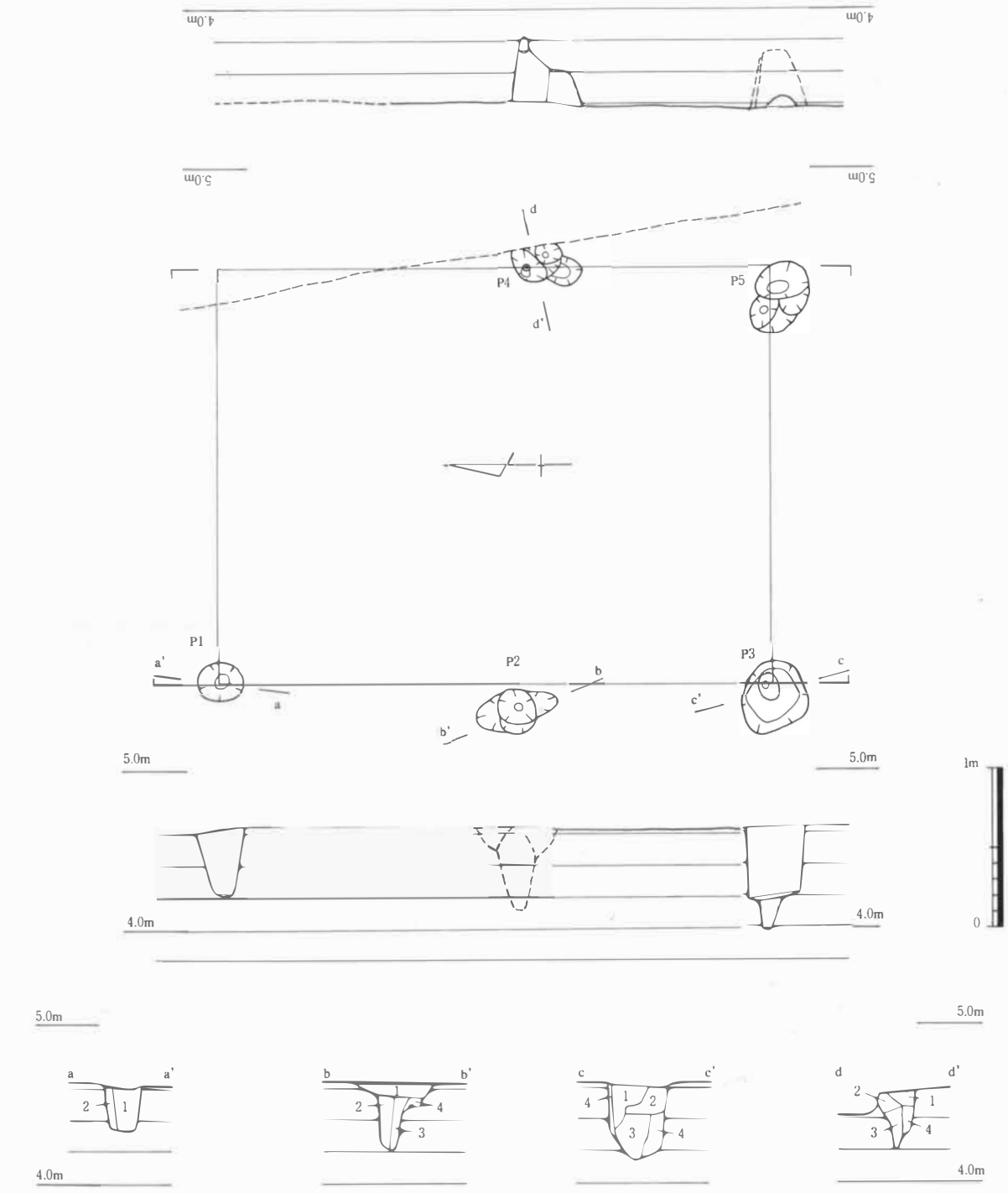
Ｂ４～Ｃ５グリットから検出された遺構である。当初は１間×１間の建物として調査したが、東西軸１間×南北軸２間の南北棟の建物になる可能性を残す。この場合、北東コーナー部分は調査区外へ伸びる。１間×２間とした場合の法量は、東辺約3.5＋αｍ、西辺約3.9m、南辺約3.0m、北辺約2.5＋αｍ。それぞれの柱穴間の距離はＰ１－Ｐ２間約1.9m、Ｐ２－Ｐ３間約1.6m、Ｐ４－Ｐ５間約1.6m、Ｐ２－Ｐ４間約2.8m、Ｐ３－Ｐ５間約2.5m。主軸の傾きはＮ－０°30′－Ｅ。床面積は約8.5㎡＋α（約2.6坪＋α）を測る。Ｐ３は段を有する。また、Ｐ２・４・５は複雑な掘形を有するが、柱の抜き取りもしくは立て替えに伴うものかは不明である。Ｐ１～４において土層観察を行なったが、柱根らしき痕跡を明確に確認する事は出来なかった。

この遺構からはＰ１より土師器片を出土しているが、図化しうる物ではない。

ＳＢ１０５（Fig. 10・11、ＰＩ.３－１）

Ｂ１～Ｄ４グリットから検出された、東西軸１間×南北軸３間の南北棟の掘立柱建物である。東辺は全長約6.2m、西辺は全長約6.2m、南辺は全長約3.9m、北辺は全長約3.6m。それぞれの柱穴間の距離はＰ１－Ｐ２間約2.5m、Ｐ２－Ｐ３間約1.7m、Ｐ３－Ｐ４間約2.1m、Ｐ５－Ｐ６間約1.9m、Ｐ６－Ｐ７間約2.2m、Ｐ７－Ｐ８間約2.2m、Ｐ１－Ｐ５間約3.6m（＝北辺）、Ｐ２－Ｐ６間約3.9m、Ｐ３－Ｐ７間約3.9m、Ｐ４－Ｐ８間約3.9m（＝南辺）。主軸の傾きはＮ－０°30′－Ｗ。床面積は約23.8㎡（約7.2坪）を測る。Ｐ１・３・４・５・８は段を有する。Ｐ２を除く全ての柱穴で土層観察を行なったが、柱根らしき痕跡を明確に確認する事は出来なかった。

この遺構からはＰ１（Ｓ039）より土師器土鍋（Fig. 27－３）、土師器片・瓦質土器茶釜（２）、Ｐ３（Ｓ024）より土師器片・瓦質土器片、Ｐ４（Ｓ034）より土師器片、Ｐ５（Ｓ038）より土師器片、Ｐ７（Ｓ036）より土師器片を出土しているが、Ｐ１出土品以外は図化しうる物ではない。



a－a'軸土層

1　淡灰茶色粘質土
2　淡灰茶色粘質土（地山土混入）

b－b'軸土層

1　淡灰茶色粘質土
　（黒色粒子少量混入）
2　淡灰茶色粘質土
　（1層より粘性強）
3　暗灰青色粘質土
　（黒色粒子少量混入）
4　淡灰緑色土（地山）

c－c'軸土層

1　暗灰茶色粘質土
2　暗灰茶色粘質土
　（1層より硬、地山混入）
3　暗灰茶色粘質土（2層より暗）
4　淡灰緑色土（地山）

d－d'軸土層

1　淡灰茶色粘質土
2　淡灰茶色粘質土（黄色土混入）
3　淡灰茶色粘質土（灰色味強）
4　暗灰茶色粘質土

Fig. 9　ＳＢ１００（Ｓ＝１／40）

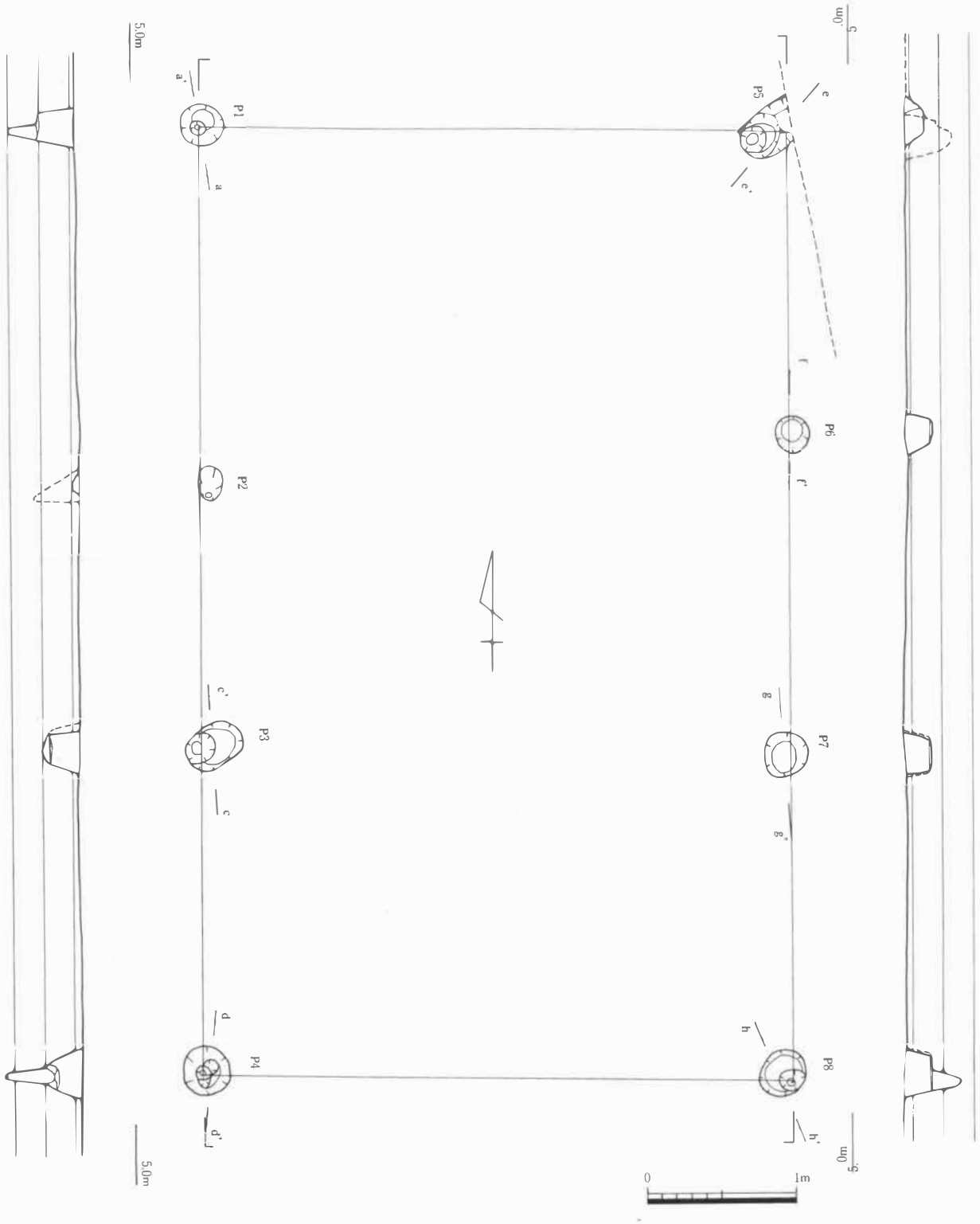
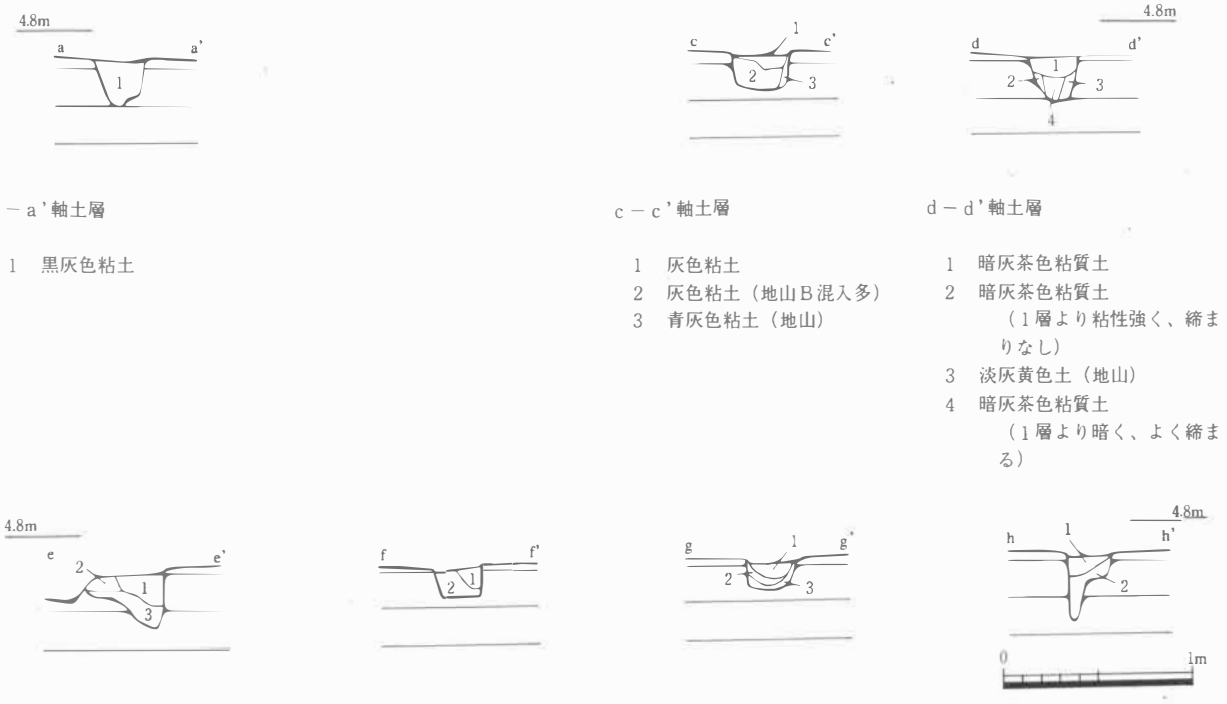


Fig. 10　ＳＢ１０５（Ｓ＝１／40）

ＳＢ１１０（Fig.12・13、ＰＩ.３－２）

Ｄ２～Ｅ５グリットから検出された、東西軸１間×南北軸２間の南北棟の掘立柱建物である。東辺は全長4.1m、西辺は全長約4.2m、南辺は全長約2.1m、北辺は全長約2.1m。それぞれの柱穴間の距離はＰ



a－a'軸土層

1　黒灰色粘土

c－c'軸土層

1　灰色粘土
2　灰色粘土（地山B混入多）
3　青灰色粘土（地山）

d－d'軸土層

1　暗灰茶色粘質土
2　暗灰茶色粘質土
（1層より粘性強く、締まりなし）
3　淡灰黄色土（地山）
4　暗灰茶色粘質土
（1層より暗く、よく締まる）

e－e'軸土層

1　淡灰茶色粘質土
（黄色粒子含む）
2　淡灰茶色粘質土
（黒色粒子含む）
3　暗灰黄色土（地山）

f－f'軸土層

1　暗灰茶色粘質土
2　淡灰黄色土（地山）

g－g'軸土層

1　暗灰茶色粘質土
2　暗灰茶色粘質土
（1層より暗、締まりよい）
3　淡灰黄色土（地山）

h－h'軸土層

1　暗灰茶色粘質土
（黒色粒子少量含む）
2　暗灰茶色粘質土
（黄色粒子含む）

Fig. 11　ＳＢ１０５　柱穴土層断面（Ｓ＝１／40）

１－Ｐ２間約2.2m、Ｐ２－Ｐ３間約2.0m、Ｐ４－Ｐ５間約2.1m、Ｐ５－Ｐ６間約2.0m、Ｐ１－Ｐ４間（＝北辺）約2.1m、Ｐ２－Ｐ５間約2.1m、Ｐ３－Ｐ６間（＝南辺）約2.1m。主軸の傾きはＮ－１°－Ｅ。床面積は約9.0㎡（約2.7坪）を測る。全ての柱穴が段を有し、Ｐ３はひとつの柱穴に２つの柱痕跡と思われる小ピットを有する。この小ピットの法量はほぼ等しいため、建物を復元した際に違和感のない西側のものを主柱穴とした。ここでは全ての柱穴において土層観察を行なった結果、Ｐ２を除く全ての柱穴において柱痕跡を確認した。その結果、Ｐ１・３・４・５は柱の除去後、人為的に埋め戻されており、立て替えは行なわれていないと判断される。

この遺構からは、Ｐ４（Ｓ044）より焼粘土塊、Ｐ５（Ｓ043）より土師器片、Ｐ６（Ｓ019）より焼粘土塊（Fig. 27－４）と土師器片を出土したが、Ｐ６の焼粘土塊以外は図化しうる物ではなかった。

ＳＢ１１５（Fig. 14、ＰＩ.４－１）

Ｅ３～Ｆ４グリットから検出された、東西１間×南北２間の南北棟の掘立柱建物である。東辺の中央部には、西辺中央部のＰ２とほぼ同じ大きさの円形のシミが確認されており、ここに簡易的な柱を設けていた可能性がある。このシミ部分は数㎝掘り下げると地山土となった為、遺構として図化してはいない。東辺の全長約3.6m、西辺の全長約3.9m、南辺の全長約2.9m、北辺の全長約2.9m。それぞれの柱穴間の距離はＰ１－Ｐ２間約2.0m、Ｐ２－Ｐ３間約1.9m、Ｐ４－Ｐ５間（＝東辺）約3.6m、Ｐ１－Ｐ４間（＝北辺）約2.9m、Ｐ３－Ｐ５間（＝南辺）約2.9m。主軸の傾きはＮ－０°30′－Ｅ。床面積は約10.7㎡（約3.2坪）を測る。全ての柱穴に段を有する。ここでは西辺のＰ１～３において土層観察を行なった

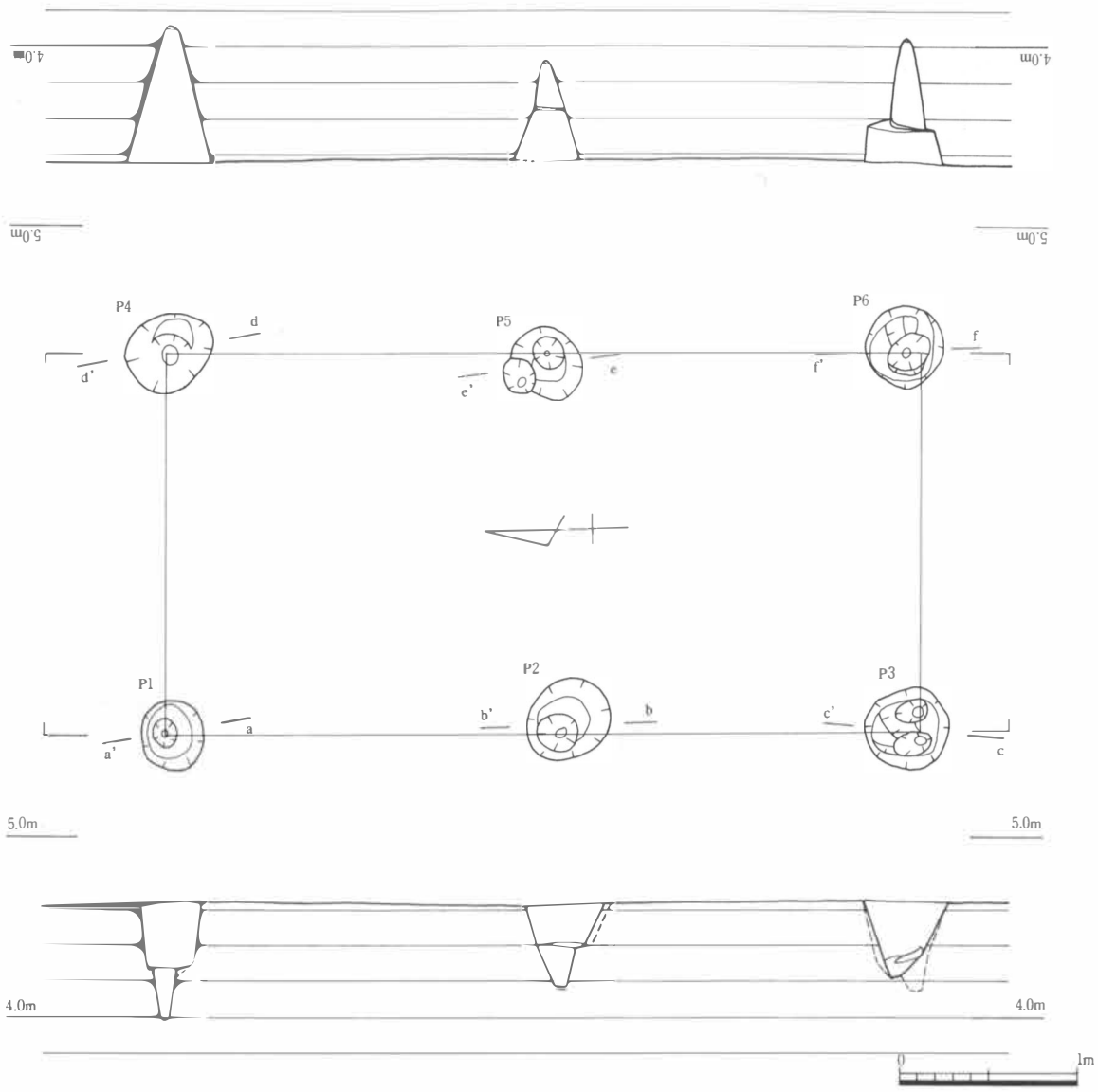


Fig. 12　ＳＢ１１０（Ｓ＝１／40）

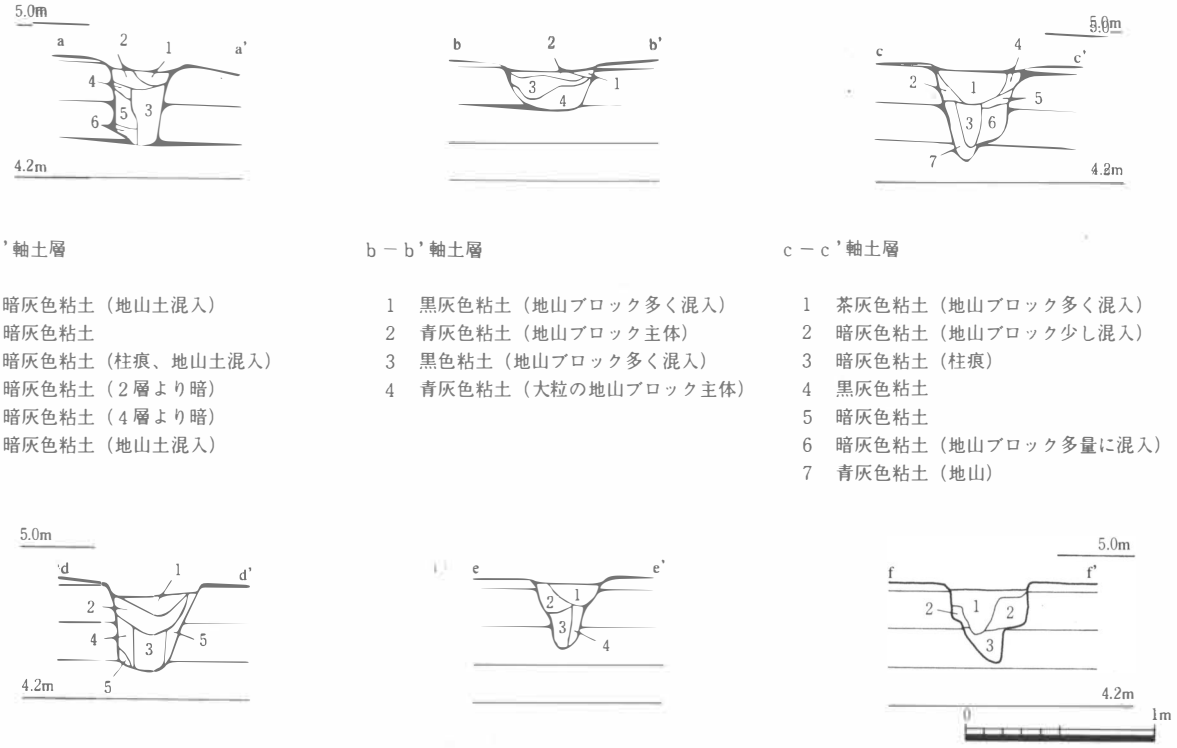
が、十分に掘り下げていなかった為、立て替えや柱材の抜き取り痕などは確認できなかった。

この遺構からはＰ１（Ｓ047）より瓦質土器片を出土したが、図化しうる物ではない。

溝状遺構

ＳＤ００１（Fig. 15、ＰＩ.４－２、５－１）

調査区の北端、Ｄ21～Ｊ21にかけて検出された東西方向に伸びる溝状の遺構である。検出部分の全長約18.2m、上幅約1.5m＋α、下幅約0.4～1.2m＋α、検出面からの深さ約0.05～0.35m。主軸の傾きはＮ－86°－Ｗを測る。断面形は箇所毎に異なっており一様ではない。西側はＳＸ010により切られ、東側はＤ21グリットで完全に調査区外へと抜ける。また北半分は検出時点から調査区外であり、その全景は見えていない。２ケ所において土層の観察を行ない、数回の掘り直しが行なわれている事が確認できた。またＨ21グリット部分で円形と思われる下位遺構（ＳＫ064）を確認したが、調査時のミスにより、遺物の選別はほとんど出来ていない。



a－a'軸土層

1　暗灰色粘土（地山土混入）
2　暗灰色粘土
3　暗灰色粘土（柱痕、地山土混入）
4　暗灰色粘土（2層より暗）
5　暗灰色粘土（4層より暗）
6　暗灰色粘土（地山土混入）

b－b'軸土層

1　黒灰色粘土（地山ブロック多く混入）
2　青灰色粘土（地山ブロック主体）
3　黒色粘土（地山ブロック多く混入）
4　青灰色粘土（大粒の地山ブロック主体）

c－c'軸土層

1　茶灰色粘土（地山ブロック多く混入）
2　暗灰色粘土（地山ブロック少し混入）
3　暗灰色粘土（柱痕）
4　黒灰色粘土
5　暗灰色粘土
6　暗灰色粘土（地山ブロック多量に混入）
7　青灰色粘土（地山）

d－d'軸土層

1　灰色粘土
2　灰色粘土（地山ブロック多く含む）
3　灰色粘土（柱痕）
4　暗灰色粘土
5　青灰色粘土（地山）

e－e'軸土層

1　暗灰色粘土（地山ブロック多く含む）
2　黒灰色粘土（地山ブロック多量に含む）
3　黒灰色粘土（柱痕）
4　青灰色粘土（地山土主体）

f－f'軸土層

1　青灰色粘土（地山ブロックを多量に含む）
2　暗灰色粘土
3　黒灰色粘土（柱痕）

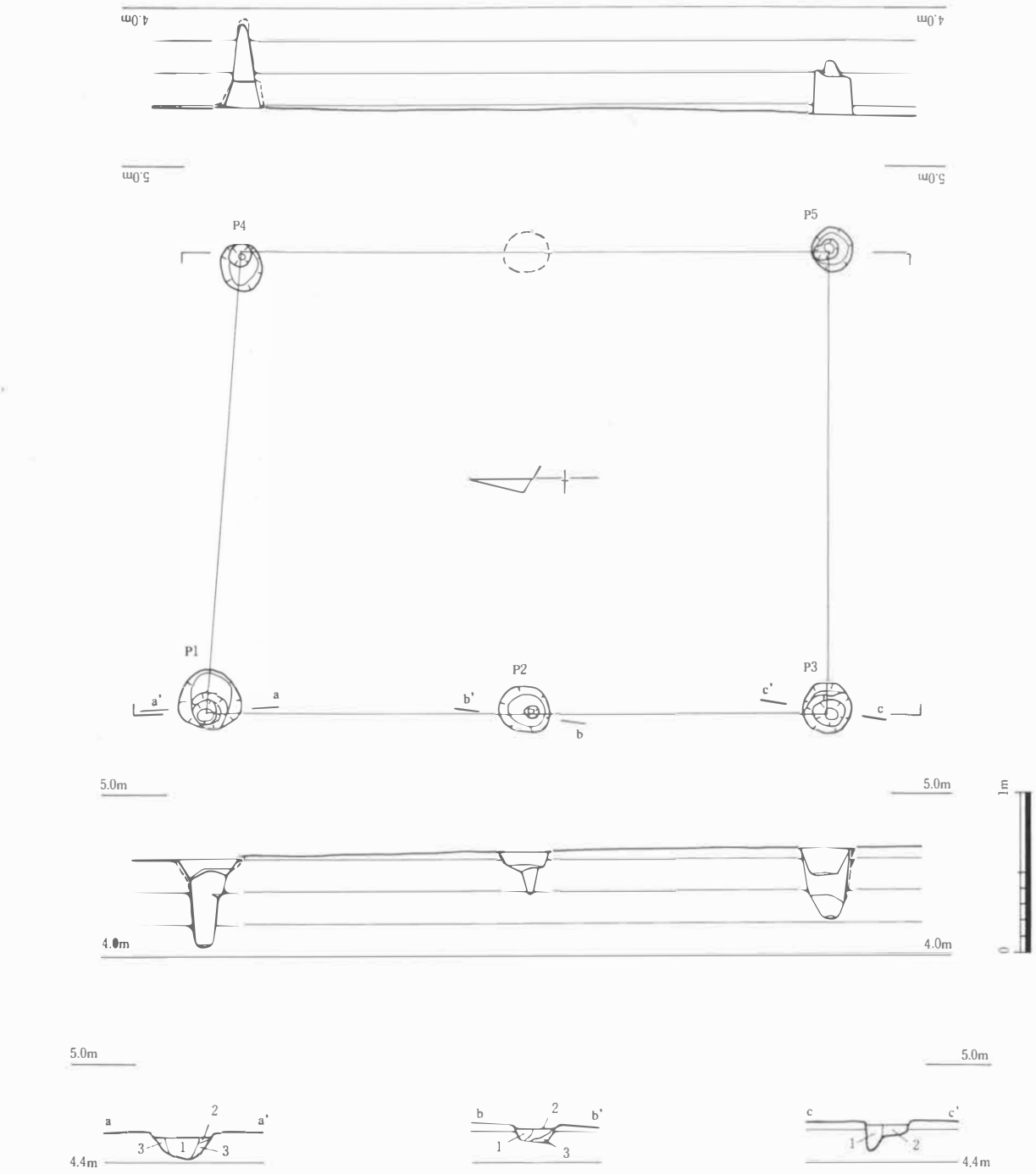
Fig. 13　ＳＢ１１０　柱穴土層断面（Ｓ＝１／40）

この遺構からは弥生後期の甕の口縁部、須恵器鉢？、土師器土鍋・茶釜・小皿・土師器片、瓦質土器茶釜・把手・火鉢・瓦質土器片、赤瓦、陶器片、焼石が出土している（Fig. 28）。また、ＳＫ064からも土鍋や土錘を出土したが、これらは調査時に壁面の崩落によって混入した可能性が高い（Fig. 28）。

ＳＤ００５（Fig. 16・17、ＰＬ.5－2～8－1）

Ｊ1～19グリットにかけて検出された、南北方向に伸びる溝状の遺構である。南端は調査区外へ伸び、途中ＳＤ030・027・025・017と接続しながら若干東側に振れた後、ＳＸ010に向かい西側に弧状に走る。北端部はＳＸ010の東南コーナー部に接している。検出部分の全長約55.1m、上幅約1.1～1.7m、下幅約0.7～1.2m。検出面からの深さ約0.25～0.6m。主軸の傾きは直線部分でＮ－2°－Ｅ、北端部分でＮ－28°－Ｗを測る。断面形は部分毎に一様ではないが、逆台形状の箇所が最も多い。検出時点では一本の溝として検出されたが、遺構下部において北側はＳＤ025と、南側はＳＤ027と一連の遺構となり、両者の間はかなり浅くなっている事が判明した。埋土からは、これが水を伴う遺構であり、掘り直しも幾度か行なわれて、自然埋没したことが窺われる。

この遺構の遺物は下位遺構の関係からＳＤ025との接点に近いｄ－ｄ'軸より北と南でとりあえず分離はしているが、分層面に拠った立体的な取り上げは行なえていない。出土品にはｄ－ｄ'軸以北より須恵器擂鉢、土師器茶釜・皿・擂鉢・鉢・鍋、土師器片、瓦質土器茶釜・羽釜・鉢・鍋・火鉢、白磁碗・皿、青磁碗、染付、陶器皿、陶器片、焼石、板材、挽臼を（Fig. 29～31）、ｄ－ｄ'軸以南からは須恵器擂鉢、



a－a'軸土層

1　茶灰色粘土
2　暗灰色粘土
3　青灰色粘土（地山）

b－b'軸土層

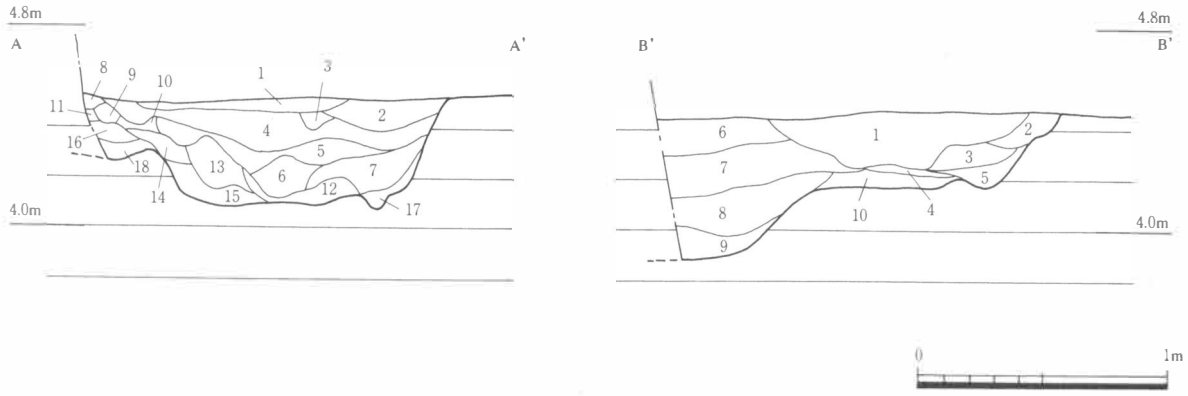
1　青灰色粘土（地山ブロック多い）
2　暗灰色粘土
3　青灰色粘土
（地山ブロック多い、崩落土？）

c－c'軸土層

1　灰色粘土（地山ブロック少し混入）
2　青灰色粘土（地山ブロック主体）

Fig. 14　ＳＢ１１５（Ｓ＝１／40）

須恵器片、土師器鍋・皿・茶釜、土師器片、瓦質土器茶釜・羽釜・火鉢・鍋・捏ね鉢・鉢、瓦質土器片、白磁皿、青磁碗、青磁片、染付片、焼石、挽臼を出土している（Fig. 32～33）。



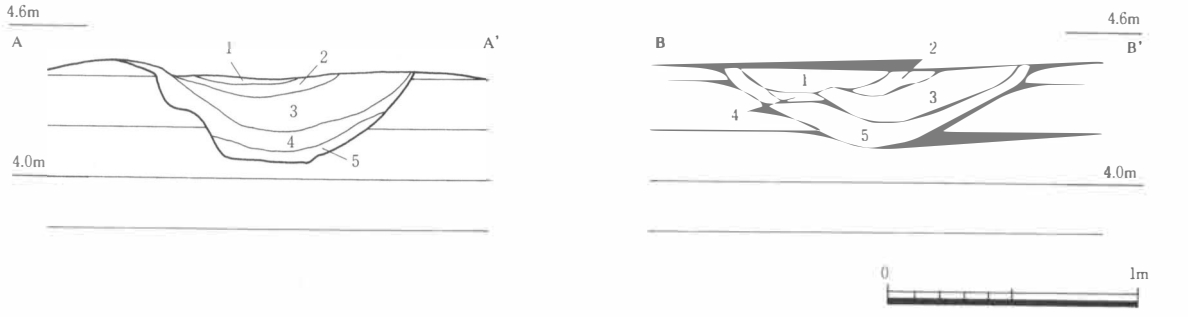
A－A'軸土層

1　灰色粘土・暗灰色粘土混合層
2　暗灰色粘土
3　暗灰色粘土・黒色粘土混合層
4　灰色粘土（マンガン粒多い）
5　灰色粘土（地山土の混入に因り黄色味を帯びる、マンガン粒多い）
6　黒色粘土（マンガン粒多い）
7　灰色粘土（マンガン粒多い）
8　灰色粘土（4層よりマンガン粒少なめ）
9　黄色粘土（地山ブロック）
10　黒灰色粘土（マンガン粒多い）
11　黒灰色粘土（マンガン粒多い）
12　白灰色粘土（マンガン粒・炭化物を含む）
13　黒灰色粘土（マンガン粒多い、地山ブロックを少量含む）
14　暗灰色粘土（マンガン粒多い、地山ブロックを少量含む）
15　白灰色粘土（マンガン粒・炭化物を含む）
16　灰色粘土（マンガン粒多い）
17　灰色粘土（暗灰色粘土ブロック・黒灰色粘土ブロックを含む）
18　オリーブ色粘土（マンガン粒多い）

B－B'軸土層

1　暗灰色粘土（マンガン粒多い）
2　暗灰色粘土（マンガン粒多い、地山ブロック含む）
3　灰色粘土（マンガン粒多い）
4　灰色粘土（3層より色調明）
5　灰色粘土（4層より色調明、マンガン粒多い）
6　灰色粘土（マンガン粒多い）
7　黄灰色粘土（マンガン粒多い）
8　灰色粘土（マンガン粒多い）
9　灰色粘土
10　灰色粘土（地山ブロック多く混入）

Fig. 15　ＳＤ００１　土層断面（Ｓ＝１／30）



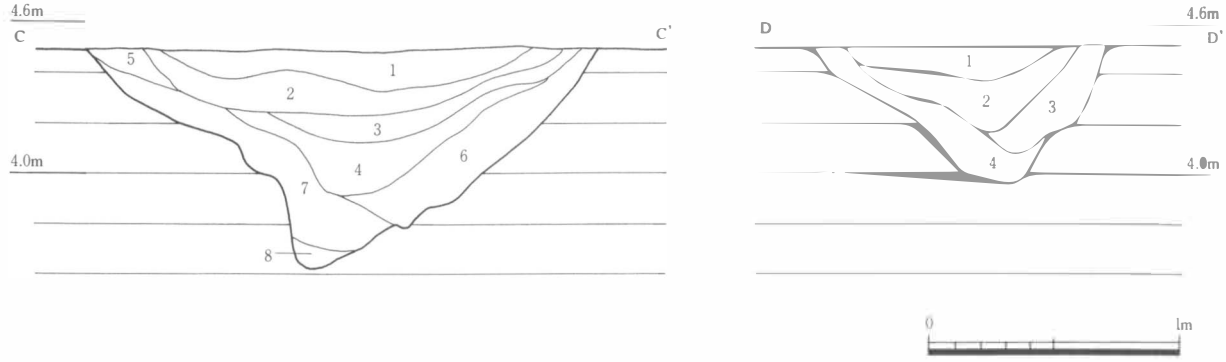
A－A'軸土層

1　暗灰色粘土（マンガン粒多い）
2　灰色粘土（マンガン粒・炭化物多い）
3　明灰色粘土（マンガン粒多い）
4　灰色粘土（マンガン粒多い）
5　灰色粘土・地山ブロック混合層

B－B'軸土層

1　暗灰茶色粘質土（酸化鉄含む）
2　暗灰茶色粘質土（1層より締まり緩い、酸化鉄含む）
3　暗灰黄色粘質土（酸化鉄多く含む、炭化物を少量含む）
4　暗灰茶色粘質土（1・2層より茶色味が強い、酸化鉄含む）
5　暗灰茶色粘質土（1・2層より色調暗、下部に地山ブロック含む）

Fig. 16　ＳＤ００５　土層断面（1）（Ｓ＝１／30）

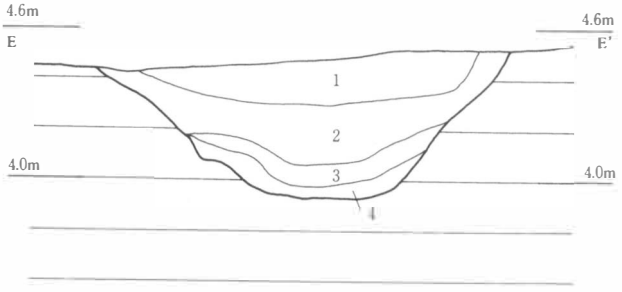


C－C'軸土層

1　灰色粘土（橙色粘土を多く含む）
2　灰色粘土（マンガン粒多い、橙色粘土を少し含む）
3　灰色粘土（ラミナ状堆積）
4　灰色粘土
5　灰色粘土
6　灰色粘土・白色粘土混合層（地山土主体）
7　灰色粘土・白色粘土混合層（埋土主体）
8　青灰色シルト

D－D'軸土層

1　青灰色粘土（マンガン粒多い）
2　暗灰色粘土（炭化粒少し含む）
3　暗灰色粘土（炭化物を少し含む、小粒の粘土塊を多く含む）
4　暗灰色粘土・地山粘土混合層



E－E'軸土層

1　赤灰色粘土（マンガン粒多い）
2　灰色粘土（マンガン粒少し含む）
3　灰色粘土（ラミナ状、締まり緩い）
4　灰色粘土（地山ブロック多い）

Fig. 17　ＳＤ００５　土層断面（２）（Ｓ＝１／30）

ＳＤ０１７（Fig.18）

Ｈ13～Ｉ14グリットから検出された、東西方向に伸びてＳＤ005とＳＫ015を結ぶ、溝状の遺構である。検出部分の全長約2.4m、上場幅約0.5～1.7m、下場幅約0.1～0.2m、検出面からの深さ約0.2～0.35m。主軸の傾きはＮ－87°－Ｗを測る。断面形は逆台形だが、ＳＫ015側に向かい平面、断面共にラッパ状に広がっている。用途的にはＳＤ005より水をＳＫ015へ引き入れる為の物と考えられるが、埋土は灰色粘土からなる単一埋土で、黒色粘土・白色粘土ブロックの混入が多く、流水を伴う状況ではない。

この遺構からは土師器土鍋、土師器片、瓦質土器片を出土している（Fig. 34－１～３）。

ＳＤ０２０（Fig.19、ＰＬ.8－２、９－１）

Ｆ17～Ｈ17グリットにかけて検出された、東西方向に走る溝状の遺構である。南側でＳＫ015に切られているが、切り合い状況は調査中に遺構の埋土が崩落した為一部不明確である。全長約6.7m、上場幅約0.8～0.95m、下場幅約0.35～0.6m、検出面からの深さ約0.15～0.25m。主軸はほぼ東西方向に測る。断面

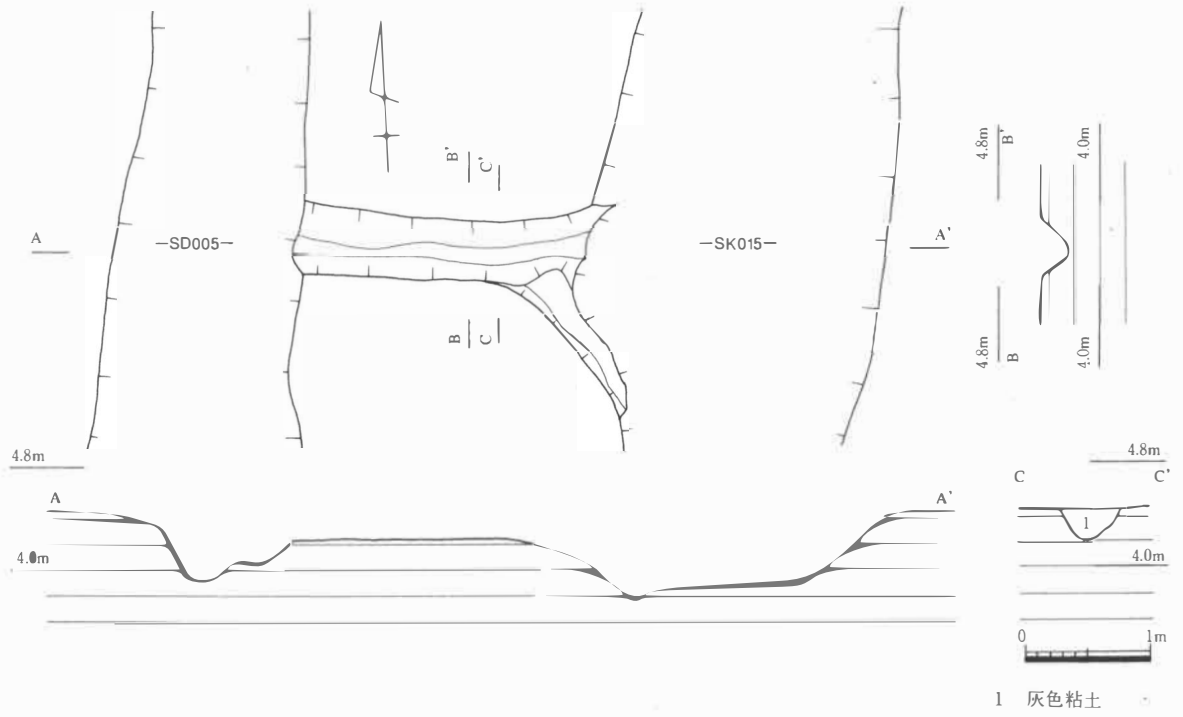


Fig. 18 ＳＤ０１７（Ｓ＝１／60）

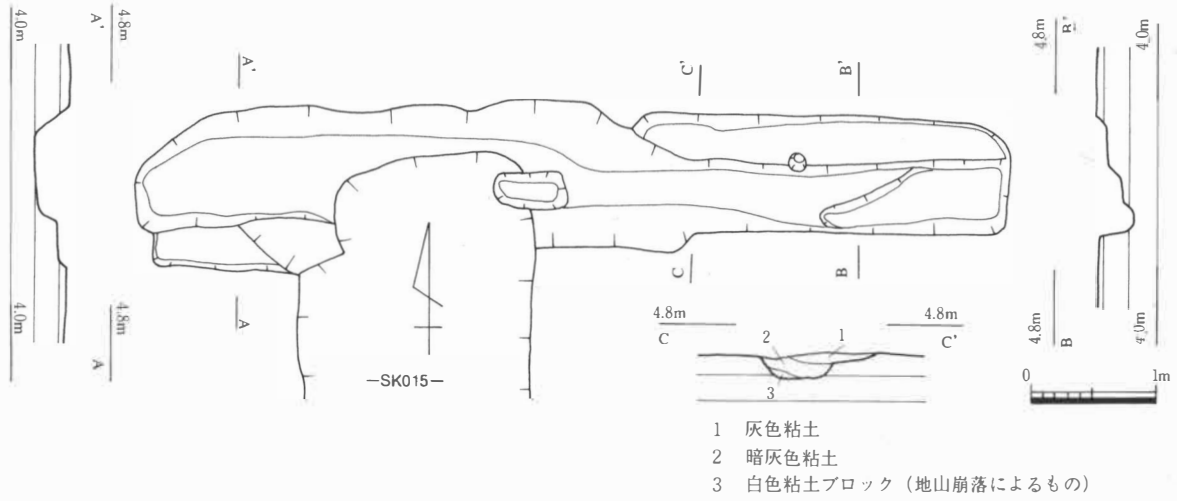
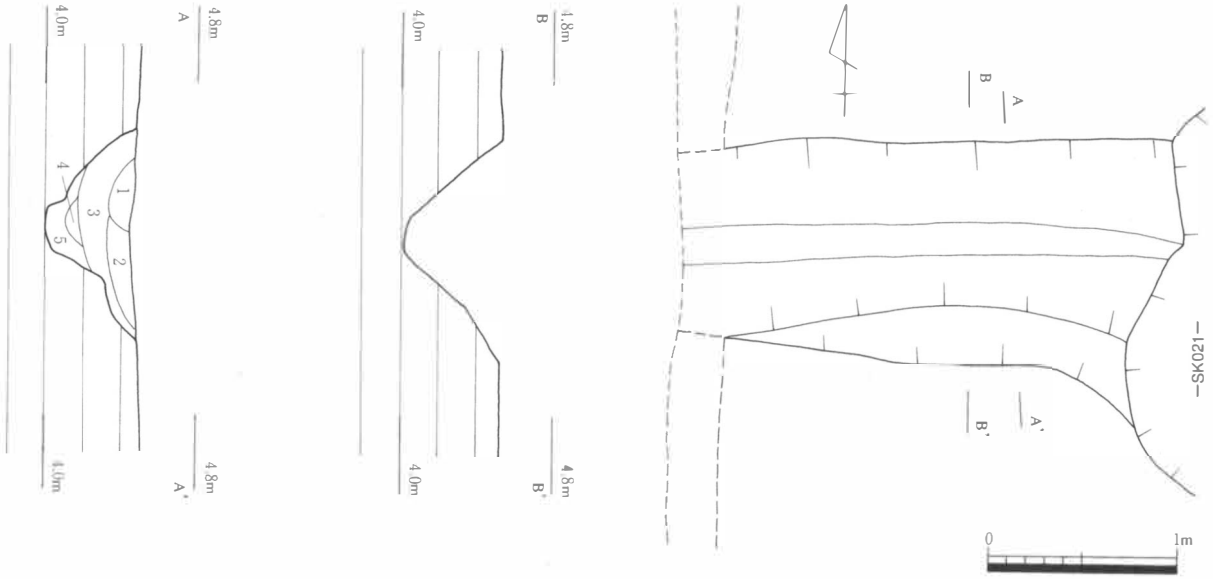


Fig. 19 ＳＤ０２０（Ｓ＝１／60）

形は逆台形状となるが、東側では北に、西側では南側にテラス状の段を有している。この段は埋土観察の結果、掘り直しの際に拡張されたものと推察される。埋土の状況から流水に伴うような埋土は確認できず、埋没状況も不明である。

この遺構からは土師器鍋・茶釜・羽釜・火鉢、土師器片、瓦質土器鉢、瓦器片、青磁片、染付碗、焼粘土塊などが出土している（Fig. 34－４～10）。



1　暗灰色粘土（2層と同一？）
2　暗灰色粘土（1層と同一？）
3　黒色粘土
4　暗灰色粘土
5　黒色粘土

Fig. 20　ＳＤ０２２（Ｓ＝１／40）

ＳＤ０２２（Fig. 20、ＰⅠ.9－2）

Ｋ７～Ｌ７グリットから検出された、東西方向に伸びる溝状の遺構である。東側はＳＫ021と接しており、西側は調査区外へ伸びる。検出部分の全長約2.6m、上場幅約1.0～1.5m、下場幅約0.1～0.2m、検出面からの深さ約0.5m。主軸の傾きはＮ－87°30′－Ｗを測る。断面形は逆台形状だが、南面には角が付随している。東側へ向かい緩やかに傾斜しており、用途的にはＳＤ017同様、ＳＫ021へ導水する為の施設だと考えられるが、埋土からは流水の痕跡は認められない。埋土観察の結果、一度の掘り直しが行なわれたものと考えられる。埋没状況は自然埋没と思われるが明確ではない。

この遺構からは土師器片を出土しているが、図化しうる物ではない。

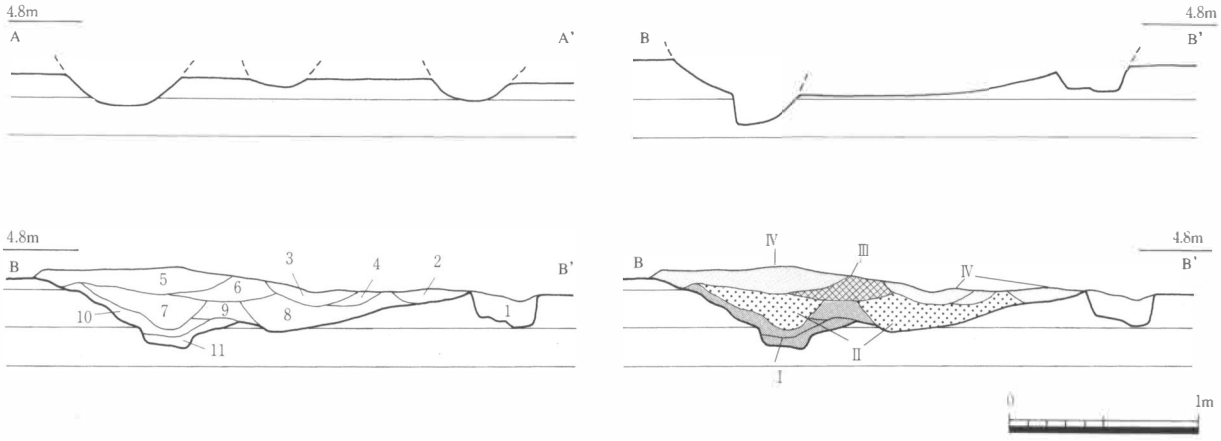
ＳＤ０２５群（Fig. 21、ＰⅠ.10）

Ｃ７～Ｊ８グリットから検出された、東西方向に伸びる溝の一群で、ＳＤ025～028がこれに当たる。西側ではそれぞれ分離した溝となっているが、東部分で分離できない状態となっているのでここではひとつのグループとして報告する。検出時に確認したＳＤ029は後にＳＤ027と同一であることが確認された為、ＳＤ027に統合した。

ＳＤ025はＣ７～Ｊ８グリット、遺構群の北に位置しており、検出時点では最も明確だった遺構である。西側はＳＤ005に切られているが、遺構下部ではＳＤ005北側と同一の溝であることが確認された。東側は調査区外へと伸びている。検出部分の全長約13.7m、上場幅約0.7m、下場幅約0.1～0.3m、検出面からの深さ約0.3～0.4m。主軸の傾きはＮ－84°－Ｗを測る。断面形はほぼ逆台形となる。この溝は最低３回程掘り直しが行なわれており、２回目の際の埋土には滞水の痕跡が認められる。

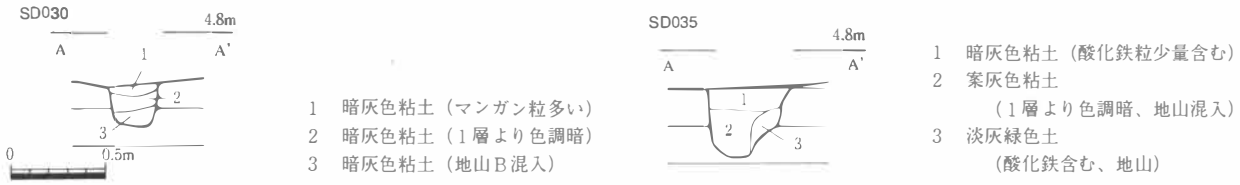
この遺構からの出土遺物には須恵器甕・擂鉢、土師器鍋・茶釜・鉢、土師器片、瓦質土器捏ね鉢・茶釜・羽釜・鉢・鍋、瓦器片、青磁碗・壷、青磁片、磁器片、陶器碗、砥石、挽臼、焼石などがある（Fig. 35・36）。

ＳＤ026はＨ７～Ｊ７グリットから検出された。ＳＤ025とＳＤ027に挟まれ、東側のＳＤ028と同一の



1　暗灰色粘土（地山粘土ブロック多く含む。ＳＤ027埋土）
2　黄灰色粘土・暗灰色粘土混合層（ＳＤ027か？）
3　灰色粘土（下部ラミナ状。ＳＤ028Ⅲ期埋土）
4　灰色シルト（ＳＤ028Ⅲ期埋土）
5　暗灰色粘土（ＳＤ025Ⅲ期埋土）
6　黄灰色粘土（Ⅲ期地山？）
7　灰色シルト（ラミナ状。ＳＤ025Ⅱ期埋土）
8　黄灰色粘土（ＳＤ028Ⅱ期埋土）
9　灰色粘土（ＳＤ025Ⅰ期埋土）
10　暗灰色粘土（ＳＤ025Ⅰ期埋土）
11　暗灰色粘土（10層より色調暗、ＳＤ025Ⅰ期埋土）

Fig. 21　ＳＤ０２５群　（Ｓ＝１／40）



1　暗灰色粘土（マンガン粒多い）
2　暗灰色粘土（１層より色調暗）
3　暗灰色粘土（地山Ｂ混入）

1　暗灰色粘土（酸化鉄粒少量含む）
2　案灰色粘土
　（１層より色調暗、地山混入）
3　淡灰緑色土
　（酸化鉄含む、地山）

Fig. 22　ＳＤ０３０・０３５土層断面（Ｓ＝１／40）

遺構とも考えられる。検出部分の全長約2.5m上場幅約0.2～0.35m、下場幅約0.1～0.25m、検出面からの深さ約0.05m。主軸の傾きはＮ－84°－Ｗを測る。断面形は浅い皿状となる。遺構の残存状態が極めて悪く、埋土観察には至っていない。

この遺構からは土師器片を出土しているが、図化しうる物ではなかった。

ＳＤ027はＣ７～Ｊ７グリットから検出された。遺構群の中では最も南側に位置する遺構である。検出当初は試掘トレンチが遺構を分断していた為、東側をＳＤ029、西側をＳＤ027としたが、トレンチ下部で両者が同一遺構である事が判明したので以後ＳＤ027に統一された。西側はＳＤ005に切られているが、遺構下部ではＳＤ005南側と同一の溝となる。東側はＳＤ025と異なり、Ｃ７グリットで切れている。検出部分での全長約13.3m、上場幅約0.4～0.75m、下場幅約0.1～0.4m、検出面からの深さ約0.1～0.25m。主軸の傾きはＮ－85°－Ｗを測る。断面形は方形、もしくは逆台形状となる。埋土観察の結果、１層と２層の関係を明瞭に出来ず、掘り直しの有無は判断できない。

この遺構からは土師器土鍋、土師器片、瓦質土器片、黒耀石などを出土している（Fig.37－４～６）。

ＳＤ028はＤ７～Ｈ７グリットから検出された。ＳＤ025とＳＤ027の間に挟まれ、前述のようにＳＤ026と同一遺構とも考えられる。検出時点ではでは遺構部分は明瞭であったが、完掘状況では不明瞭となり、形状は判然としない。検出時点での全長約8.0m、上場幅約0.4m、下場幅約0.3m、検出面からの深さ約0.1m。主軸の傾きはＮ－87°30′－Ｗを測る。断面形は不定形である。この遺構も数回の掘り直しが認められるが、最初に形成されたのはＳＤ025の１ないし２回目の掘り直しの際である。

この遺構からは土師器土鍋・皿、土師器片、瓦質土器片、陶器碗を出土している。陶器碗はＳＤ025出土の物と同一個体である可能性が高い（Fig. 37－１～３）。

ＳＤ０３０（Fig. 22）

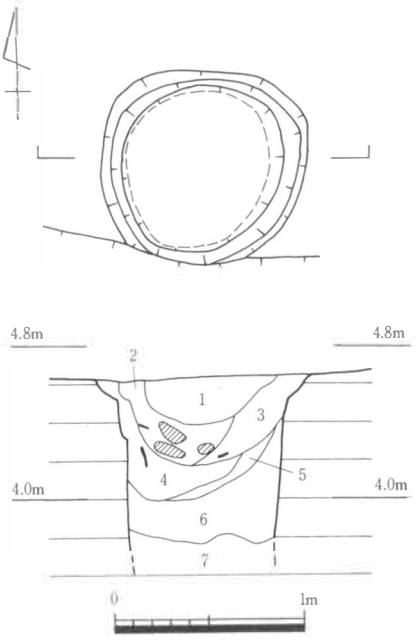
Ｇ２～Ｊ２グリットから検出された東西方向に伸びる細長い溝で、西側はＳＤ005に切られる。全長約6.7m、上場幅約0.25～0.3m、下場幅約0.15～0.2m、検出面からの深さ約0.3～0.35m。主軸の傾きはＮ－86°－Ｗを測る。断面形は長方形に近い逆台形となる。埋土からは滞水などの痕跡は認められない。区画のみの溝か。

この遺構からは土師器鍋・火鉢、焼粘土塊、土師器片などを出土している（Fig. 37－７～９）。

ＳＤ０３５（Fig. 22、ＰＩ.11－１）

Ｄ１～Ｇ２グリットから検出された、東西方向に伸びる溝である。中央付近でＳＥ040に切られ、その西側でカギ状に北に折れている。西側の延長には軸を同じうしてＳＤ030があり、両者の間になんらかの共通した意図を感じられる。ＳＤ030とＳＤ035の間は約0.5mである。全長約7.5m、上場幅約0.3～0.5m、下場幅約0.2～0.3m、検出面からの深さ約0.15～0.3m。主軸の傾きはＮ－87°－Ｗを測る。断面形は長方形に近い逆台形状となる。埋土観察における滞水などの有無は不明である。ＳＤ030と同様、区画の為の溝か。

この遺構からは須恵器鉢、土師器皿・坏・鍋、土師器片、瓦質土器鉢、軽石、焼石を出土している（Fig. 38）。



1　灰色粘土（炭化物少し含む）
2　灰色粘土（大粒の礫を多く含む）
3　黄灰色粘土（地山土主体）
4　暗灰色粘土（２層と同じ大きさの礫を含む）
5　暗灰色粘土（地山土を多量に含む）
6　暗灰色粘土
7　青灰色粘土（地山土を多量に含む）

Fig. 23　ＳＥ０４０（Ｓ＝１／40）

井戸

ＳＥ０４０（Fig. 23、ＰＩ.11－２、12－１）

Ｆ１～２グリットから検出された遺構である。検出時点での形状は円形で、南側のＳＤ035を切っている。直径約1.0～1.1m。検出面より約1.0mまで掘り下げたが湧水もあり、これ以上は危険と判断した。その為、断面形や下場の情況は不明である。人為的に埋没しており、検出面から約0.4mほど掘り下げた所には円礫の投げ込みが集中して見られた。

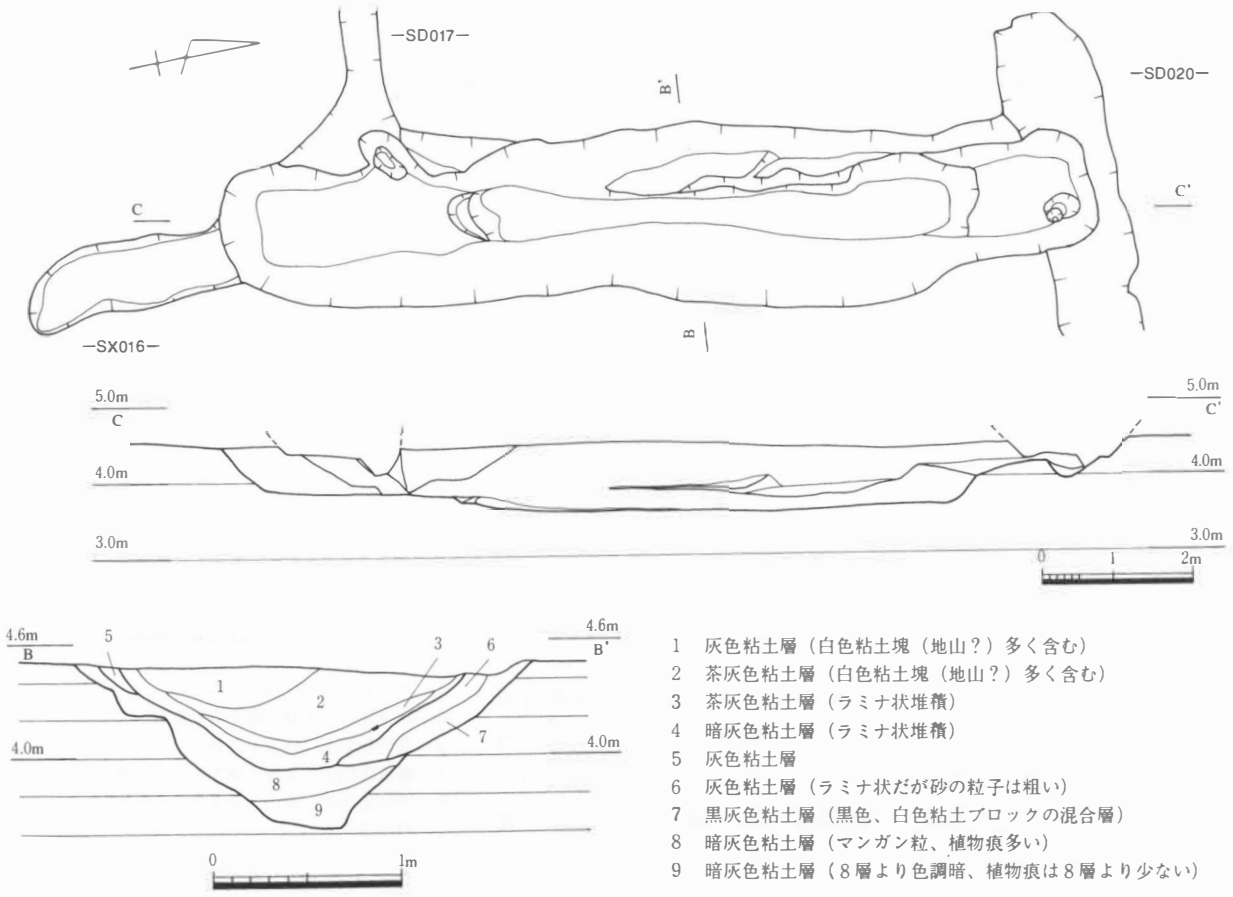
この遺構からは須恵器鍋、土師器皿・坏・鍋、土師器片、瓦質土器羽釜・釜、瓦器片、青磁碗、焼石、焼粘土塊が出土している（Fig. 39）。

大型土壙

ＳＫ０１５（Fig. 24、ＰＩ.12－２～14－１）

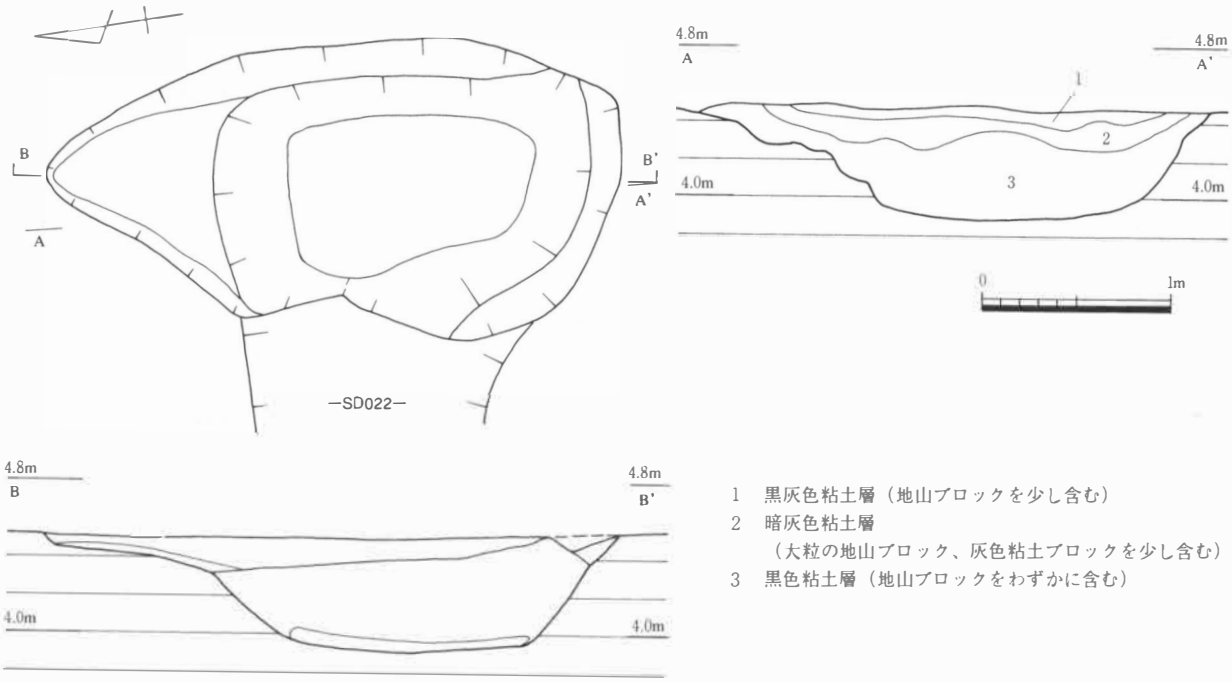
Ｇ13～Ｈ17グリットから検出された大型の土壙である。北側でＳＤ020を切り、南側でＳＸ016・ＳＤ017に接している。平面形は長楕円形と思われるが、ＳＤ020との切り合い関係は一部不明のままである。長軸約12.0m、短軸約1.5～2.5m、検出面からの深さ約0.5～0.9m。主軸の傾きはＮ－10°－Ｅを測る。断面形は逆台形状となる。埋土観察から、この遺構は自然埋没をしたものと考えられ、２回ほど掘り直しが行なわれたと思われる。第１段階の埋土（８・９層）より植物遺体を、第２・第３段階の埋土にラミナ状堆積を確認した。このことから、この土壙は貯水を目的とした施設と考えられる。

この遺構からは須恵器擂鉢、須恵器片、土師器皿・擂鉢・火鉢・鍋・羽釜、土師器片、瓦質土器甕・鉢・擂鉢・茶釜・鍋、瓦器片、青磁碗・壷・皿、青磁片、白磁碗、染付皿、陶器甕、砥石、挽臼、焼石、板材などを出土した。染付皿は第３段階の埋土より出土している（Fig. 40～45）。



1　灰色粘土層（白色粘土塊（地山？）多く含む）
2　茶灰色粘土層（白色粘土塊（地山？）多く含む）
3　茶灰色粘土層（ラミナ状堆積）
4　暗灰色粘土層（ラミナ状堆積）
5　灰色粘土層
6　灰色粘土層（ラミナ状だが砂の粒子は粗い）
7　黒灰色粘土層（黒色、白色粘土ブロックの混合層）
8　暗灰色粘土層（マンガン粒、植物痕多い）
9　暗灰色粘土層（８層より色調暗、植物痕は８層より少ない）

Fig. 24　ＳＫ０１５（Ｓ＝１／100・１／40）



1　黒灰色粘土層（地山ブロックを少し含む）
2　暗灰色粘土層
　（大粒の地山ブロック、灰色粘土ブロックを少し含む）
3　黒色粘土層（地山ブロックをわずかに含む）

Fig. 25　ＳＫ０２１（Ｓ＝１／40）

Fig. 26　ＳＸ０１０（Ｓ＝１／40）

ＳＫ015の南側に、舌状に伸びるＳＸ016は深さ0.05～0.15ｍと残りが悪く、ＳＫ015との関係を明確にはできなかった。出土遺物には土師器鍋、土師器片がある（Fig. 47）。

ＳＫ０２１（Fig. 25、ＰＩ.14－２）

Ｋ６～７グリットから検出された、平面卵型の土壙である。西側にＳＤ022が接している。長軸約3.0ｍ、短軸約1.6ｍ、検出面からの深さ約0.6ｍ。主軸の傾きはＮ－10°－Ｅを測る。北側部分はなだらかに南側へ落ちるテラス状となり、南側の主体部は隅丸長方形である。断面形は逆台形状となる。埋土観察

から自然埋没で遺構の掘り直しは認められない。また、ＳＤ022との下場部分の高低差が0.1ｍしかないためか、滞水痕跡は認められない。

この遺構からは土師器片を出土したが、図化しうるものではなかった。

不明土壙

ＳＸ０１０（Fig. 26、ＰＩ.15～16）

調査区の北西角、Ｋ19～Ｌ21グリットから確認された溜め池状の遺構である。調査開始時点で大型の溝状遺構と判断し、調査区壁面での土層確認を予定していたため、埋没状況を確認をできない状態にしてしまった。今調査では東南角を中心に検出している。東北部分でＳＤ001と、南東角でＳＤ005と接しているが、北壁面を見ると北西部分に一本、東北部分にはもう一本北側に伸びる溝が接していた様である。検出部分での長軸5.4＋αｍ、短軸4.0＋αｍ、検出面からの深さ約1.0ｍ。主軸の傾きはＮ－10°－Ｅを測る。断面形はレンズ状になり、東側を中心にテラスを有している。北側は階段状となり、土留めのためと思われる杭の痕跡が認められた。

この遺構からは須恵器坏・擂鉢、土師器皿・坏・鉢・鍋、土師器片、瓦質土器鍋・羽釜・火鉢、瓦器片、白磁片、青磁片、陶器擂鉢、木材（杭、板など）、植物種子（桃？）、獣骨（ろっ骨、四肢骨）を出

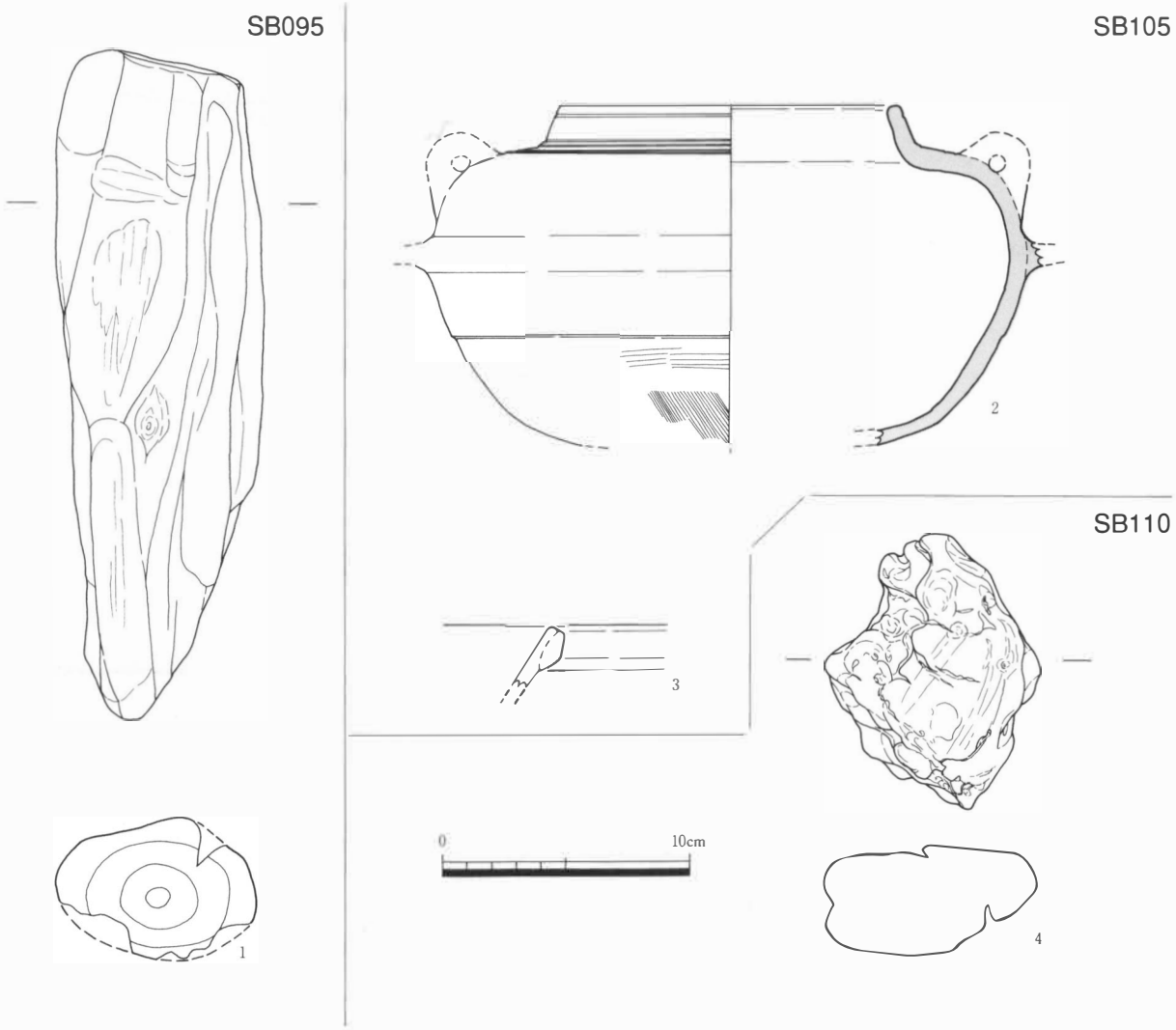


Fig. 27　掘立柱建物　柱穴出土遺物（Ｓ＝１／３）

土している（Fig.46）。

3　出土遺物

出土遺物の焼き物に関しては弥生土器、須恵器、土師器、瓦器、陶器、磁器がある。「土師質」と「瓦質」土器に関しては、燻され灰色化したものは「瓦器」、赤橙色のものは「土師器」としている。

ＳＢ０９５出土遺物（Fig. 27）

１は木杭である。先端部は風化が激しく加工痕跡は見えないが、胴部の面取痕と上面の加工痕の残りは良い。柱を支える為の添木か。

ＳＢ１０５出土遺物（Fig. 27、ＰＩ.17－１）

２は瓦質土器の茶釜である。羽部より下は厚く煤が付着する。３は土師鍋の口縁部細片である。

ＳＢ１１０出土遺物（Fig. 27）

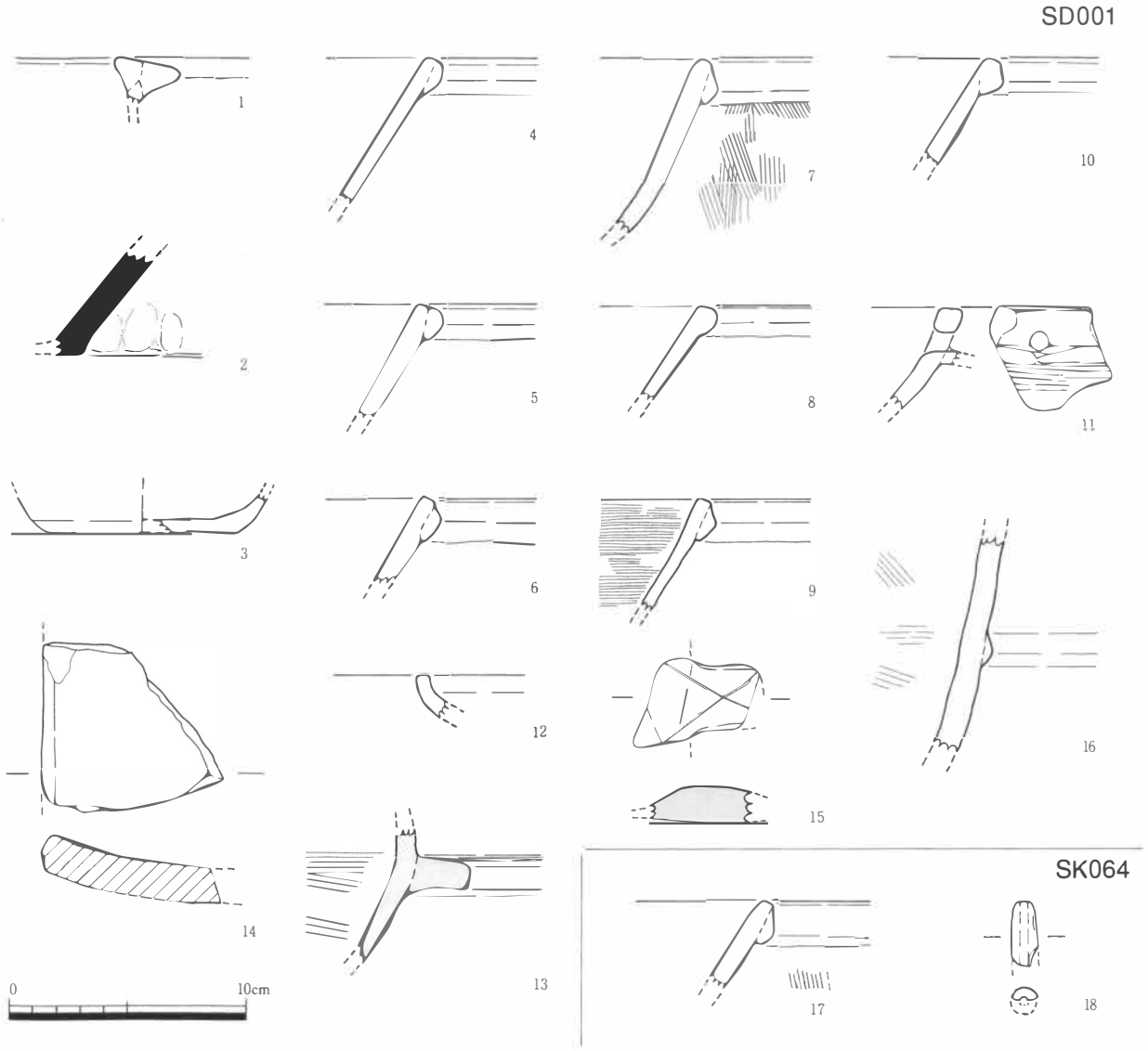


Fig. 28　ＳＤ００１・ＳＫ０６４出土遺物（Ｓ＝１／３）

4は焼粘土塊である。元来は円形をしていたかは不明。胎土は密でなく、比較的軽い。

ＳＤ００１出土遺物（Fig. 28、ＰＩ.17－２）

1は弥生土器の甕の口縁部細片である。弥生中期後半。

2は須恵器の鉢の底部細片である。

3は土師器の皿の破片である。底部は回転糸切が見られる。

4～10は土師器の鍋の口縁部細片である。いずれも口縁部を玉縁状に仕上げる。

11は土師器の鍋の「耳鍋」細片である。鍔は体部外面に付くが、大部分を欠落する。穿孔も一ケ所のみ残存している。

12は土師器の茶釜の口縁部細片である。

13は瓦質土器の茶釜の胴部細片である。鍔より下部には煤が付着する。

14は素焼きの赤瓦の破片である。桶巻きの技法で作られ、外面に切り込みを入れた後分割、切断部分に軽くナデを施している。上面、下面とも工具ナデ。色調は赤橙色。胎土は精良。在地の水田焼。近世以降の所産。

15は瓦質の不明土製品である。片面に「×」状の沈線を施す。フライパン状の焙烙の把手か？

16は瓦質土器の火鉢の胴部破片である。

ＳＫ０６４出土遺物（Fig. 28）

ＳＫ０６４はＳＤ００１の下位遺構と考えられる。出土遺物は壁面崩落土を除去する際に出土している。崩落土は調査区壁面、ＳＤ００１、ＳＫ０６４の埋土のいずれかになるため、遺構の性格を示す可能性は低い。ＳＤ００１との関連性が捨てられない為、ＳＤ００１出土遺物と一緒に掲載した。

17は土師器の鍋の口縁部細片である。口縁部を玉縁状に仕上げる。

18は土錘である。

ＳＤ００５Ｄ軸以北出土遺物（Fig. 29～31、ＰＩ.18～19）

ＳＤ００５出土遺物は、遺構部分で報告した通り、旧来は北と南で別々に方形区画を形成していたと思われる。このため、北側区画の西南コーナー部に近い土層Ｄ軸より北と南で遺物を分けて報告する。

１～３は須恵器の擂鉢の口縁部である。１・３が若干外反気味なのに対し、２は直線的。

４・５は土師器の小皿である。５には口縁部内側に薄く油煙の痕跡が残る。

６～15は土師器の鍋である。７は薄手で瓦質にも感じられる。６・７は素口縁で時期は新しい。８～15はいずれも口縁部を玉縁状に仕上げる。

16は土師器の茶釜の口縁部である。

21は土師器の擂鉢の口縁部である。口縁部の一部が片口状に外反し始めている。22は土師器の擂鉢の胴部破片である。

17は瓦質土器の鍋の口縁部細片である。素口縁で体部が薄くなることから、焙烙となる可能性もある。18も瓦質土器の鍋の口縁部細片で、玉縁状となる。

19は瓦質土器の耳鍋の口縁部細片である。鍔は上方へ強く屈曲する。

20は瓦質土器の擂鉢である。口縁部は肉厚で玉縁状となる。

23・24は瓦質土器の火鉢の口縁部細片である。23は２本の断面三角形の貼り付け突帯の間に菊花文のスタンプを施す。24は肥厚した口縁端部と断面三角形の貼り付け突帯との間にスタンプを施すが、摩滅が激しい。菊花文か。

25は瓦質土器の浅鉢もしくは火鉢である。

26～30は瓦質土器の茶釜である。26は肩部のくびれ部に断面三角形の突帯を有し、その下に半裁竹管文を施す。27は肩部のくびれ部に花菱文、その下方に菊花文のスタンプを施す。28は肩部のくびれ部に三条の沈線を施しその下にＵ字状の草文を施す。

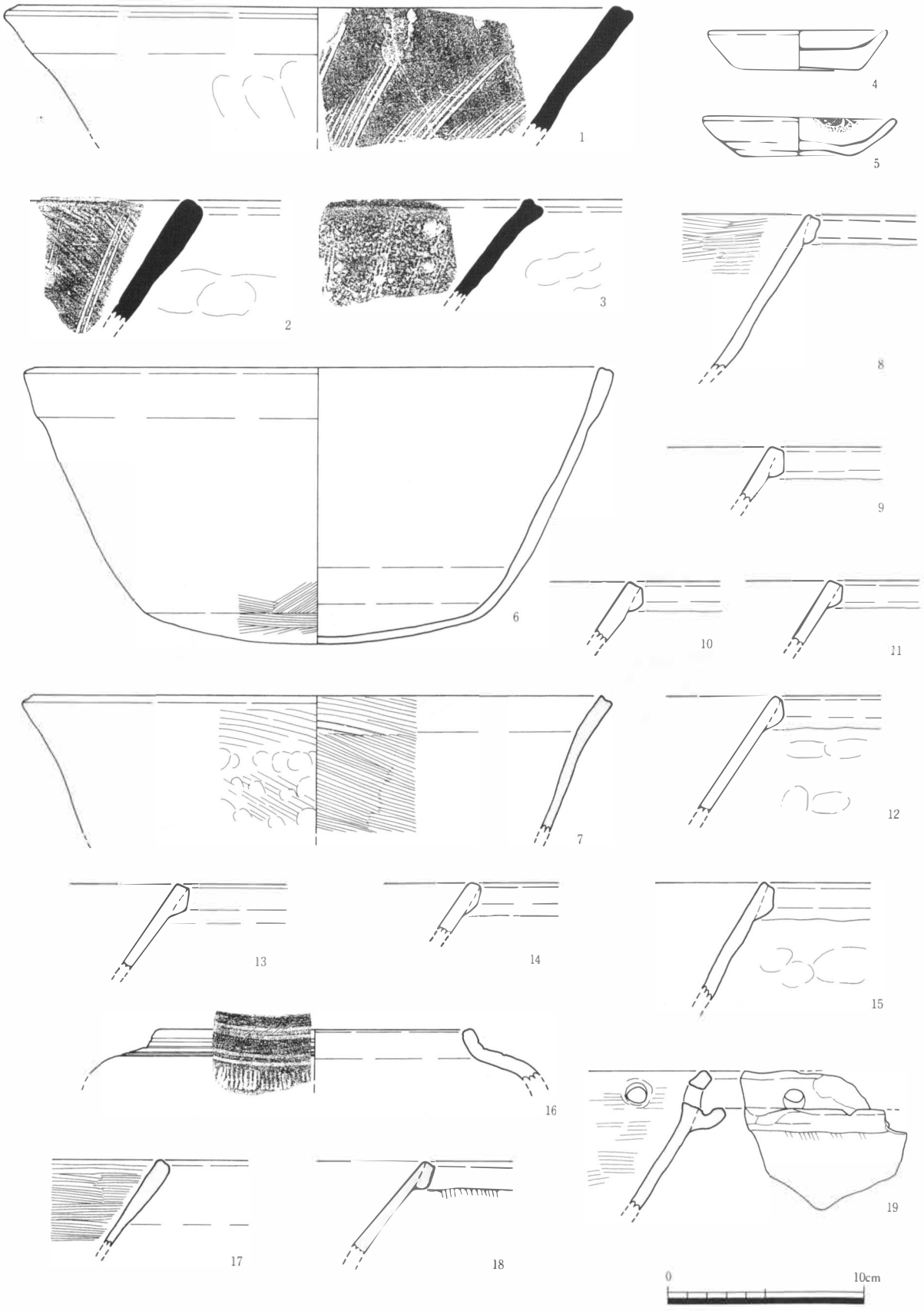


Fig. 29　ＳＤ００５　Ｄ軸以北出土遺物（１）（Ｓ＝１／３）

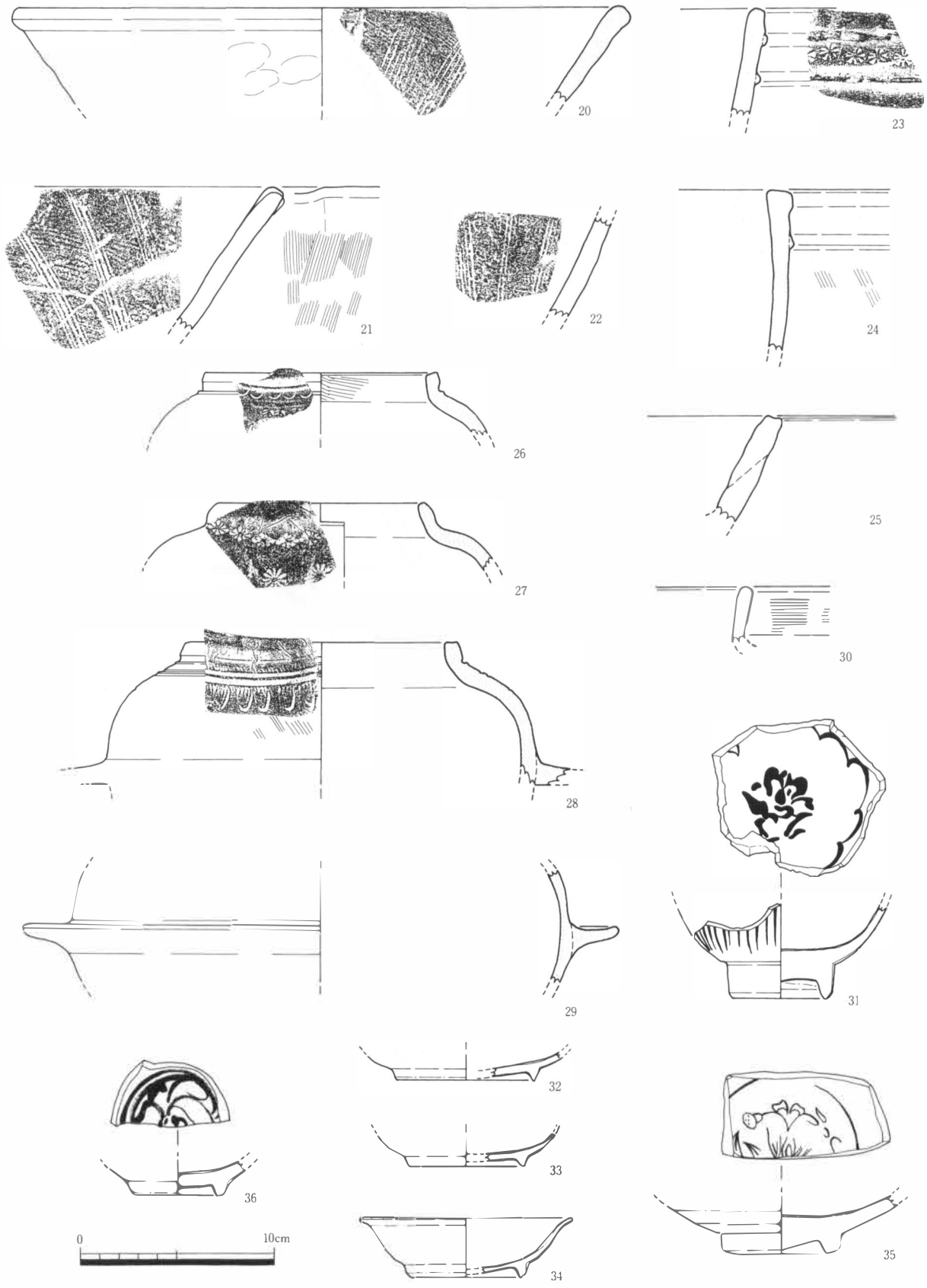


Fig. 30　ＳＤ００５　Ｄ軸以北出土遺物（２）（Ｓ＝１／３）

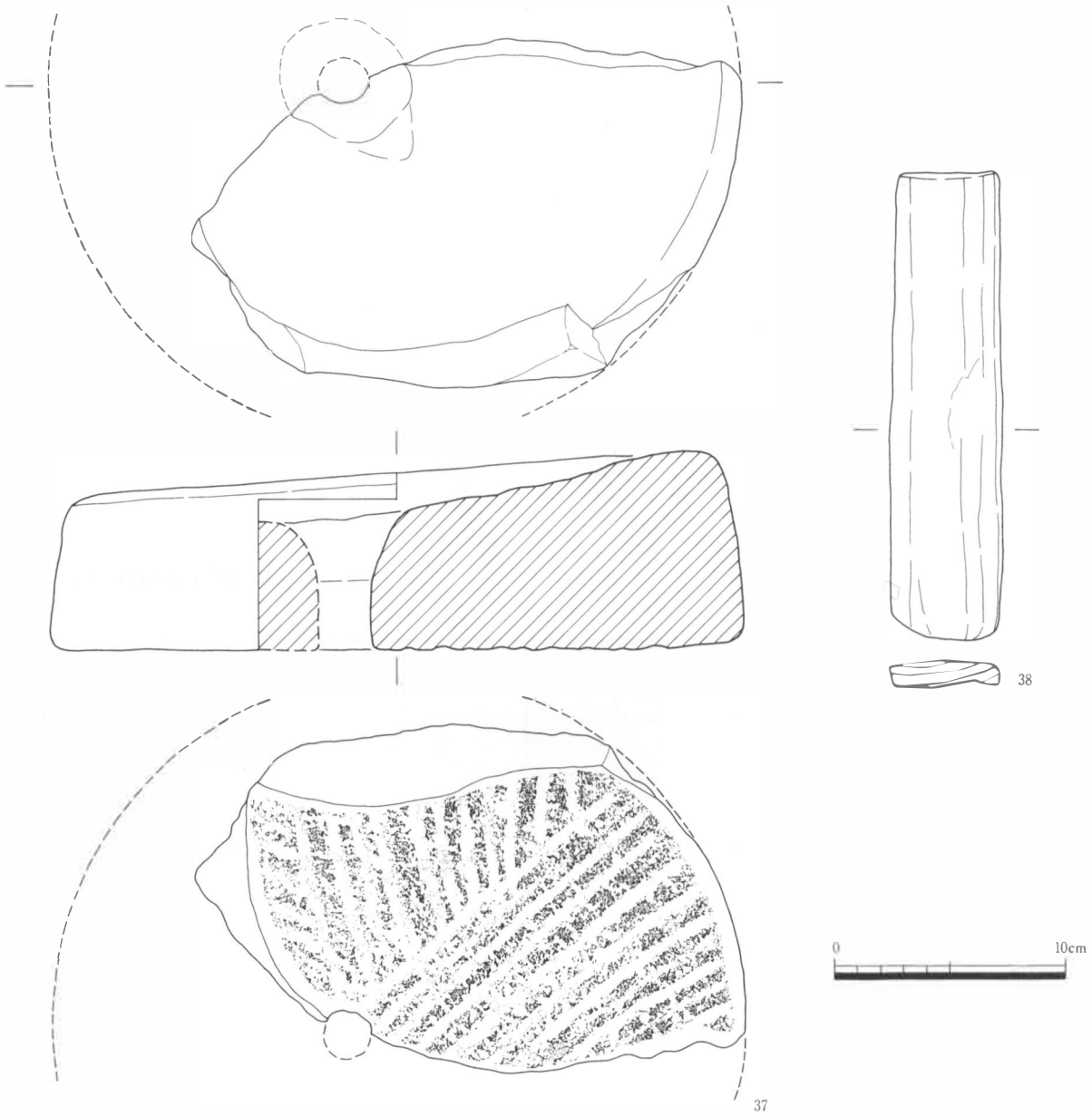


Fig. 31　ＳＤ００５　Ｄ軸以北出土遺物（３）（Ｓ＝１／３）

31は青磁碗の底部である。外面は幅の狭い蓮弁文か。内面見込には輪花状の区画の中に花文を施している。焼成は悪く、底部の胎土は淡橙色。外底面内部は施釉後に釉を掻き取る。15世紀後半～16世紀にかけてのものか。

32～34は磁器の皿である。32は青味がかった釉を施され、貫入が発達。33は焼成不良により釉薬がガラス化せず、乳白色。34は白色で高台に砂が付着。器形は16世紀代の染付皿に酷似。

35は白磁碗の底部である。内面見込にほぼ円形の区画を施し、その中に草花文を施す。外面は、体部下半より下には施釉しない。口縁部がないがＣ類か。

36は染付の碗である。全面施釉後、高台下部の釉を掻き取る。

37は挽き臼の上臼である。上部は傾いており、供給口も中心より少しずれる。欠損部分に緩い彎曲が

認められ、この部分が把っ手の取り付け部分か。目の粗い凝灰岩製。
38は板材である。目立った加工痕跡はない。

ＳＤ００５Ｄ軸以南出土遺物（Fig. 32・33、ＰＩ.20－１）

１は須恵器の擂鉢である。

２は土師器の鍋である。口縁端部を玉縁状に仕上げ、体部外面には厚く煤が付着する。形が大きく深さがない。捏ね鉢からの転用か。

３～12は土師器の鍋の口縁部細片である。いずれも口縁端部を玉縁状に仕上げる。

13は土師器の鍋の底部破片である。

14は土師器の耳鍋の口縁部細片である。外側より穿孔。鍔の形状は不明。

15は土師器の鉢である。

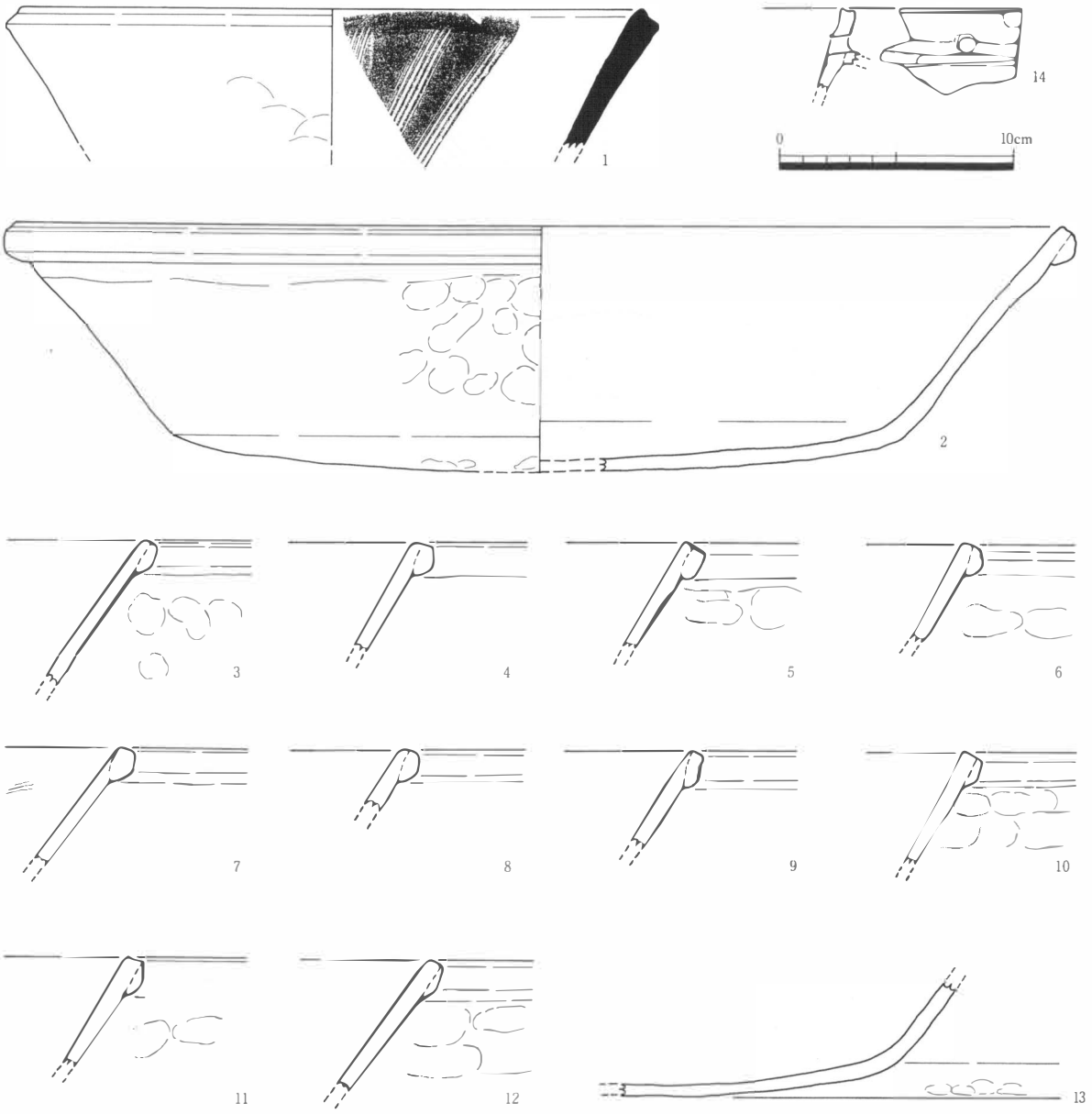


Fig. 32　ＳＤ００５　Ｄ軸以南出土遺物（１）（Ｓ＝１／３）

16は瓦質土器の鍋の口縁部細片である。口縁端部を玉縁状に仕上げる。

17は瓦質土器の火鉢の口縁部細片である。口縁端部に断面カマボコ状の突帯、その下に2条の断面三角突帯を持ち、それぞれの間に上から菊花文スタンプ、刺突文、半裁竹管文を施す。

18は瓦質土器の火鉢もしくは火消壺の底部細片である。体部下位に断面三角形の貼り付け突帯を有する。

19は瓦質土器の浅鉢である。

20～22は瓦質土器の茶釜の口縁部である。いずれも肩部に2条の沈線を有するが、20は更に肩部のくびれ部に1条の沈線を施す。

23は青磁の碗の口縁部細片である。胎土は灰色～赤橙色を呈し、釉調も灰色がかった緑色。蓮弁はほとんど確認できないが、省略を受けた印象はない。

24は磁器の皿である。胎土は粗く黄白色。釉調は白味がかった緑色で、高台外面まで施釉するが、釉の一部は底部外面までかかる。

25は白磁の口縁部細片である。碗か。胎土は乳白色で黒色粒子を多く含む。釉調は白灰色で、釉は半透明で、粘性が非常に高く、大粒の釉垂れが見られる。施釉は丁寧ではなく、一部露胎する。

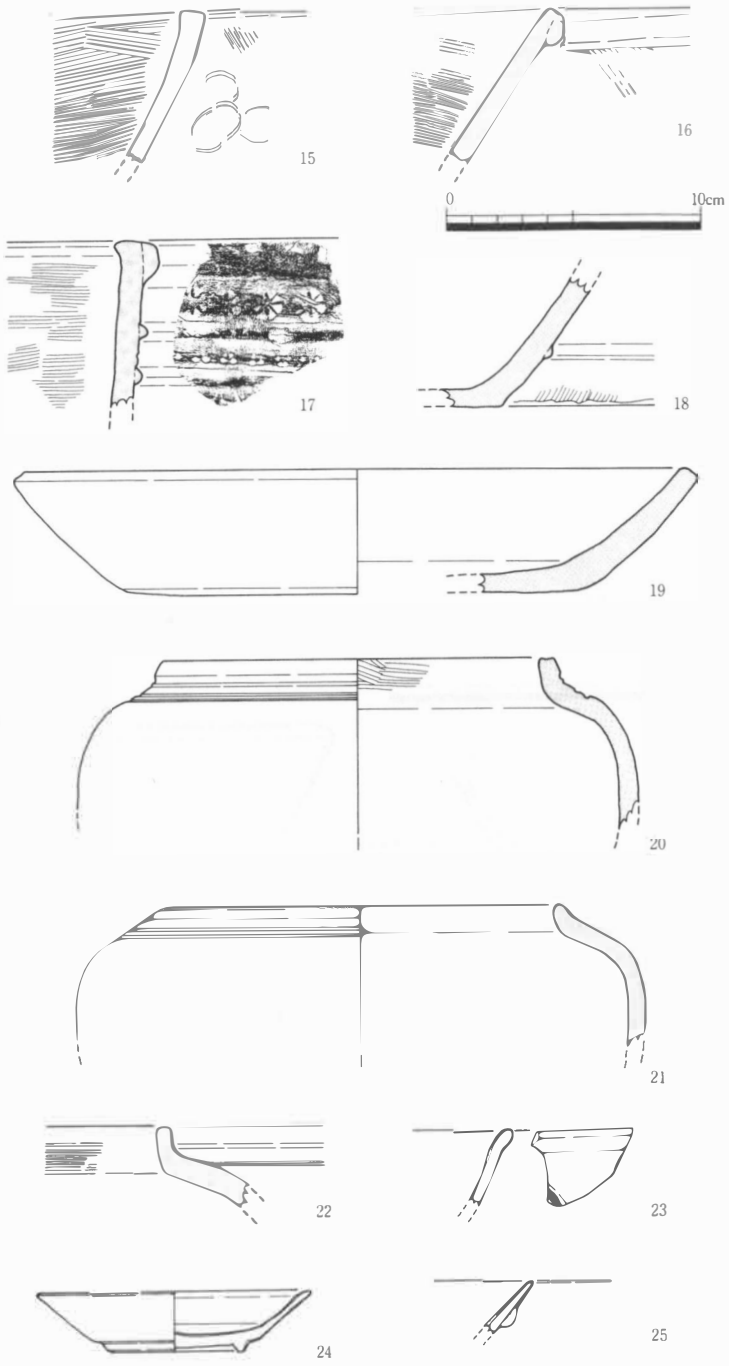


Fig. 33　ＳＤ００５　Ｄ軸以南出土遺物（２）
（Ｓ＝１／３）

ＳＤ０１７出土遺物（Fig. 34、PＩ.20－２）

１～３は土師器の鍋である。いずれも口縁端部を玉縁状に仕上げ、外面に煤の付着が見られるが、１が最も煤の付着が厚い。

ＳＤ０２０出土遺物（Fig. 34、PＩ.20－２）

４・５は土師器の鍋の口縁部である。口縁端部を玉縁状に仕上げる。

６は土師器の鍋の底部細片である。底部外面には粗いハケ目を施している。

７は土師器の茶釜である。器面は磨耗している。

８は瓦質土器の鉢で、磨耗が激しい。

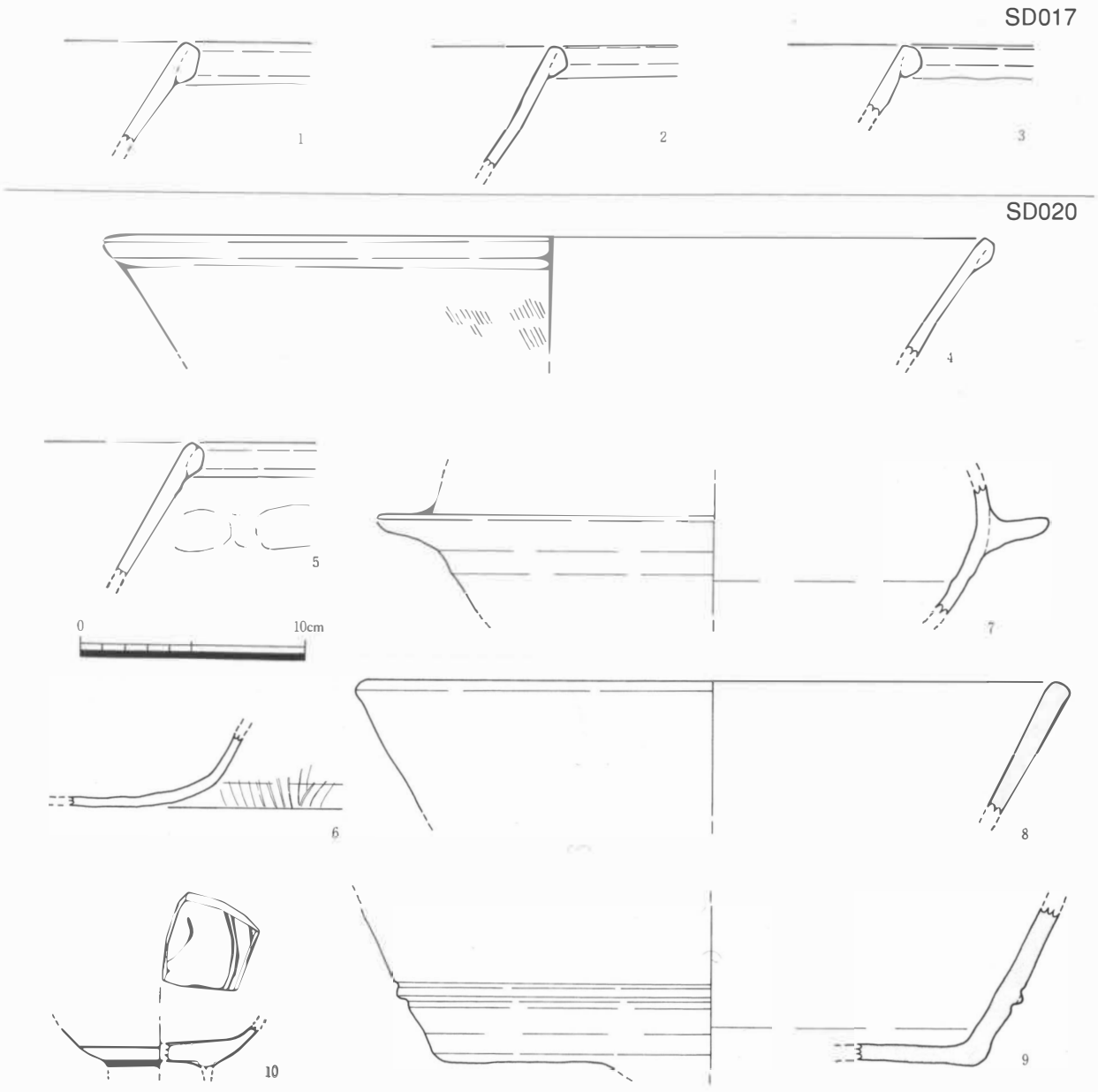


Fig. 34　ＳＤ０１７・０２０出土遺物（Ｓ＝１／３）

９は瓦質土器の火鉢の底部である。色調は淡赤橙色。体部下方に三角突帯を貼り付け、その上下に２条の沈線を施す。

10は染付けの碗の底部である。内外面ともに呉須で円形の線を描き、内面見込には絵を施す。高台部を欠損しているが、底部外面まで青色の釉が施されている。

ＳＤ０２５出土遺物（Fig. 35～36、ＰＩ.21）

１は須恵器の甕の口縁部である。外面に格子タタキ、内面に工具ナデ痕跡が残る。

２は須恵器の擂鉢の口縁部である。

３～７は土師器の鍋の口縁部である。いずれも口縁端部を玉縁状に仕上げる。

８は土師器鍋の底部破片で、外面に厚く煤が付着する。

９は土師器の坏で、外面に４条の沈線を有する。

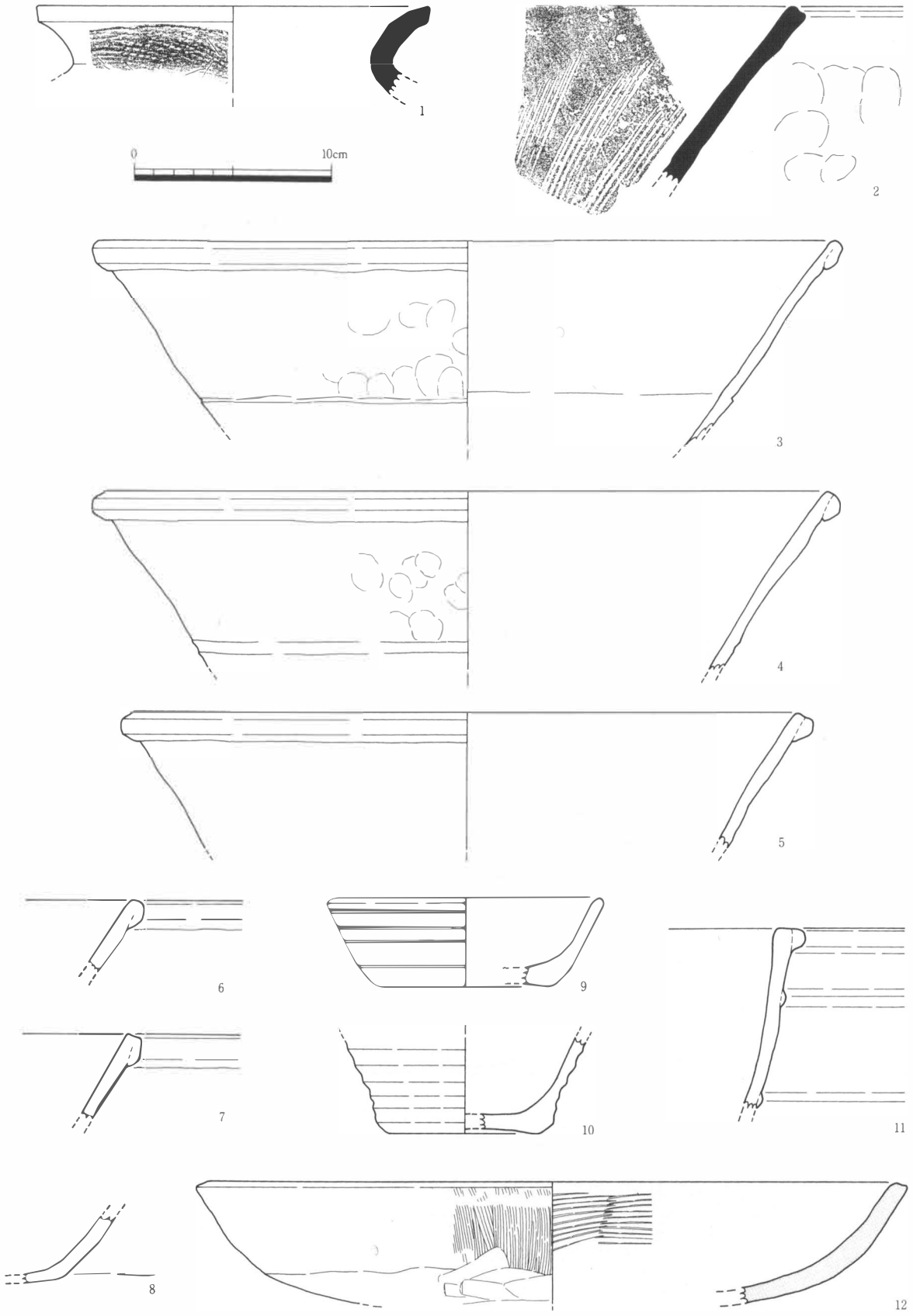


Fig. 35　ＳＤ０２５出土遺物（１）（Ｓ＝１／３）

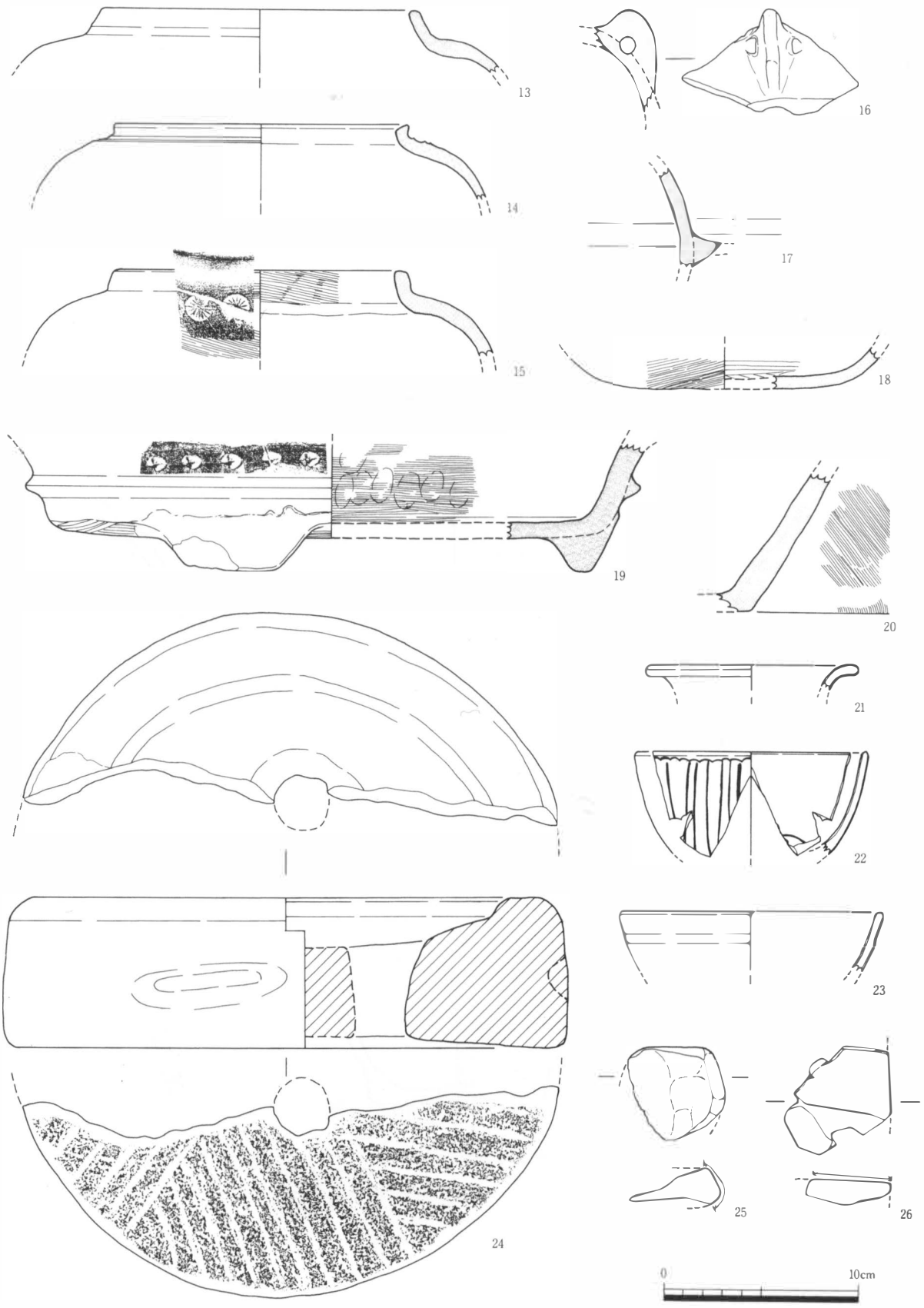


Fig. 36　ＳＤ０２５出土遺物（２）（Ｓ＝１／３）

10は土師器の坏もしくは壷の底部破片である。成形時の指の単位が強く残る。

11は土師器の火鉢である。口縁端部外面に断面カマボコ状の突帯、胴部外面に２条の突帯を貼り付ける。

12は瓦質土器の捏ね鉢である。底部はハケ目の後ヘラケズリ。

13～15は瓦質土器の茶釜の口縁部である。14は肩部外面のくびれ部より幅広の沈線と細い沈線により小さな突帯を表現し、その下に爪形文を施す。15は肩部外面にスタンプで菊花文を施す。

16・17は瓦質土器の茶釜の破片で、16は把手部分、17は鍔の部分である。

18は瓦質土器の茶釜の底部である。

19・20は瓦質土器の火鉢の底部である。19は三ケ所に逆台形の脚を有すると思われる。胴部下方に三角突帯を有するが、断面の形状から本来は断面付近にもう１条の突帯を有していたと思われ、突帯の間に紐の結び目のようなスタンプを施している。

21は青磁の壷の口縁部破片である。乳白色の素地に明緑色の透明釉を施し、やや細かい貫入が発達する。

22は青磁の碗の口縁部である。淡灰色の素地に暗緑色の釉を施し、貫入が発達する。陰刻された蓮弁は細く、簡略化されている。内面にも陰刻が施されているが、どのような模様かは不明。

23は施釉陶器の碗の口縁部である。乳茶色の素地に淡緑茶色の釉を施し、貫入が発達する。ＳＤ０２８から同一個体と思われる施釉陶器の碗を出土しているが、接点が見当たらず、大きさもほぼ等しい為それぞれに掲載した。

24は挽き臼の上臼破片である。胴部側面に窪みを有するが、持ち運びの為の把手か。上面は縁の部分に堤防状の突起を有する。石材は良質の凝灰岩もしくは安山岩製。

25・26は砥石である。両者ともに白色の肌理の細かな石材である。

ＳＤ０２７出土遺物（Fig. 37、ＰＩ.22－１）

４・５は土師器の鍋の口縁部細片である。ともに口縁端部を玉縁状に仕上げる。

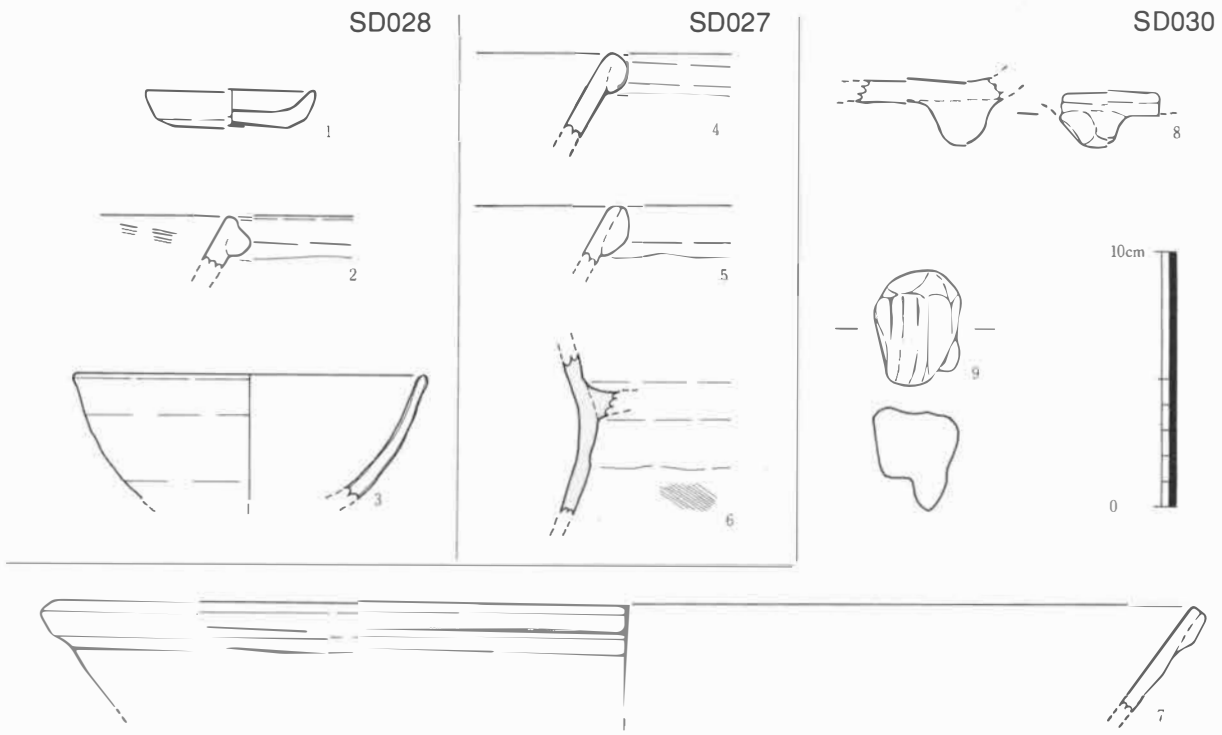


Fig. 37　ＳＤ０２７・０２８・０３０出土遺物（Ｓ＝１／３）

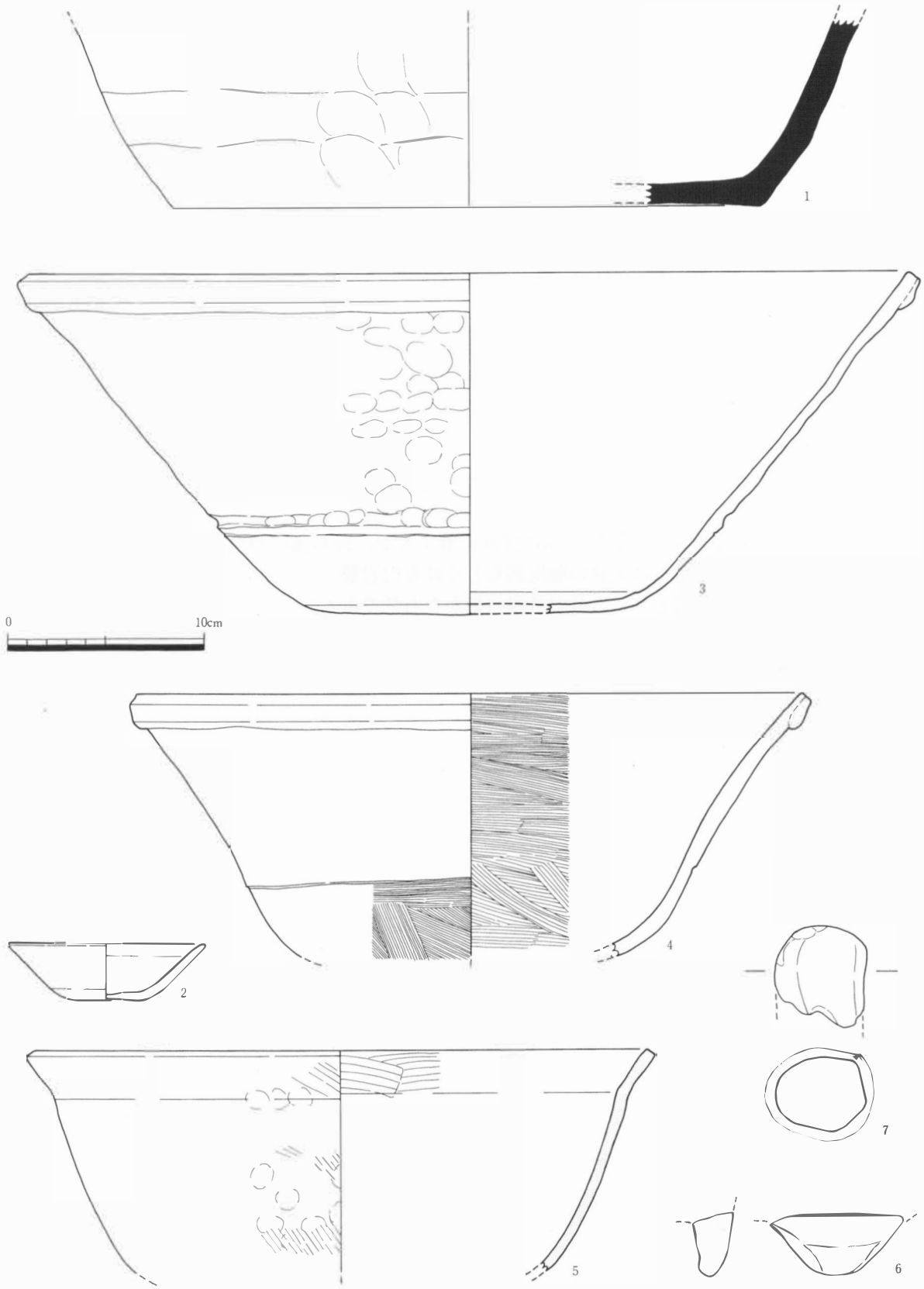


Fig. 38　ＳＤ０３５出土遺物（Ｓ＝１／３）

6は瓦器の茶釜の胴部破片である。鍔の部分は欠落している。

ＳＤ０２８出土遺物（Fig. 37、ＰＩ.22－１）

1は土師器の小皿である。底部回転糸切。

2は土師器の鍋の口縁部細片である。口縁端部より僅かに下がった所に玉縁を有する。

3は施釉陶器の口縁部細片で、ＳＤ０２５出土品（Fig. 26－23）と同一個体の可能性が高い。

ＳＤ０３０出土遺物（Fig. 37、ＰＩ.22－１）

7は土師器の鍋の口縁部で、口縁端部を玉縁状に仕上げる。

8は土師器の底部破片で、小さな脚を有する。香炉か。

9は焼粘土塊である。

ＳＤ０３５出土遺物（Fig. 38、ＰＩ.22－２）

1は須恵器の甕の底部である。破片の一部はＳＤ００５から出土。ＳＤ０３５出土の破片は破損後に二次焼成を受けている。色調は外面赤茶色、内面赤紫色。胎土は粗く、3㎜大の小石を含む。

2は土師器の坏である。

3・4は土師器の鍋である。口縁端部を玉縁状に仕上げ、体部下半部に1条の沈線を施す。

5は瓦質土器の鉢である。

6は瓦質土器の鉢の脚部で、弧状の平面を持つ。

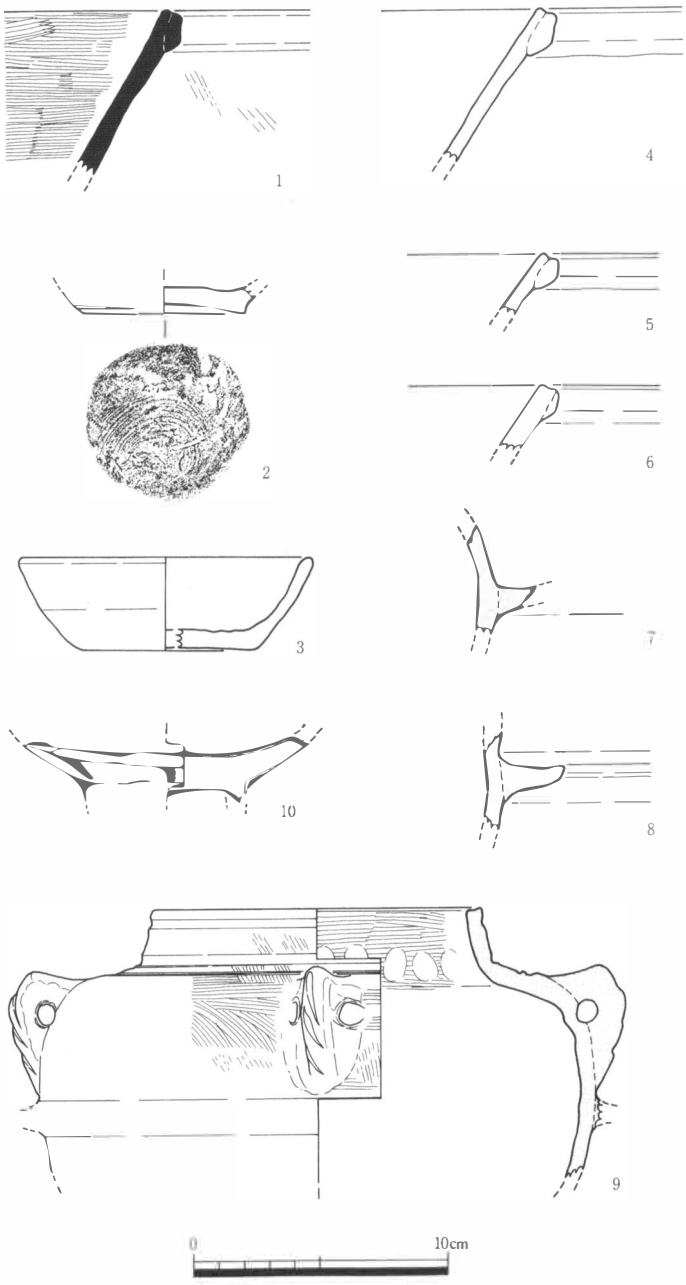


Fig. 39　ＳＥ０４０出土遺物（Ｓ＝１／３）

7は軽石である。この辺では自然に産しないのでここに掲載した。面取りを受けているように見えるが用途は不明。浮子か。

ＳＥ０４０出土遺物（Fig. 39、ＰＩ.22－３）

1は須恵器の鉢の口縁部である。口縁端部を玉縁状に仕上げる。

2・3は土師器の坏である。2は回転糸切後、底部を粘土に付着させた痕跡が見られる。

4～6は土師器の鍋の口縁部破片である。いずれも口縁端部を玉縁状に仕上げる。

7・8は瓦質土器の茶釜の胴部破片である。

9は瓦質土器の茶釜の口縁部～胴部破片である。口縁部に1条、肩部くびれ部に1条、肩部に2条の

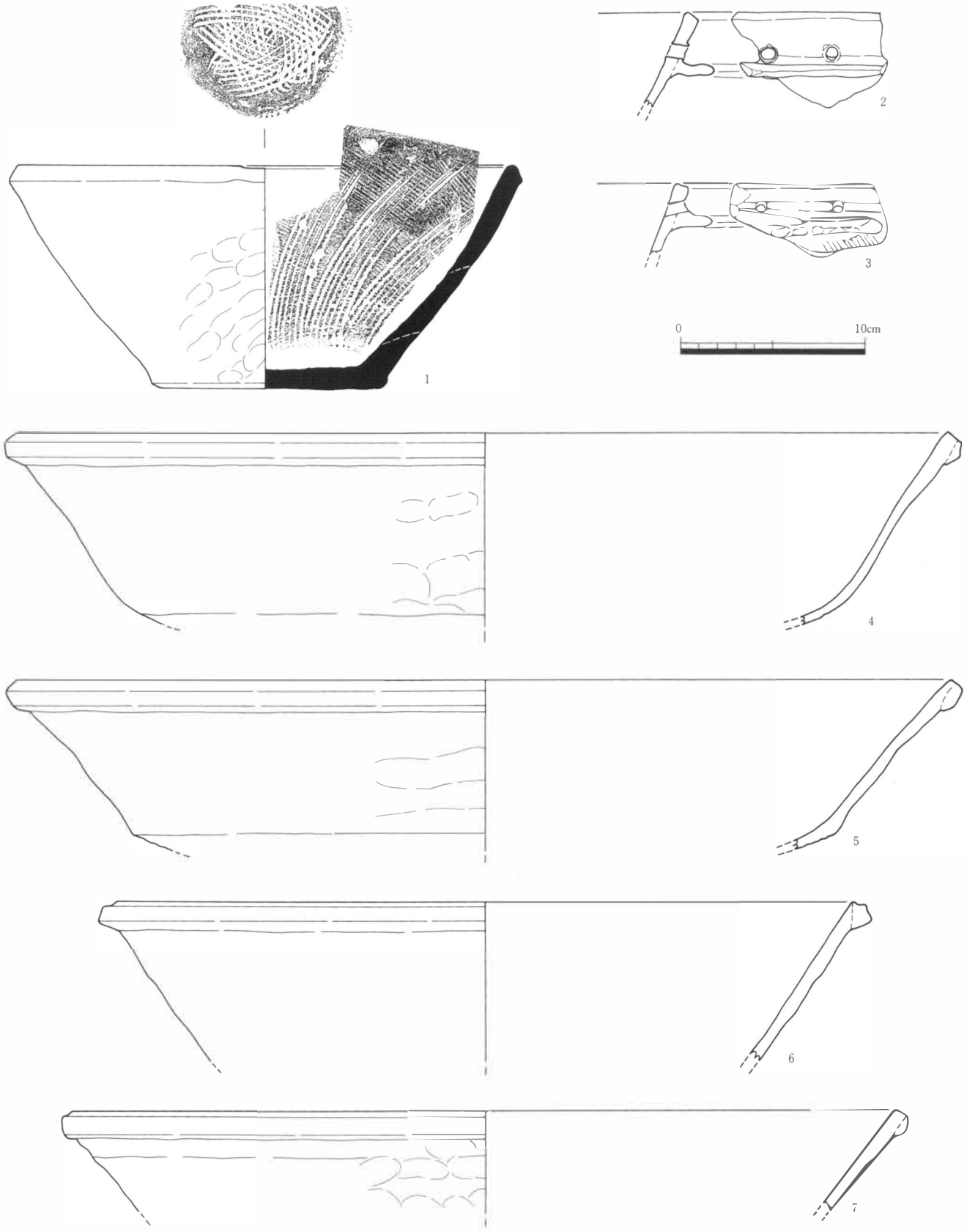


Fig. 40　ＳＫ０１５出土遺物（１）（Ｓ＝１／３）

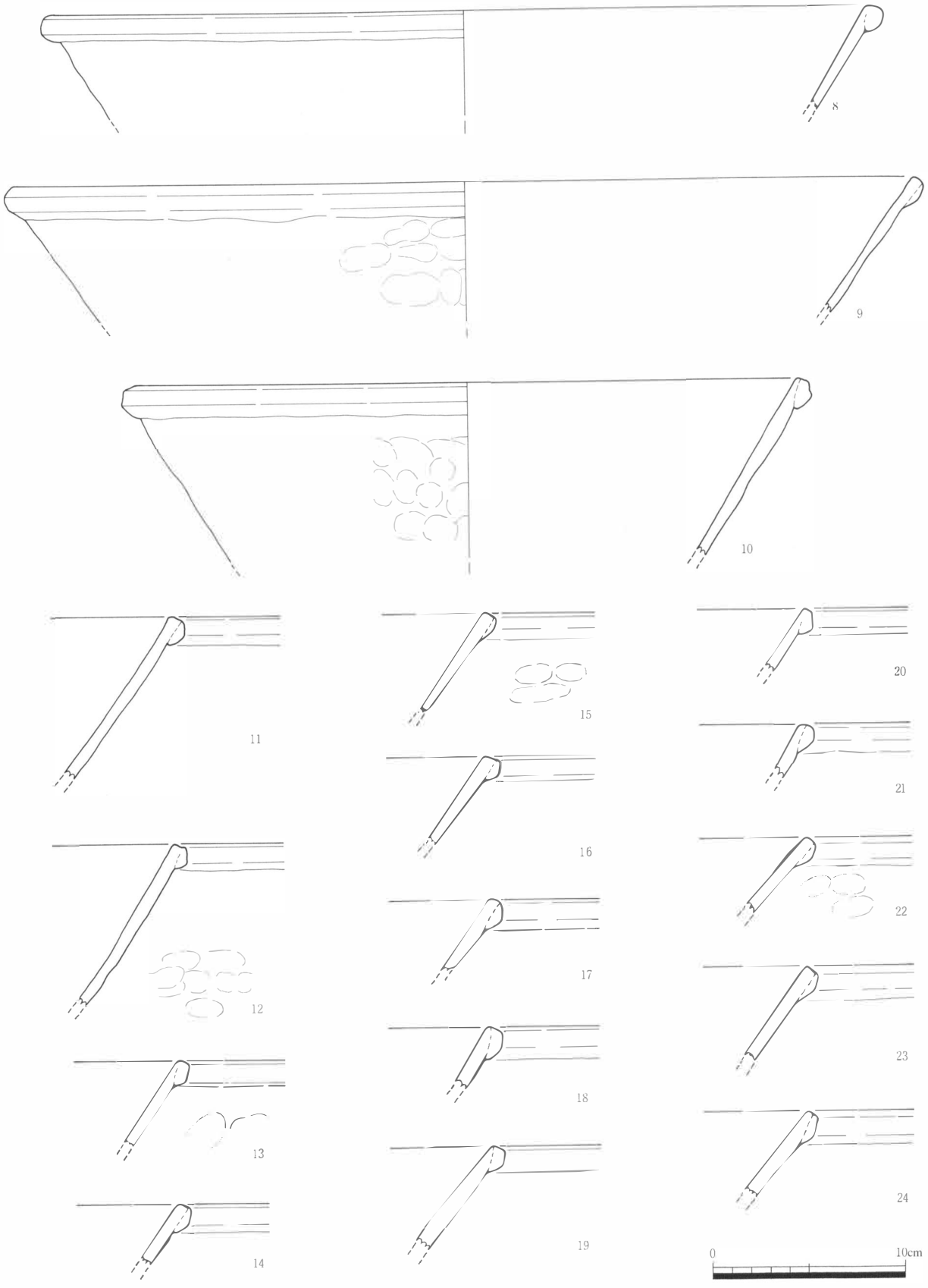


Fig. 41　ＳＫ０１５出土遺物（２）（Ｓ＝１／３）

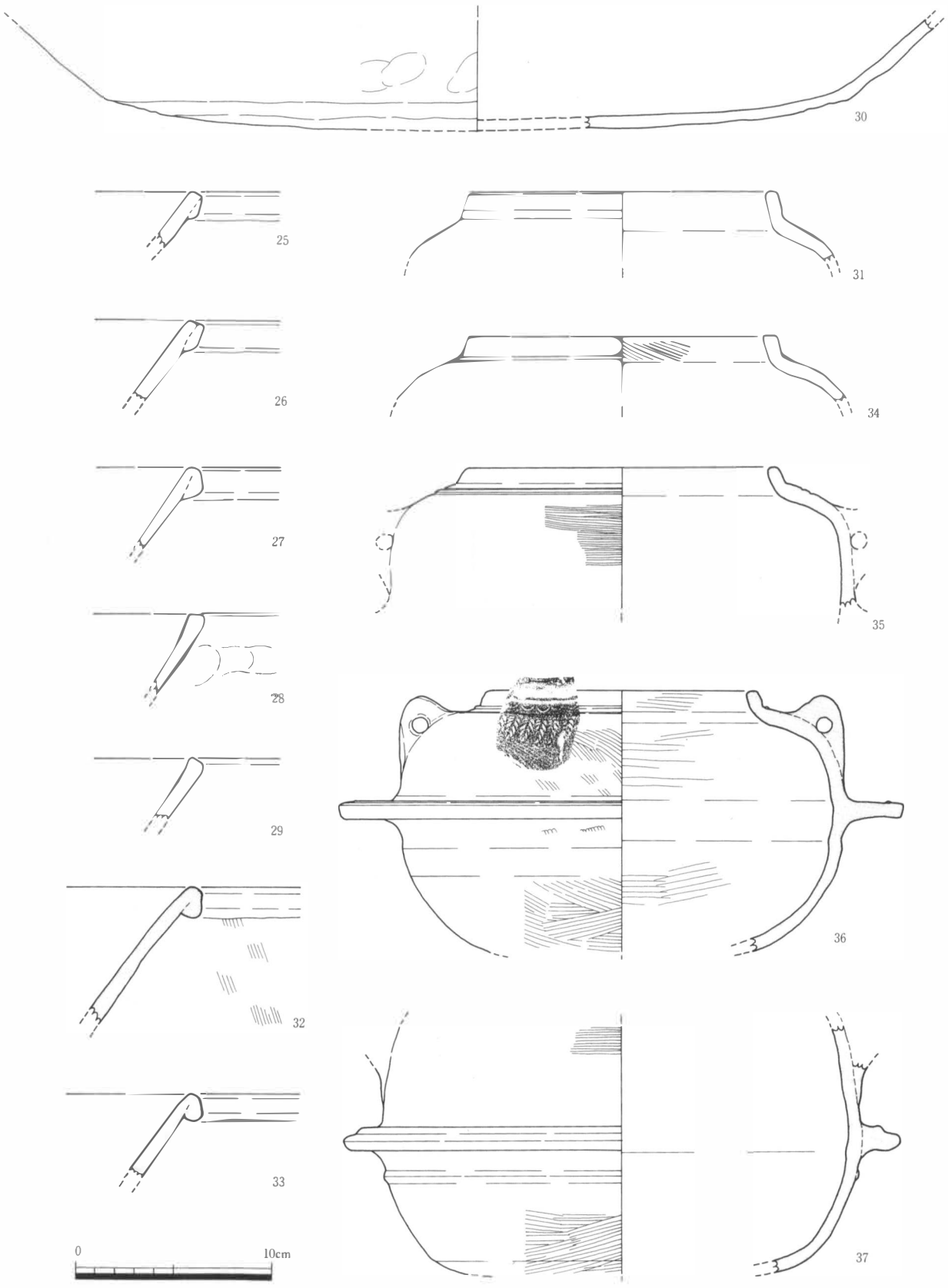


Fig. 42　ＳＫ０１５出土遺物（３）（Ｓ＝１／３）

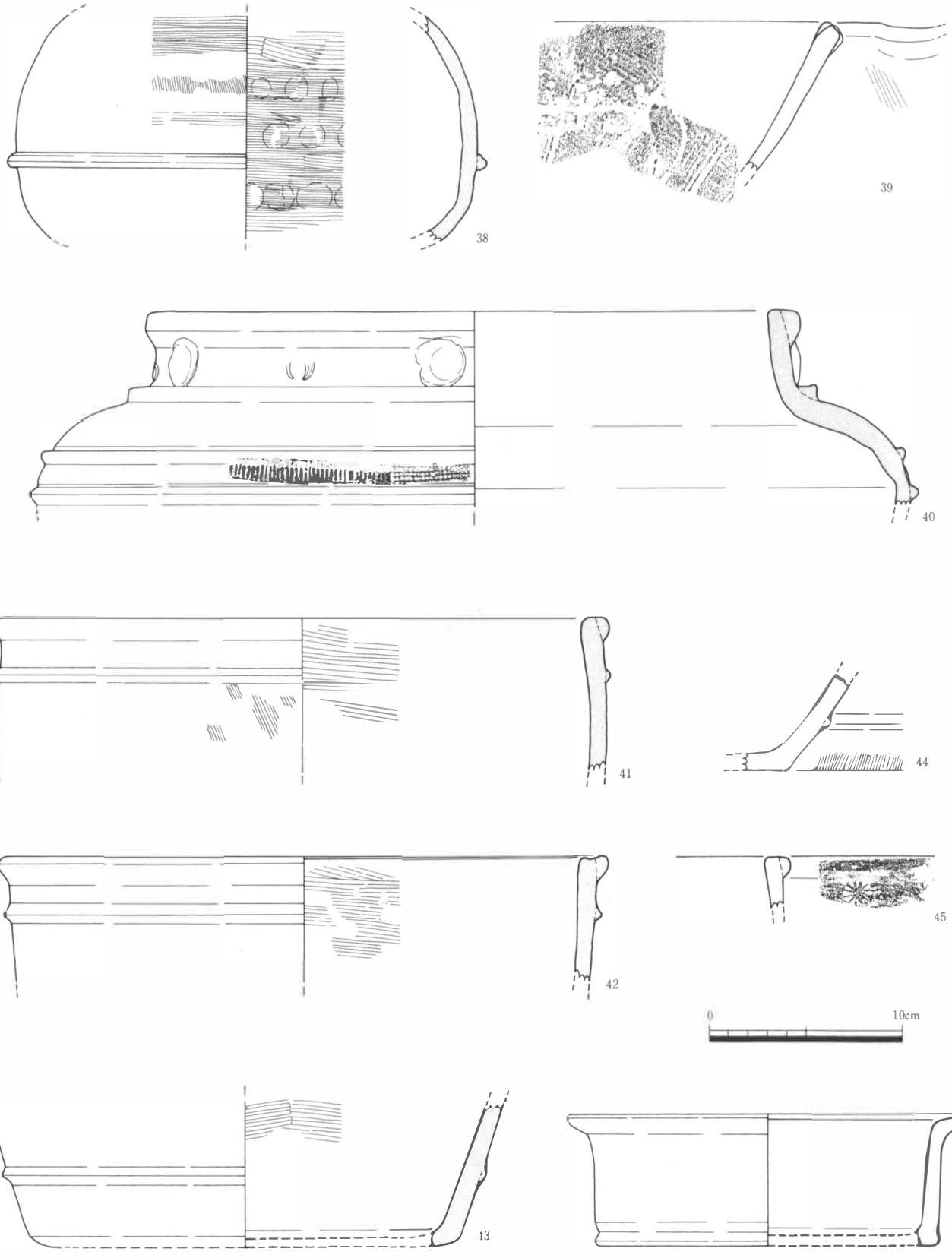


Fig. 43　ＳＫ０１５出土遺物（４）（Ｓ＝１／３）

Fig. 44　ＳＫ０１５出土遺物（５）（Ｓ＝１／３）

沈線を施し、把手の部分には斜方向に３条の刻目を入れる。鍔は欠損し、痕跡を残すのみ。

10は青磁の碗の底部破片である。外面に陰刻された文様が見られるが、蓮弁文か分割線かは不明。おそらく後者のものと思われる。胎土は黒色粒子を含む淡灰色。釉調は淡緑青色。残存する高台部分は内外面に施釉されているが、底部外面は釉を掻き取り赤色顔料を施す。底部内面は成形時の指ナデ痕跡が渦巻状に見られる。

ＳＫ０１５出土遺物（Fig. 40～45、ＰＬ.23～26－１）

１は須恵器の擂鉢である。

２・３は土師器の耳鍋の口縁部破片である。２は内側から穿孔、３は外面から穿孔する。

４～29は土師器の鍋の口縁部破片である。4～27は口縁端部外面を玉縁状に仕上げる。28・29は内湾気味の素口縁。

30は土師器の鍋の底部である。底部外周は一段低く、未調整。

31は土師器の茶釜である。

32・33は瓦質土器の鍋の口縁部破片である。いずれも口縁端部外面を玉縁状に仕上げる。

34～36は瓦質土器の茶釜の口縁部破片である。34は肩部に小さな三角突帯を有する。35は肩部に２条

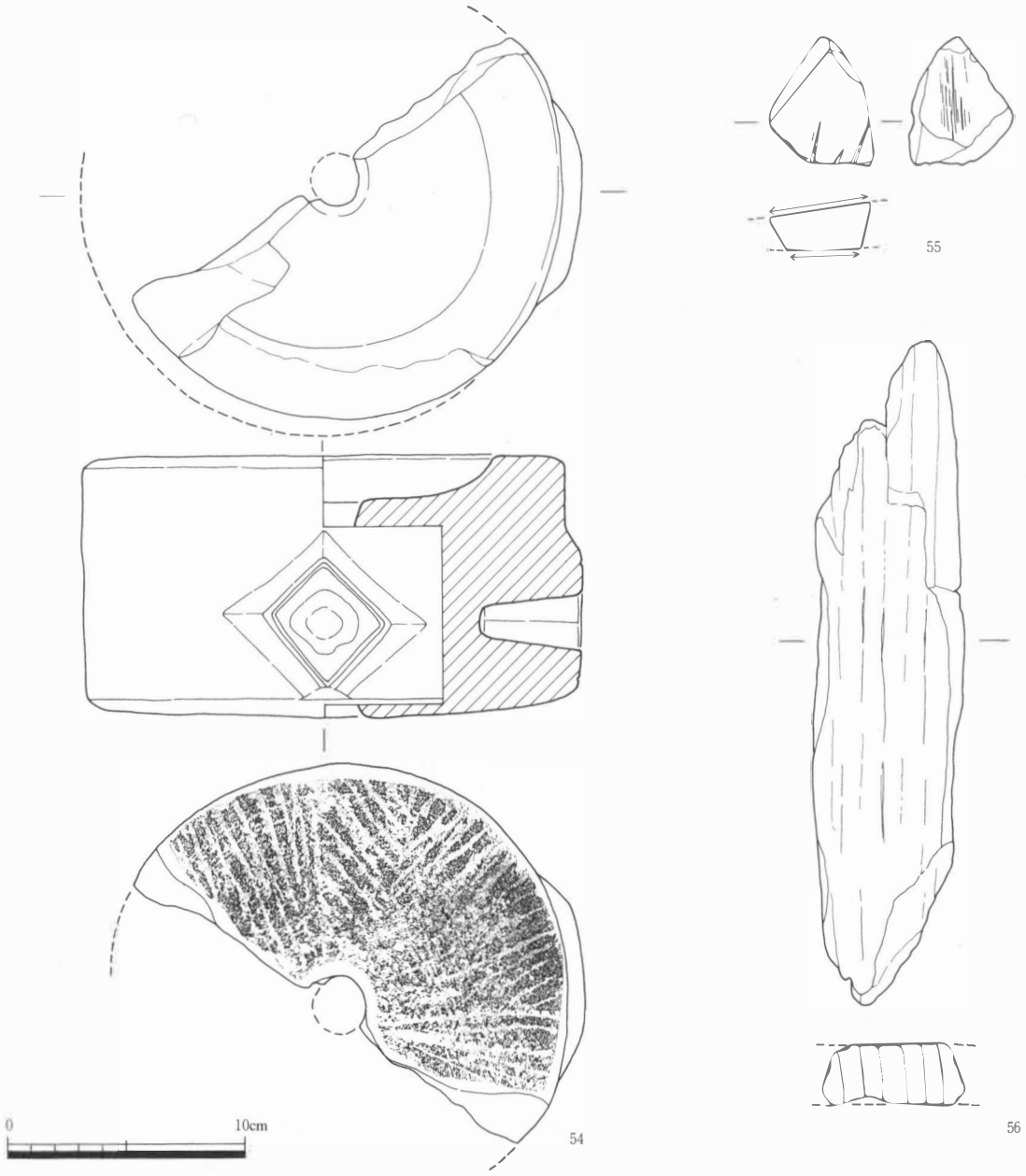


Fig. 45　ＳＫ０１５出土遺物（６）（Ｓ＝１／３）

の沈線を施す。把手及び鍔は欠損。36は肩部くびれ部に２条の沈線、中位にＵ字状に半裁竹管文、下位に下がり藤状のスタンプを施す。

37・38は瓦質土器の茶釜の胴部破片である。37は把手を欠損する。38は胴部に鍔をもたず、三角突帯を１条施す。

39は瓦質土器の擂鉢の口縁部破片である。片口となるが、この部分で欠損しており、どの程度張り出しているかは不明。

40は瓦質土器の甕の口縁部破片である。口縁端部外面、肩部くびれ部に突帯を巡らし、その間に粘土円盤と円形様のスタンプを交互に施す。肩部にも２条の突帯を施し、その間に刻目を施す。

41・42は瓦質土器の火鉢の口縁部破片である。いずれも口縁端部外面とその下位に突帯を施す。

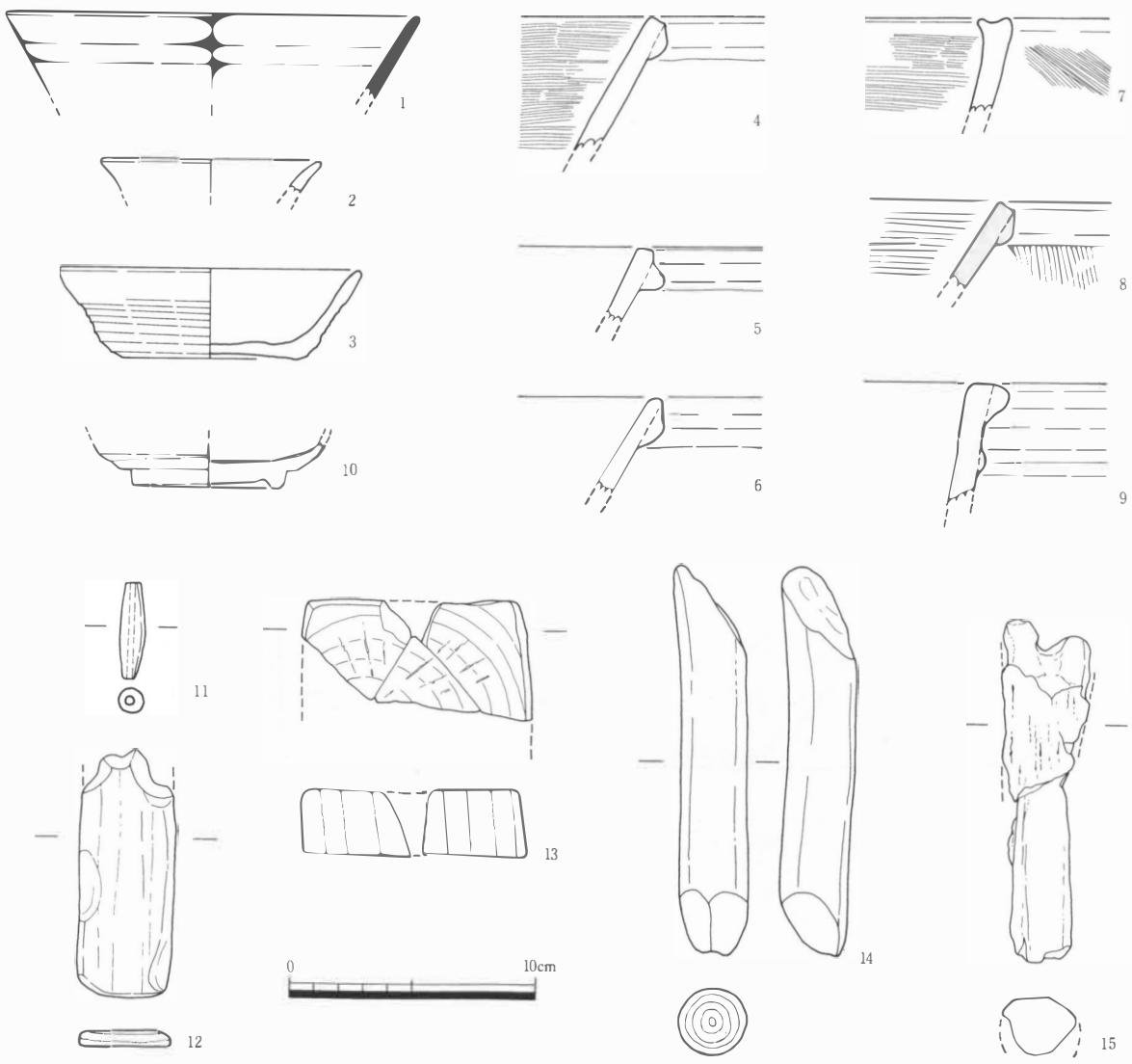


Fig. 46　ＳＸ０１０出土遺物（Ｓ＝１／３）

43・44は瓦質土器の火鉢の底部破片である。いずれも下位に三角突帯を施す。

45は瓦質土器の鉢の口縁部破片である。口縁端部外面に突帯を施し、その下に菊花文スタンプを施す。

46は瓦質土器の浅鉢の破片である。口縁部を逆Ｌ字状に折り曲げ、端部を摘まみ上げる。

47は陶器の大甕の口縁部破片である。口縁部は粘土を折り曲げて肥厚させている。常滑焼の10期か。

48は青磁の輪花皿である。胎土は淡灰色。釉調は淡青色の透明釉で貫入が発達。底部外面および高台内面と下部には施釉せず、高台外面も一部施釉されない。見込部分の釉は掻き取られている。内面は文様を陰刻するが、どのような物かは不明。

49は青磁の碗の口縁部破片である。胎土は淡灰色で黒色粒子を含む。釉調は淡灰緑色で粘性が強く内面には帯状に釉垂れが見られる。外面には４状の櫛目文を施している。

50は青磁の碗の底部破片である。胎土は淡灰色で、黒色粒子を含み粒子は粗い。釉調は青緑色の透明釉で貫入が発達。基本的に高台外面まで施釉する。外面には省略化された蓮弁文が施され、内面見込には花文を陰刻する。

51は青磁の水注の胴部破片である。胎土は淡灰色で黒色粒子を含む。釉調は暗茶緑色の透明釉で内外面ともに施し、貫入が見られる。体部外面には文様を陰刻するも彫り込みが浅く不鮮明。

52は李朝の雑釉陶器の碗の底部である。胎土は淡茶色で黒色粒子を含む。釉調はやや青味がかった白色釉で、全面施釉。高台部および底部外面には気泡の痕跡が著しい。内面見込み部、高台底部および内面に砂目跡を残す。

53は染付けの皿の底部破片である。胎土は灰白色で黒色粒子を含む。呉須で施文の後やや青味がかった透明釉を施す。高台内部及び底部外面には不透明の白色釉を施す。高台畳付は露胎。呉須の色調から明染付と思われる。

54は挽き臼の上臼である。素材は肌理の細かな凝灰岩もしくは安山岩製。上面は供給口に向かい皿状に窪み、周辺部を堤状に作る。把手の差し込み口は浮き彫りによる菱形の装飾が施される。出土した他の石臼に比べ精巧で径も小さい。茶臼か。

55は砥石である。肌理の細かな白色の石材を用いている。

56は板材である。最下層からの出土。

ＳＸ０１０出土遺物（Fig.46、ＰＩ.26－２）

１は須恵器の坏の口縁部破片である。

２は土師器の皿の口縁部破片である。

３は土師器の坏である。ＳＸ０１０の北側テラス部分に直立する状態で出土。完形で、外面には煤の付着が見られる。

４～６は土師器の鍋の口縁部破片である。いずれも口縁端部外面を玉縁状に仕上げるが、他の遺構出土品に比べ、玉縁を下位に施している。

７は土師器の鉢である。

８は瓦質土器の鍋の口縁部破片である。口縁端部外面を玉縁状に作るが、突帯は小さい。

９は瓦質土器の鉢の口縁部破片である。口縁端部外面とその下位に突帯を施す。

10は白磁の皿の底部である。高台は削り出し高台。胎土は薄茶灰色で黒色粒子を含む。釉は淡灰緑色で内面および外面体部中位まで施す。内面は蛇の目状に釉を掻き取る。内面の釉を掻き取った部位および底部外面、高台には赤色顔料を施す。また内面には油煙状のものが付着する。

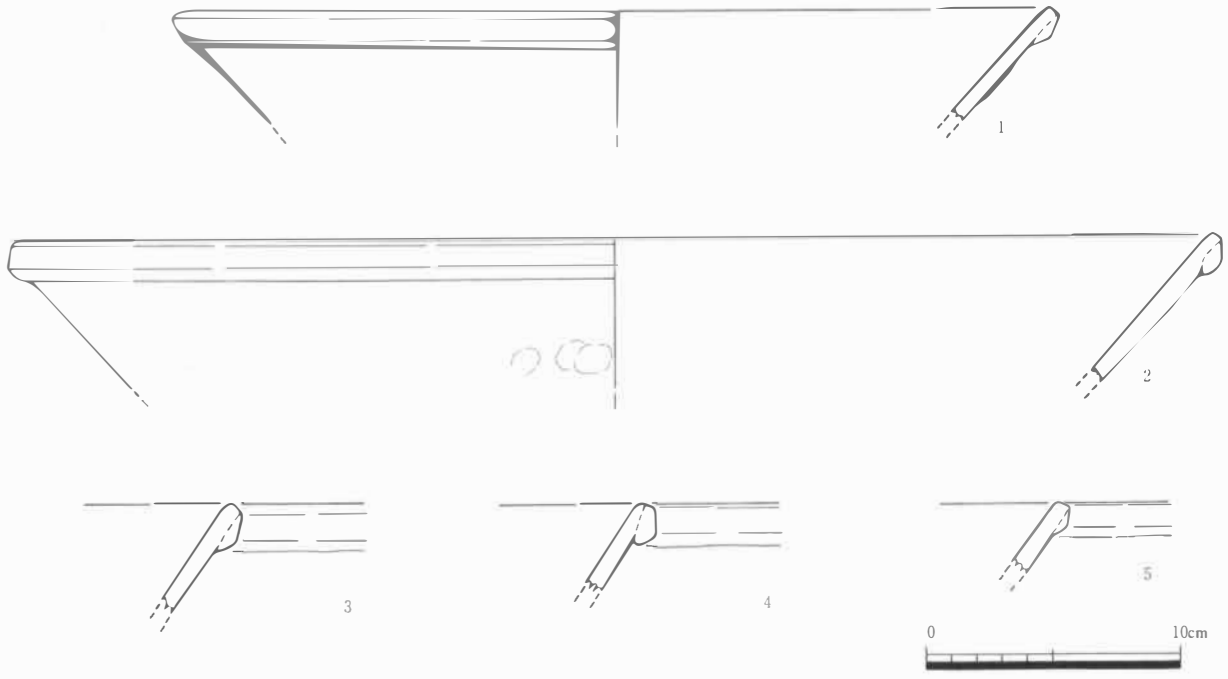
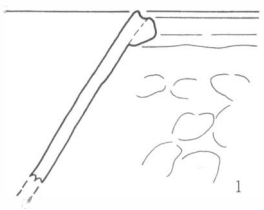


Fig.47　ＳＸ０１６出土遺物（Ｓ＝１／３）



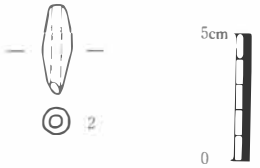


Fig. 48　その他の出土遺物
（S＝1／3）

11は土錘である。完存。

12～14は植物遺体である。12は板材、13は角材と思われる。14はＳＸ０１０の北側に土留め状に巡らせてあった杭の一つである。この他に桃の種子を１点出土している。

15は獣骨の四肢骨である。片方の端部を欠損、周囲の鉄分を含み黄橙色に変化、風化が激しくどの部位であるかは判然としない。この他にろっ骨を出土したが、掘り下げの際に破損してしまい図化しえない。ろっ骨は出土時には白色であったが、空気に触れた際に青色に変色している。

ＳＸ０１６出土遺物（Fig.47、ＰⅠ.26－３）

１～５は土師器の鍋の口縁部破片である。いずれも口縁端部を玉縁状に仕上げる。

その他の出土遺物（Fig. 48）

１は土師器の鍋の口縁部破片である。ＳＰ００６出土。口縁端部を玉縁状に仕上げる。

２は土錘である。検出時に出土。完存。

【参考文献】

森田　勉	「14～16世紀の白磁の形式分類と編年」	『貿易陶磁研究　２』	1982	日本貿易陶磁研究会
上田　秀夫	「14～16世紀の青磁の形式分類と編年」	『貿易陶磁研究　２』	1982	日本貿易陶磁研究会
小野　政敏	「14～16世紀の染付碗・皿の形式分類と編年」	『貿易陶磁研究　２』	1982	日本貿易陶磁研究会
中野　晴久	「中世陶器（常滑）」	『概説　中世の土器・陶磁器』	1995	中世土器研究会　編
宮崎　亮一　編	『太宰府条坊跡XV－陶磁器分類編－』		2000	太宰府市教育委員会

第４章　結語

１　中折地内栗遺跡の性格について

文献に「折地」地名が初見されるのは『筑後市史』によると、筑後蒲池家文書の「宗歴・鎮連連署書状」である。この頃筑後平野では豊後大友氏と肥前龍造寺氏が争っており、名充人の山下城主上蒲池鎮運は龍造寺方から大友氏の武将戸次鎮連（立花道雪）に下り、早速龍造寺方の兵を撃ち破っている。これはその時の感状である。

前十三折地村付城近辺悪党相鮎候所、被懸合、以一戦大手負被仕付、両人打捕頸二持給候、
御粉骨不及申候、弥無御油断、御才覚肝要候、猶重々可申述候、恐々謹言

九月十五日

宗歴（花押）
鎮連（花押）

鎮運参　御返人々申給へ

この文献には年号がないが、天正12年（1584）のことと解釈されている。これによれば16世紀後半に「折地村」が存在し、近くに「付城」が設けられていたことが分かる。筑後郷土史研究会の刊行物によると、元来折地と中折地はひとつの村落であったという。文禄４年（1595）12月、豊臣秀吉が立花宗茂に発した「筑後国知行方目録」（立花文書）には「おり地村」とあり、翌文禄５年４月、立花宗茂が家臣宛に発した知行宛行状には「中おり地村」と記載されている。この頃、両村の分村が行なわれた可能性があるが、明確ではない。また、調査区の北側には字折地小字「屋敷」が位置している。筑後市教育委員会では当初、小字の情況から中世居館の周辺部ではないかとして調査を行なった。

中折地内栗遺跡の柵列、建物群の内、北側の区画のものについては全体像をつかめたとは言えない。調査区の東側には用水路が存在し、この水路を運搬路に利用したと考えれば、水路沿いに倉庫状の建造物を想定することも可能と考える。大型土壙ＳＫ０１５は土層観察の結果、滞水していたのは確実である。これを佐賀県佐賀市立野遺跡に見られる「溜め升遺構」と同じものと考えると、北側区画の空閑地は生産の為の空間と考えられる。

南側区画に関しては建築物が東辺と南辺に展開する。この部分では東側の用水路の終点部に近く、南側は昭和20年代の空中写真によれば宅地状になっている。調査区南端のＳＤ０３５の筋は現在の土地区画の筋とほぼおなじであり、これを東側に延長すると地光寺の西辺にぶつかる。この土地区画を意識させるものが遺跡成立時にも遡ることができると考えられないであろうか。ちなみに地光寺の創建は天文５年（1536）である。

調査区を縦横に走る各溝状遺構の内、ＳＤ００１・００５・０２０・０３０・０３５は、佐賀県神埼郡東背振山村大曲Ａ遺跡に見られるような、それぞれの空間を仕切る為の施設と考えられる。ＳＤ０２５群（０２５～０２９）も同様であろうが、検出しにくい埋土や同じ遺構と考えられるＳＤ００５との規格の違い、ＳＤ０２５とＳＤ０２７（＝０２９）の間にあるＳＤ０２６・０２８の存在等、その有り様は同じとするには違和感を覚える。ＳＤ０１７はＳＫ０１５へ水を導入する為の施設であるが、ＳＤ０２２はＳＫ０２１との下場の高低差がなく、そのような機能を有していたとは考えられない。

ＳＸ０１０は調査区内ではＳＤ００１・００５と接し、他にも２本の溝と接していたと考えられる。埋土観察は行なえなかったが、溜め池の護岸状の木杭列を確認している。これは佐賀県佐賀市立野遺跡に見られる「溜め升」と同じ構造を持った遺構と考えられる。

2　中折地内栗遺跡の出土遺物の年代について

今回の出土品中、磁器は白磁碗、白磁皿、青磁碗、青磁壷、明染付などが見られた。ここでは分類可能なものについて取り上げる。

ＳＤ００５Ｄ軸以北出土の白磁碗（Fig.30－35）については底部破片のみの出土であり、分類形式に当てはめ難い。釉調は灰色がかった透明釉で、体部外面中位まで施釉する。高台は削り出し高台で、高台底部外縁は浮き上がる。底部中央は大きく張り出しており、工具痕跡を明瞭に残している。内面見込は円圏状の沈線の中に花文の印文を持つ。釉調、施釉、印文などは太宰府分類（森田分類）の白磁碗Ｃ－２群に近い印象を持つが、口縁部がない為、確証はない。白磁皿（Fig.30－34）は外反した口縁部と高台を有し、砂敷の焼成である。器形的には上田編年の染付皿Ｂ群に近い。青磁碗（Fig.30－31）は釉は全面施釉後底部外面を掻き取る。内面見込には輪花を陰刻し、花弁を印文する。外面には省略化された線刻蓮弁文を施している。上田分類のＢ－Ⅳ類。

ＳＸ０１０出土の白磁皿は太宰府分類の皿Ⅲ類に似ているが細部が異なり、これに当てはまらない。15世紀以降のものか。

ＳＫ０１５出土の青磁碗（Fig.44－50）は内面見込に花弁印文、外面に線刻蓮弁文を施す。上田編年のＢ－Ⅳ類。もう一点の碗（Fig.44－49）は、外面装飾が同安系青磁に近いが、釉は淡灰緑色で体部に全面施釉してる。龍泉系の蓮弁文の省略形態と考えたい。青磁水注（Fig.44－51）は福岡県久留米市安武城跡ＳＫ44出土遺物と胎土・釉調は近い。

ＳＤ０２５出土の青磁碗（Fig.36－22）は省略化された蓮弁文を有する。上田編年のＢ－Ⅳ類。

出土瓦器の分類は山村信榮の太宰府出土の瓦器分類に従う。茶釜はほとんどが球形のＢ類であり、箱形のＡ類は少ない。Ｂ類にはＢ－Ⅱ類も見ることができる。火鉢も多くがＡ－Ⅱ類で、他はほとんどない。擂鉢はＡ－Ⅲ類のみである。鍋は口縁端外面に突帯を施したＥ－ａ類である。

土師皿・土師坏の出土量は極めて少なく、十数点にすぎない。土師皿（Fig.29－５）は久留米市の「海津城」分類では坏Ａに入る。もう一点（Fig.29－４）は磨滅が激しいが小皿Ｄ類となる。ＳＸ０１０出土土師坏（Fig.46－３）は当てはめる所を見つけられなかったが山本編年に言う所の大坏の類か。

白磁碗Ｃ－２類は15世紀前後、青磁碗Ｂ－Ⅳ類は15世紀中葉から16世紀末、染付皿Ｂ群は15世紀後半から16世紀後半に位置付けられる。瓦器の茶釜Ｂ類はⅠ・Ⅱ類が共に存在するので16世紀前半か。鉢（擂鉢）は15世紀頃から増加するタイプの物である。鍋は14～15世紀の物である。これらから中折地内栗遺跡の年代は15世紀を中心とする中世後半と考えられる。

3　ＳＸ０１０出土の四肢骨について

ＳＸ０１０からは、鉄分が多く付着した風化の著しい四肢骨と、出土時点では白色であったが空気に触れ青色に変色したろっ骨片を出土した。このような四肢骨の出土例は筑後市内では２例目であり、１例目は2002年に実施した西牟田上京手遺跡がある。

西牟田出土例は報告書の刊行後、岡山理科大学の富岡直人氏に実見していただく機会を得た。西牟田資料は鉄分の付着により表面観察が不可能であり、僅かに残る海綿質により哺乳網と判断された。部位は不明である。今後、薄片資料を作成し観察することで、目の同定やどの部位の資料であるかを判断することは可能とのことであった。

中折地資料も状況は極めて近く、部位の決定等は確実とは言えない。今後、この資料に関して御教示を頂けたら幸いである。

4　結び

筑後市内での大きな中世集落の調査事例は鶴田中市ノ塚遺跡、長崎坊田遺跡に次いで3例目となった。これらの時期は中世中～後期とされ、中折地内栗遺跡に近い。しかしながら、その性格は中世荘園と絡めて考察されており、遺構の配置状況から居館や防御拠点として考えられている。

中折地内栗遺跡は、中世、水田荘（天満宮安楽寺領）に属し、南の下妻荘（天満宮安楽寺領）との境に近い。しかし佐賀平野の中世遺跡の調査事例と比較すると、中世居館（城館）ではなく中世聚落（村落）のあり方に共通点を見いだせる。しかしながら、今回の調査区内には人が居住しうる建物は多くなく、村落全体を復元し得る資料とはいえない。また、佐賀平野と筑後平野の聚落の明確な共通性・相違点を明確にできておらず、今後の聚落調査に多くの課題を残したと言える。

【参考文献】

筑紫　豊　監修	『筑後市神社仏閣調査書（八女郡水田村篇）』	1968	筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会
森田　勉	「14～16世紀の白磁の形式分類と編年」『貿易陶磁研究　2』	1982	日本貿易陶磁研究会
上田　秀夫	「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究　2』	1982	日本貿易陶磁研究会
小野　政敏	「14～16世紀の染付碗・皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究　2』	1982	日本貿易陶磁研究会
山本　信夫	「統計上の土器　－歴史時代土師器の編年研究によせて－」『乙益重隆先生古稀記念　九州上代文化論集』	1985	乙益重隆先生古稀記念論文集刊行会
右田　乙次郎	『筑後古島郷土史』	1985	筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会
右田　乙次郎	『筑後下妻郷土史』	1985	筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会
山村　信榮	「太宰府出土の瓦質土器」　『中近世土器の基礎研究　Ⅵ』	1990	日本中世土器研究会
白木　守　編	『安武遺跡群Ⅷ』	1994	久留米市教育委員会
中野　晴久	「中世陶器（常滑）」　『概説　中世の土器・陶磁器』	1995	中世土器研究会　編
宮武　正登	「佐賀平野の村と館　－中世村落の成立と変化－」『中世の風景を読む　7　東シナ海を囲む中世世界』	1995	新人物往来社
前田　達男	『増田遺跡群Ⅱ』　「Ⅳ－4」	1995	佐賀市教育委員会
角　信一郎	『浦田遺跡』	1995	佐賀市教育委員会
西田　厳	『御手水遺跡』　「川久保松原遺跡1・2・3区　3－(3)」「川久保遺跡1区　3－(3)」	1995	佐賀市教育委員会
前田　達男	『友貞遺跡「　－7区の調査－』	1996	佐賀市教育委員会
山口　一郎	『野田遺跡』	1996	佐賀市教育委員会
古賀　章彦	『来迎寺2・3区　若宮原遺跡』　「来迎寺遺跡3区の記録」	1996	佐賀市教育委員会
三代　俊幸	『西千布遺跡1区　友貞遺跡8・9・10・11区』「Ⅵ－5」	1996	佐賀市教育委員会
角　信一郎	『修理田遺跡』	1996	佐賀市教育委員会
角　信一郎	『忠兵衛屋敷遺跡』	1996	佐賀市教育委員会
角　信一郎　編	『下和泉一本椎遺跡』　「Ⅴ－3」	1996	佐賀市教育委員会
前田　達男　編	『東千布遺跡Ⅱ』	1996	佐賀市教育委員会
前田　達男	『東千布遺跡Ⅲ』	1997	佐賀市教育委員会
前田　達男　編	『西千布遺跡2～7区　友貞遺跡7・12区』　「Ⅴ.」	1997	佐賀市教育委員会
筑後市史編さん委員会・編	『筑後市史』	1998	筑後市史編さん委員会
楠本　征士　編	『久富遺跡2区　友貞遺跡13～17区　東千布遺跡4A～4B区』「Ⅳ．久富遺跡2区の記録」	1998	佐賀市教育委員会
小林　勇作	『長崎坊田遺跡』	1999	筑後市教育委員会
楠本　征士　編	『江頭遺跡9区　森田遺跡1区』　「Ⅴ.」～「Ⅹ.」	1999	佐賀市教育委員会
古賀　章彦	『長瀬一本杉遺跡　高木城跡』　「Ⅳ・」	1999	佐賀市教育委員会
古賀　章彦　編	『江頭遺跡1～8区』	1999	佐賀市教育委員会
宮崎　亮一　編	『太宰府条坊跡ⅩⅤ　－陶磁器分類編－』	2000	太宰府市教育委員会
小林　勇作	『筑後市内遺跡群　Ⅳ』	2002	筑後市教育委員会
立石　眞二	『西牟田上京手遺跡』	2003	筑後市教育委員会

Tab.1　遺構一覧

Fig.	S番号	遺構番号	グリット	長軸（m）	短軸（m）	深さ（m）	主軸	平面形状	断面形状	出土遺物	時期	備考
15	1	ＳＤ００１	D21～J21	18.2+α	1.5+α	0.05～0.35	N-86°-W	溝状	段状	弥生土器・須恵器・土師器・瓦器・陶器・焼石	中世	区画溝、→ＳＸ015
	2	ＳＰ００２	D18							土師器		→ＳＢ075
6	3	ＳＰ００３	C15							土師器		ＳＢ070
6	4	ＳＰ００４	D15							黒曜石・木杭		ＳＢ070
16・17	5	ＳＤ００５	J1～J19	55.1+α	11～17+α	0.25～0.6	N-2°-E	北側弧状	Ｕ字～Ｖ字～方形	須恵器・土師器・瓦器・陶器・青磁・白磁・染付	中世	区画溝、→ＳＤ017・025～029・030
										焼石・挽臼・板材		ＳＸ015→、南北に分割可
	6	ＳＰ００６	E13							土師器		
5	7	ＳＰ００７	D13							土師器		ＳＡ080
	8	ＳＸ００８	E12～G12					溝状		土師器	現代	ブロック塀による区画痕跡
	9	ＳＸ００９	H11～I12					方形		土師器	現代	重機痕
26	10	ＳＸ０１０	J19～H21					隅丸方形	段状	須恵器・土師器・瓦器・陶器・青磁・白磁・骨片	中世	溜め池状遺構、→ＳＤ001・005、外に数本の
										桃種子・木杭・板材・角材		溝状遺構あり、護岸状の場列あり
5	11	ＳＰ０１１	D11							土師器		ＳＡ080
6	12	ＳＰ０１２	D16							土師器		ＳＢ070
	13	ＳＰ０１３	D9							木杭		
	14	ＳＰ０１４	D9							土師器		
24	15	ＳＫ０１５	G17～H13					長楕円形状	逆台形	須恵器・土師器・瓦器・青磁・白磁・染付・陶器	中世	溜め桝
										砥石・茶臼・焼石・板材		
	16	ＳＸ０１６	H12～H13					溝状	浅皿状	土師器		ＳＫ015の一部？
18	17	ＳＤ０１７	H13～I14	2.4	0.5～1.7	0.1～0.2	N-87°-W	東側へ開くラッパ状	逆台形	土師器・瓦器	中世	導水路、→ＳＤ005、→ＳＫ015
5	18	ＳＰ０１８	D9							土師器・焼粘土塊		ＳＡ080
12・13	19	ＳＰ０１９	D2							土師器・焼粘土塊		ＳＢ110
19	20	ＳＤ０２０	F17～H17	6.7	0.8～0.95	0.15～0.25	E-W	長方形	段状	土師器・瓦器・青磁・染付・焼粘土塊	中世	区画溝？⇄ＳＫ015
25	21	ＳＫ０２１	K6～K7					倒卵形	逆台形状	土師器		溜め桝？→ＳＤ022
20	22	ＳＤ０２２	K7～L7					溝状	逆台形状	土師器		→ＳＫ021
	23	ＳＰ０２３	C2							土師器		
10・11	24	ＳＰ０２４	C2							土師器・瓦器		ＳＢ105
21	25	ＳＤ０２５	C7～J8					不定形	不定形	須恵器・土師器・瓦器・青磁・陶器・砥石・挽臼	中世	区画溝
										焼石		
21	26	ＳＤ０２６	H7～I7					不定形	不定形	土師器		
21	27	ＳＤ０２７	H7～I7					不定形	不定形	土師器		区画溝
21	28	ＳＤ０２８	D7～H7					不定形	不定形	土師器・瓦器・陶器		
21	29	ＳＤ０２９	C7～H7					不定形	不定形	土師器・瓦器・鏃片・黒曜石		区画溝
22	30	ＳＤ０３０	G3～J3							土師器		区画溝
8	31	ＳＰ０３１	E9							木杭		ＳＢ095
12・13	32	ＳＰ０３２	E4									ＳＢ110
	33	ＳＸ０３３	D1							青磁		→ＳＰ051
10・11	34	ＳＰ０３４	D2							土師器		ＳＢ105
22	35	ＳＤ０３５	D2～G3							須恵器・土師器・瓦器・焼石・軽石	中世	区画溝、ＳＥ040→
10・11	36	ＳＰ０３６	B2							土師器		ＳＢ105
	37	ＳＰ０３７	B2							焼粘土塊		
10・11	38	ＳＰ０３８	B4							土師器		ＳＢ105
10・11	39	ＳＰ０３９	D4							土師器・瓦器		ＳＢ105
23	40	ＳＥ０４０	F1					円形		須恵器・土師器・瓦器・青磁・焼石	中世	人為埋没、→ＳＤ035
5	41	ＳＰ０４１	D4							土師器		ＳＡ090
5	42	ＳＰ０４２	D4							焼粘土塊		ＳＡ090
12・13	43	ＳＰ０４３	D3							土師器		ＳＢ110
12・13	44	ＳＰ０４４	D4							焼粘土塊・焼石		ＳＢ110
	45	ＳＫ０４５	F3									
12・13	46	ＳＰ０４６	E3									ＳＢ110
14	47	ＳＰ０４７	F4							瓦器		ＳＢ115
14	48	ＳＰ０４８	F3									ＳＢ115
14	49	ＳＰ０４９	F3									ＳＢ115
12・13	50	ＳＰ０５０	E2									ＳＢ110
	51	ＳＰ０５１	D1									→ＳＸ033
10・11	52	ＳＰ０５２	B1									ＳＢ105
10・11	53	ＳＰ０５３	D3									ＳＢ105
10・11	54	ＳＰ０５４	B3									ＳＢ105
9	55	ＳＰ０５５	C4									ＳＢ100
9	56	ＳＰ０５６	C4									ＳＢ100
9	57	ＳＰ０５７	C5							土師器		ＳＢ100
	58	ＳＰ０５８	D5							土師器		
5	59	ＳＰ０５９	D5									ＳＡ090
5	60	ＳＰ０６０	D6									ＳＡ090
5	61	ＳＰ０６１	D6									ＳＡ090
9	62	ＳＰ０６２	B4									ＳＢ100
	63	ＳＫ０６３	H21							土師器		ＳＤ001下位遺構
5		ＳＡ０８０	D8～D13	13.4			N-2°-E			土師器・粘土塊		ＳＰ007・011・018
5		ＳＡ０９０	D4～D7	8.2			N-3°-E			土師器・粘土塊		ＳＰ041・042

Tab.2　掘立柱建物一覧

Fig.	S番号	遺構番号	グリット	長軸（m）	短軸（m）	面積（㎡）	主軸	平面形状		出土遺物	時期	備考
6		SB070	D15~D16	4.4	2.2+α	10.4+α	N-0°30'-E	3間×1間+α		土師器・黒曜石片・木杭		SP003・004・012
6		SB075	C17~D19	4.1	2.1+α	7.0+α	N-2°-E	2間×1間+α				
7		SB085	C12~D13	4.5~4.3	3	13.6	N-2°-E	3間×1間				
8		SB095	D9~E10	2.6	2.4~2.5	6.3	N-1°30'-E	1間×1間		木杭		SP031
9		SB100	B4~C5	3.9	3	8.5+α	N-0°30'-E	2間×1間		土師器		SP057
10・11		SB105	B1~D4	6.2	3.9~3.6	23.8	N-0°30'-E	3間×1間		土師器・瓦器		SP024・034・036・038・039
12・13		SB110	D2~E5	4.1~4.2	2.1	9	N-1°-E	2間×1間		土師器・焼粘土塊		SP019・043・044
14		SB115	E3~F4	3.9~3.6	2.9	10.7	N-0°30'-E	2間×1間		瓦器		SP047

Tab.3　出土土器一覧

Fig	No	遺構	種別	器種	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	残存	色調（外/内）	胎土	焼成	備考（時期）
27	2	SB105	瓦質土器	茶釜	(13.8)	(17.0)	(14.0)	1/6	淡灰色	精良	やや良	SP039、外面下半部煤付着、山村BⅡ類
27	3	SB105	土師器	鍋				口縁部細片	茶褐色	1㎜大の砂粒	やや良	SP039、玉縁
27	4	SB110		粘土塊	11.0	8.8	4.5		淡茶灰色~灰色	精良	良好	SP019、245.0g
28	1	SD001	弥生土器	甕				口縁部細片	淡茶褐色	1㎜大の砂粒、赤色粒子を含む	やや良	弥生後期前半
28	2	SD001	須恵器	鉢				底部細片	淡灰色	精良	やや良	
28	3	SD001	土師器	Ⅲ		(8.0)		底部1/5	暗茶褐色	精良、赤色粒子やや多い	やや良	回転糸切
28	4	SD001	土師器	鍋				口縁部細片	暗灰茶色	1~3㎜の砂粒多い	やや良	玉縁
28	5	SD001	土師器	鍋				口縁部細片	濃茶褐色	砂粒少量、金雲母片多い	やや良	玉縁、外面に薄く煤付着
28	6	SD001	土師器	鍋				口縁部細片	茶褐色	1~2㎜の砂粒、金雲母片、角閃石やや多い	やや良	玉縁、口縁端部凹有、外面に薄く煤付着
28	7	SD001	土師器	鍋				口縁部細片	茶褐色	微細粒少量、赤色粒子やや多く含む	やや良	玉縁
28	8	SD001	土師器	鍋				口縁部細片	茶褐色~黒褐色	1~3㎜の砂粒多い	やや良	玉縁
28	9	SD001	土師器	鍋				口縁部細片	淡灰茶色	細砂粒少量、金雲母片多い	やや良	玉縁
28	10	SD001	土師器	鍋				口縁部細片	淡茶褐色	1㎜の砂粒、赤色粒子、雲母やや多い	やや良	玉縁、外面に薄く煤付着
28	11	SD001	土師器	耳鍋				口縁部細片	淡茶褐色~黒褐色	1㎜大の砂粒やや多い	やや良	外面より焼成前穿孔、外面に薄く煤付着
28	12	SD001	土師器	茶釜				口縁部細片	暗茶褐色	精良	やや良	
28	13	SD001	瓦質土器	茶釜				体部細片	淡茶灰色	微細砂粒少量、金雲母多い	やや良	下部煤付着
28	14	SD001	土師器	平瓦				細片	明茶褐色	精良	良好	近世以降、水田焼、桶巻作、側面面取
28	15	SD001	瓦質土器	鉢				柄基部細片	淡灰茶色	精良	良好	フライパン型、X字型の線刻有
28	16	SD001	瓦質土器	火鉢				体部細片	暗灰色	細砂粒少量	やや良	突帯部での体部径約44cm
28	17	SK064	土師器	鍋				口縁部細片	淡赤茶色	1㎜大の砂粒少量、赤色粒子多い	不良	玉縁
28	18	SK064	土師器	鍾				破片	淡茶色	精良？赤色粒子	やや良	
29	1	SD005D軸以北	須恵器	擂鉢	(32.0)			口縁部1/6	青灰色	1~3㎜の砂粒	良好	擂目単位7
29	2	SD005D軸以北	須恵器	擂鉢				口縁部細片	暗青灰色	細砂粒少量	良好	
29	3	SD005D軸以北	須恵器	擂鉢				口縁部細片	淡灰色	精良	やや良	擂目単位4
29	4	SD005D軸以北	土師器	Ⅲ	(9.2)	6.2	2.1	口縁部欠損多い	淡灰茶色	細砂粒少量	不良	回転糸切
29	5	SD005D軸以北	土師器	Ⅲ	10.0	5.7	2.0	完存	淡灰茶色	細砂粒少量	やや良	回転糸切、口縁内面に油煙付着
29	6	SD005D軸以北	土師器	鍋	(30.0)	17.5	14.1	1/3	暗茶褐色	1~2㎜の砂粒少量	良好	窯口縁、外面煤、内底面炭化物付着
29	7	SD005D軸以北	瓦質土器?	鍋	(30.0)			口縁部1/5	明灰茶色	1㎜大の砂粒やや多い	良好	窯口縁、芯黒無
29	8	SD005D軸以北	土師器	鍋				口縁部細片	暗茶褐色	1㎜大の砂粒、角閃石、雲母片多い	やや良	玉縁、外面煤付着
29	9	SD005D軸以北	土師器	鍋				口縁部細片	茶褐色	1~2㎜の砂粒、金雲母片やや多い	やや良	玉縁、外面煤付着
29	10	SD005D軸以北	土師器	鍋				口縁部細片	明茶褐色	1~2㎜の砂粒	やや良	玉縁
29	11	SD005D軸以北	土師器	鍋				口縁部細片	茶褐色	1㎜の砂粒やや多い	やや良	玉縁、外面煤付着
29	12	SD005D軸以北	土師器	鍋				口縁部細片	淡茶褐色	1~2㎜の砂粒、雲母片少量	良好	玉縁、外面下半薄く煤付着
29	13	SD005D軸以北	土師器	鍋				口縁部細片	明茶褐色	1~3㎜の砂粒少量	やや良	玉縁、外面下半薄く煤付着
29	14	SD005D軸以北	土師器	鍋				口縁部細片	淡茶灰色	1~2㎜の砂粒やや多い	不良	玉縁
29	15	SD005D軸以北	土師器	鍋				口縁部細片	黄茶色	1~2㎜の砂粒、金雲母片やや多い	良好	玉縁、外面煤付着
29	16	SD005D軸以北	土師器	茶釜	(16.0)			口縁部1/5	明茶色	精良	やや良	肩部スタンプ
29	17	SD005D軸以北	瓦質土器	鍋（焙烙?）				口縁部細片	黒灰色	1~2㎜の砂粒、雲母片やや多い	やや良	外面煤付着
29	18	SD005D軸以北	瓦質土器	鍋（鉢?）				口縁部細片	淡灰茶色	精良	不良	玉縁、山村Ea（FⅢb）類
29	19	SD005D軸以北	瓦質土器	耳鍋				口縁部細片	淡灰茶色	精良	やや良	山村F1類
30	20	SD005D軸以北	瓦質土器	擂鉢	(32.0)			口縁部細片	淡灰茶色	細砂粒少量	やや良	玉縁、擂目単位6、山村AⅢb類
30	21	SD005D軸以北	土師器	擂鉢				口縁部細片	黒灰色／明茶色	砂粒極少量、赤色粒子多い	不良	片口有、擂目単位5、山村AⅢa類
30	22	SD005D軸以北	土師器	擂鉢				口縁部細片	灰茶色	砂粒極少量	不良	擂目単位5
30	23	SD005D軸以北	瓦質土器	火鉢				口縁部細片	淡黒灰色／淡赤茶色	精良、赤色粒子多い	やや良	菊花文スタンプ
30	24	SD005D軸以北	瓦質土器	火鉢				口縁部細片	淡灰茶色	精良	やや良	
30	25	SD005D軸以北	瓦質土器	鉢				口縁部細片	暗茶色	精良	良好	擂座系突鉢？
30	26	SD005D軸以北	瓦質土器	茶釜	(12.2)			口縁部細片	灰黒色	精良	良好	半截竹管文、雷文（下がり藤）スタンプ
30	27	SD005D軸以北	瓦質土器	茶釜	(10.8)			口縁部細片	淡茶灰色	微細粒極少量	不良	鳥襷文・菊花文スタンプ
30	28	SD005D軸以北	瓦質土器	茶釜	(14.3)			口縁部1/6	淡茶灰色	精良	良好	雷文？スタンプ、外面下半煤付着
30	29	SD005D軸以北	瓦質土器	茶釜				体部1/6	淡灰茶色	精良	やや良	
30	30	SD005D軸以北	瓦質土器	茶釜				口縁部細片	淡黒灰色	精良	良好	
30	31	SD005D軸以北	青磁	碗		5.3		底部	淡茶色（淡緑透明釉）		良好	見込に印花文・輪花文、削出高台、全面施釉後
												高台内面掻取、上田BⅣ類
30	32	SD005D軸以北	白磁	Ⅲ		(7.0)		底部1/6	淡灰色（白濁釉）		良好	細かな貫入有、畳付部掻取
	33	SD005D軸以北	白磁	Ⅲ		(6.0)		〃 底部1/4	淡灰白色（白色釉）		不良	釉薬はガラス化していない、畳付部掻取
30	34	SD005D軸以北	白磁	Ⅲ	(11.0)	(5.7)	3.1	1/6	淡灰白色（白色釉）	黒色粒子若干	良好	無紋の染付、上田B群
30	35	SD005D軸以北	白磁	碗		(6.2)		底部1/2	淡黄灰色（淡緑灰色釉）		良好	見込円圏内に印花文、削出高台、体部下半から
												高台にかけて無釉、太宰府ⅡC類
30	36	SD005D軸以北	染付	碗		(4.8)		底部1/2	淡灰色（淡青透明釉）	黒色粒子少量	良好	呉須により施文、高台内部は乳白色釉、畳付部
												掻取、上田C類
32	1	SD005D軸以南	須恵器	擂鉢	(28.0)			口縁部1/10	青灰色	精良	良好	擂目単位5、山村AⅢc類
32	2	SD005D軸以南	土師器	鍋	(46.0)	(31.4)	10.7	1/3	暗茶褐色	1~3㎜の砂粒、金雲母多い。角閃石少量。	良好	玉縁、外面煤付着
32	3	SD005D軸以南	土師器	鍋				口縁部細片	明茶色	1~2㎜の砂粒多い。雲母、角閃石少量。	良好	玉縁、外面煤付着
32	4	SD005D軸以南	土師器	鍋				口縁部細片	暗茶褐色	1~3㎜の砂粒やや多い。雲母片。	やや良	玉縁
32	5	SD005D軸以南	土師器	鍋				口縁部細片	暗茶褐色~黒褐色	細砂粒少量。雲母片やや多い。	良好	玉縁
32	6	SD005D軸以南	土師器	鍋				口縁部細片	暗褐色/淡茶褐色	細砂粒少量。雲母片やや多い。	良好	玉縁

Fig.	No	遺構	種別	器種	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	残存	色調（外/内）	胎土	焼成	備考（時期）
32	7	SD005D軸以南	土師器	鍋				口縁部細片	淡茶色	1～2㎜の砂粒やや多い	やや良	玉縁
32	8	SD005D軸以南	土師器	鍋				口縁部細片	暗茶褐色	1～2㎜の砂粒やや多い。金雲母。	良好	玉縁、外面一部煤付着
32	9	SD005D軸以南	土師器	鍋				口縁部細片	茶褐色	細砂粒少量。金雲母片。	良好	玉縁、外面煤付着
32	10	SD005D軸以南	土師器	鍋				口縁部細片	暗茶褐色	細砂粒少量。	良好	玉縁、全面煤付着
32	11	SD005D軸以南	土師器	鍋				口縁部細片	淡灰茶色	細砂粒少量。雲母多い。	やや良	玉縁
32	12	SD005D軸以南	土師器	鍋				口縁部細片	淡灰茶色	1㎜の砂粒、角閃石少量。	やや良	玉縁
32	13	SD005D軸以南	土師器	鍋				底部細片	暗茶褐色	1～2㎜の砂粒、金雲母、角閃石多い。	良好	外面体部煤付着
32	14	SD005D軸以南	土師器	耳鍋				口縁部細片	暗茶褐色	1～2㎜の砂粒少量。雲母片、赤色粒子。	良好	山村ＦⅠ類の模倣？
33	15	SD005D軸以南	土師器	鉢				口縁部細片	暗褐色/明茶色	細砂粒少量。	良好	
33	16	SD005D軸以南	瓦質土器	鍋（鉢？）				口縁部細片	淡灰茶色	精良	やや良	山村Ｅａ（ＦⅢｂ）類
33	17	SD005D軸以南	瓦質土器	火鉢				口縁部細片	淡灰茶色	精良	良好	菊花文、刺突（花）文、半截竹管文
33	18	SD005D軸以南	瓦質土器	火鉢				底部細片	灰茶色	精良	良好	内面煤付着
33	19	SD005D軸以南	瓦質土器	擂鉢	(27.0)	(18.4)	4.9	1/8	淡茶灰色	精良	やや良	
33	20	SD005D軸以南	瓦質土器	茶釜	(15.4)			口縁部1/6	淡黒灰色	精良	やや良	山村Ｂ類
33	21	SD005D軸以南	瓦質土器	茶釜	(16.2)			口縁部1/8	淡茶灰色	精良	やや良	山村Ａ類
33	22	SD005D軸以南	瓦質土器	茶釜				口縁部細片	淡茶灰色/淡灰茶色	精良	やや良	
33	23	SD005D軸以南	青磁	碗				口縁部細片	淡灰色（青緑色釉）		良好	
33	24	SD005D軸以南	磁器	Ⅲ	(10.8)	(5.6)	2.4	底部1/2	乳灰色（淡緑透明釉）		良好	量付、内底面無施釉
33	25	SD005D軸以南	白磁	Ⅲ？				口縁部細片	淡灰色（淡灰色）		良好	大きな釉ダレ有
34	1	ＳＤ０１７	土師器	鍋				口縁部細片	茶褐色	1～2㎜の砂粒少量、角閃石、雲母片	やや良	玉縁、外面煤付着
34	2	ＳＤ０１７	土師器	鍋				口縁部細片	茶褐色	1～2㎜の砂粒、角閃石、赤色粒子	やや良	玉縁、外面煤付着
34	3	ＳＤ０１７	土師器	鍋				口縁部細片	淡茶色	1～2㎜の砂粒少量、角閃石、雲母片	やや良	玉縁、外面煤付着
34	4	ＳＤ０２０	土師器	鍋	(40.0)			口縁部1/10	淡茶色	1～2㎜の砂粒多い、雲母片	不良	玉縁、外面煤付着
34	5	ＳＤ０２０	土師器	鍋				口縁部細片	茶褐色	1～2㎜の砂粒多い、角閃石	良好	玉縁
34	6	ＳＤ０２０	土師器	鍋				底部細片	茶褐色	1～2㎜の砂粒多い、雲母片	やや良	
34	7	ＳＤ０２０	土師器	茶釜				体部1/12	明赤茶色	精良	やや良	体部球形、径30.0㎝
34	8	ＳＤ０２０	瓦質土器	鉢	(32.0)			口縁部1/8	黒灰色	1～5㎜の砂粒含む	不良	
34	9	ＳＤ０２０	瓦質土器	火鉢		(25.0)		底部1/10	茶褐色	精良	良好	有脚（半円形？）
34	10	ＳＤ０２０	染付	碗				底部1/4	乳白色（透明釉）		良好	呉須により施文
35	1	ＳＤ０２５	須恵器	甕	(16.0)			口縁部1/8	淡青灰色	精良	良好	
35	2	ＳＤ０２５	須恵器	擂鉢				口縁部細片	淡青灰色	1～5㎜の砂粒やや多い、角閃石、雲母片少量	やや良	内面煤付着、擂り目単位6、山村ＡⅢｃ類
35	3	ＳＤ０２５	土師器	鍋	(38.0)			口縁部1/6	明茶褐色	1～2㎜の砂粒少量、角閃石、雲母片	良好	玉縁、内面炭化物、外面煤付着
35	4	ＳＤ０２５	土師器	鍋	(38.0)			口縁部1/6	淡褐色	1～2㎜の砂粒、角閃石、雲母片	良好	玉縁、内面炭化物、外面煤付着、35－5と同一？
35	5	ＳＤ０２５	土師器	鍋	(35.0)			口縁部1/8	淡褐色	1～2㎜の砂粒、角閃石、雲母片	良好	玉縁、内面炭化物、外面煤付着、35－4と同一？
35	6	ＳＤ０２５	土師器	鍋				口縁部細片	灰褐色	1～2㎜の砂粒多い、角閃石	やや良	玉縁、外面煤付着
35	7	ＳＤ０２５	土師器	鍋				口縁部細片	暗茶褐色	1㎜の砂粒多い、角閃石多い	良好	玉縁、内面炭化物、外面煤付着
35	8	ＳＤ０２５	土師器	鍋				底部細片	暗褐色	1～2㎜の砂粒やや多い、角閃石、雲母片	やや良	外面煤付着
35	9	ＳＤ０２５	土師器	坏	(14.0)	(8.8)	4.5	1/5	淡灰茶色	細砂粒少量含む	やや良	底部回転糸切痕
35	10	ＳＤ０２５	土師器	坏（壺？）		(7.5)		底部1/3	灰茶色	精良	良好	底部回転糸切痕
35	11	ＳＤ０２５	土師器	火鉢				口縁部細片	淡赤茶色	精良	やや良	
35	12	ＳＤ０２５	瓦質土器	捏ね鉢	(36.0)			口縁部1/10	淡灰茶色	精良	良好	底部ハケ目のちヘラケズリ
36	13	ＳＤ０２５	瓦質土器	茶釜	(16.3)			口縁部1/8	灰茶色	微細粒含む	やや良	
36	14	ＳＤ０２５	瓦質土器	茶釜	(15.0)			口縁部1/8	黒灰色	精良	やや良	肩部菊唐草スタンプ
36	15	ＳＤ０２５	瓦質土器	茶釜	(15.0)			口縁部1/6	灰黒色	精良	良好	肩部菊花文スタンプ
36	16	ＳＤ０２５	瓦質土器	茶釜				把手部	淡灰色	精良	やや良	
36	17	ＳＤ０２５	瓦質土器	茶釜				体部細片	灰色／淡灰茶色	精良	良好	
36	18	ＳＤ０２５	瓦質土器	茶釜		(14.0)		底部1/5	淡灰色／淡灰茶色	精良	良好	
36	19	ＳＤ０２５	瓦質土器	火鉢		(29.0)		底部1/4	灰黒色	細砂粒多い、角閃石、雲母片	良好	紐の結び目のようなスタンプ
36	20	ＳＤ０２５	瓦質土器	火鉢				底部細片	灰茶色	精良	良好	
36	21	ＳＤ０２５	青磁	壺	(11.0)			口縁部1/10	乳白色（淡青色透明釉）		良好	細かな貫入が発達
36	22	ＳＤ０２５	青磁	碗	(12.0)			口縁部1/6	淡灰色（暗緑色釉）		やや良	蓮弁は簡略化、内面見込に陰刻、細かな貫入有
36	23	ＳＤ０２５	施釉陶器	碗	(13.6)			口縁部1/8	乳茶色（淡緑茶色透明釉）		良好	細かな貫入が発達、37－３と同タイプ
37	1	ＳＤ０２８	土師器	小皿	(6.6)	4.5	1.5	口縁部欠損	淡灰茶色	精良	やや良	
37	2	ＳＤ０２８	土師器	鍋				口縁部細片	暗褐色	1～3㎜の砂粒	やや良	玉縁、外面煤付着
37	3	ＳＤ０２８	施釉陶器	碗	(14.0)			口縁部1/6	乳茶色（淡緑茶色透明釉）		良好	細かな貫入が発達、36－23と同タイプ
37	4	ＳＤ０２７	土師器	鍋				口縁部細片	淡灰茶色	1～2㎜の砂粒多い、金雲母片	やや良	玉縁
37	5	ＳＤ０２７	土師器	鍋				口縁部細片	暗褐色	1～2㎜の砂粒やや多い、角閃石、雲母片	やや良	玉縁、外面煤付着
37	6	ＳＤ０２７	瓦質土器	茶釜				体部細片	灰黒色	精良	やや良	外面煤付着（破砕面にも付着）
37	7	ＳＤ０３０	土師器	鍋	(46.0)			口縁部1/10	茶褐色	1～2㎜の砂粒やや多い、角閃石、金雲母片	良好	玉縁、外面煤付着、38－３と同一
37	8	ＳＤ０３０	土師器	香炉				脚部	淡茶色	精良	不良	
37	9	ＳＤ０３０		粘土塊					淡茶色～黒灰色	4㎜大の砂粒極僅か	やや良	
38	1	ＳＤ０３５	須恵器	甕		(30.0)		底部1/3	赤茶色	1～5㎜の砂粒少量	良好	
38	2	ＳＤ０３５	土師器	坏	(10.0)	(4.0)	2.9	1/4	淡茶色	精良	不良	
38	3	ＳＤ０３５	土師器	鍋	(46.0)	(17.0)	17.2	1/8	茶褐色	1～2㎜の砂粒やや多い、角閃石、金雲母片	良好	玉縁、外面煤付着、37－７と同一
38	4	ＳＤ０３５	土師器	鍋	34.8			口縁一部、底部欠損	淡茶褐色	1～5㎜の砂粒数個含む	良好	玉縁、外面煤付着
38	5	ＳＤ０３５	瓦質土器	鉢	(32.0)			口縁部1/6	淡灰色	1～2㎜の砂粒極少量、雲母片	良好	
38	6	ＳＤ０３５	瓦質土器	火鉢				脚部	暗灰色	精良	良好	
39	1	ＳＥ０４０	須恵器	鉢				口縁部細片	灰茶色	細砂粒、金雲母片多い	やや良	玉縁
39	2	ＳＥ０４０	土師器	坏		6.5		底部のみ	乳茶色	細砂粒少量	不良	回転糸切、切り離しが不良で粘土が付着
39	3	ＳＥ０４０	土師器	坏	(11.6)	7.2	3.6	1/2	淡灰色	2㎜の砂粒少量、角閃石	不良	
39	4	ＳＥ０４０	土師器	鍋				口縁部細片	暗褐色	細砂粒少量、金雲母片	良好	玉縁、内面炭化物、外面煤付着
39	5	ＳＥ０４０	土師器	鍋				口縁部細片	暗褐色	細砂粒少量、角閃石、金雲母片	良好	玉縁、外面煤付着
39	6	ＳＥ０４０	土師器	鍋				口縁部細片	乳茶色	1～3㎜の砂粒多い	良好	玉縁
39	7	ＳＥ０４０	瓦質土器	茶釜				体部細片	暗茶灰色	精良	やや良	外底面煤付着（破砕面も）
39	8	ＳＥ０４０	瓦質土器	茶釜				体部細片	暗灰茶色	精良	良好	
39	9	ＳＥ０４０	瓦質土器	茶釜	(13.0)			口縁部1/4	暗灰色	精良	良好	山村ＢⅡ類
39	10	ＳＥ０４０	青磁	碗				底部1/2（高台欠）	淡灰色（淡緑青色釉）		良好	高台内部赤色顔料塗布
40	1	ＳＫ０１５	須恵器	擂鉢	(28.0)	12.8	(12.0)	1/4	灰～暗青灰色	1～3㎜の砂粒少量、黒色粒子、角閃石	良好	擂目単位７条、片口、外面一部煤付着
40	2	ＳＫ０１５	土師器	耳鍋				口縁部細片	茶褐色	細砂粒少量、金雲母片	良好	内側より穿孔（２ヶ所）、外面煤付着
40	3	ＳＫ０１５	土師器	耳鍋				口縁部細片	暗茶褐色	1～2㎜の砂粒やや多い、角閃石、金雲母片	やや良	外側より穿孔（２ヶ所）、外面煤付着
40	4	ＳＫ０１５	土師器	鍋	(52.0)	(38.0)		口縁部1/6	茶褐色	1～2㎜の砂粒少量、角閃石、金雲母片	良好	玉縁、外面煤付着、内面炭化物付着

Fig.	No	遺構	種別	器種	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	残存	色調（外/内）	胎土	焼成	備考（時期）
40	5	ＳＫ０１５	土師器	鍋	(52.0)	(38.0)		口縁部1/6	茶褐色	1～2㎜の砂粒少量、角閃石、金雲母片	良好	玉縁、外面煤付着、内面炭化物付着
40	6	ＳＫ０１５	土師器	鍋	(42.0)			口縁部1/6	暗茶褐色	細砂粒少量、金雲母片	良好	玉縁、外面煤付着
40	7	ＳＫ０１５	土師器	鍋	(46.0)			口縁部1/12	暗褐色	1～2㎜の砂粒多い、角閃石、金雲母片	やや良	玉縁
41	8	ＳＫ０１５	土師器	鍋	(44.0)			口縁部1/12	茶褐色	細砂粒少量、角閃石、金雲母片	やや良	玉縁、外面煤付着、内面炭化物付着
41	9	ＳＫ０１５	土師器	鍋	(48.0)			口縁部1/12	茶褐色	1㎜の砂粒やや多い、金雲母片	やや良	玉縁、外面煤付着、内面炭化物付着
41	10	ＳＫ０１５	土師器	鍋	(36.0)			口縁部1/6	茶褐色	細砂粒少量、金雲母片	良好	玉縁、外面煤付着、内面炭化物付着
41	11	ＳＫ０１５	土師器	鍋				口縁部細片	茶褐色	細砂粒少量、角閃石、金雲母片	やや良	玉縁、外面煤付着、内面炭化物付着
41	12	ＳＫ０１５	土師器	鍋				口縁部細片	暗茶褐色	1～2㎜の砂粒、角閃石、金雲母片	やや良	玉縁、外面煤付着
41	13	ＳＫ０１５	土師器	鍋				口縁部細片	淡茶褐色	1～3㎜の砂粒やや多い、金雲母片	やや良	玉縁
41	14	ＳＫ０１５	土師器	鍋				口縁部細片	淡茶灰色	1～2㎜の砂粒	やや良	玉縁、外面煤付着
41	15	ＳＫ０１５	土師器	鍋				口縁部細片	灰茶褐色	砂粒少ない、金雲母	良好	玉縁、外面煤付着
41	16	ＳＫ０１５	土師器	鍋				口縁部細片	淡灰茶色	1～2㎜の砂粒多い、金雲母	不良	玉縁
41	17	ＳＫ０１５	土師器	鍋				口縁部細片	茶褐色	1～2㎜の砂粒やや多い、金雲母片	やや良	玉縁、外面煤付着
41	18	ＳＫ０１５	土師器	鍋				口縁部細片	明赤茶色	細砂粒少量、赤色粒子、雲母片	不良	玉縁
41	19	ＳＫ０１５	土師器	鍋				口縁部細片	茶褐色	1㎜砂粒やや多い、角閃石、金雲母	やや良	玉縁、外面煤付着
41	20	ＳＫ０１５	土師器	鍋				口縁部細片	暗褐色	1～2㎜の砂粒多い、雲母片	やや良	玉縁、外面煤付着
41	21	ＳＫ０１５	土師器	鍋				口縁部細片	淡茶色	1㎜砂粒少量、雲母片	やや良	玉縁
41	22	ＳＫ０１５	土師器	鍋				口縁部細片	淡茶褐色	砂粒少ない、雲母片	やや良	玉縁、外面煤付着
41	23	ＳＫ０１５	土師器	鍋				口縁部細片	茶褐色	1㎜の砂粒、角閃石やや多い	やや良	玉縁、外面煤付着
41	24	ＳＫ０１５	土師器	鍋				口縁部細片	暗褐色	1～2㎜の砂粒やや多い	やや良	玉縁、外面煤付着
42	25	ＳＫ０１５	土師器	鍋				口縁部細片	茶褐色	1～2㎜の砂粒、金雲母	やや良	玉縁、外面煤付着
42	26	ＳＫ０１５	土師器	鍋				口縁部細片	茶褐色	砂粒少ない、金雲母片	やや良	玉縁、外面煤付着
42	27	ＳＫ０１５	土師器	鍋				口縁部細片	赤茶色	1～2㎜の砂粒やや多い	やや良	玉縁
42	28	ＳＫ０１５	土師器	鍋				口縁部細片	暗褐色	1～2㎜の砂粒やや多い、金雲母片	やや良	外面煤付着
42	29	ＳＫ０１５	土師器	鍋				口縁部細片	暗褐色	1㎜の砂粒やや多い、角閃石、金雲母	やや良	外面煤付着、内面炭化物付着
42	30	ＳＫ０１５	土師器	鍋		(38.0)		底部1/8	茶褐色	1㎜の砂粒少量、角閃石、金雲母多い	良好	外面煤付着、内面炭化物付着
42	31	ＳＫ０１５	土師器	茶釜	(16.0)			口縁部1/8	明赤茶色	精良	やや良	
42	32	ＳＫ０１５	瓦質土器	鍋				口縁部細片	黒褐色/淡茶色	精良	やや良	玉縁
42	33	ＳＫ０１５	瓦質土器	鍋				口縁部細片	灰黒色/淡茶色	精良	やや良	玉縁
42	34	ＳＫ０１５	瓦質土器	茶釜	(16.0)			口縁部1/8	淡茶灰色	精良	やや良	
42	35	ＳＫ０１５	瓦質土器	茶釜	(16.0)			口縁部1/4	黒灰色	精良	やや良	山村Ａ類
42	36	ＳＫ０１５	瓦質土器	茶釜	(14.0)			上半1/2	灰黒色	精良	良好	山村ＢⅡ類、胴部菊花スタンプ・半截竹管文、
												外面煤付着
42	37	ＳＫ０１５	瓦質土器	茶釜		(19.2)		体部1/2	黒灰色	精良	良好	山村ＢＩ類？
43	38	ＳＫ０１５	瓦質土器	釜				体部1/8	淡灰色	微細砂粒少量	やや良	
43	39	ＳＫ０１５	瓦質土器	擂鉢				口縁部細片	灰黒色	1～5㎜の砂粒やや多い	不良	山村ＡⅢａ類？片口、擂目磨滅
43	40	ＳＫ０１５	瓦質土器	大甕	(34.0)			口縁部1/4	淡灰色	精良	やや良	貼付浮文、刻目文
43	41	ＳＫ０１５	瓦質土器	火鉢	(32.0)			口縁部1/6	明茶色	精良	やや良	
43	42	ＳＫ０１５	瓦質土器	火鉢	(32.0)			口縁部1/6	淡灰茶色	精良	やや良	
43	43	ＳＫ０１５	瓦質土器	火鉢		(22.6)		底部1/6	茶褐色	赤色粒子	やや良	
43	44	ＳＫ０１５	瓦質土器	火鉢				底部細片	黒灰色	精良	良好	
43	45	ＳＫ０１５	瓦質土器	鉢				口縁部細片	淡赤茶色	精良	やや良	菊花文スタンプ
43	46	ＳＫ０１５	瓦質土器	浅鉢	(21.0)	(18.0)	6.8	1/6	淡茶灰色	精良	やや良	
44	47	ＳＫ０１５	常滑焼	甕	(33.0)			口縁部1/8	暗紫褐色	1～2㎜の砂粒少量	良好	10もしくは11形式
44	48	ＳＫ０１５	青磁	輪花皿	(13.0)	(6.0)	3.2	1/6	淡灰色（淡青色透明釉）		良好	内面文様有、貫入発達
44	49	ＳＫ０１５	青磁	碗	(12.8)			口縁部1/4	淡灰色（淡灰緑色釉）	黒色粒子含む	良好	外面に四条の櫛目文
44	50	ＳＫ０１５	青磁	碗		(5.0)		底部のみ	淡灰色（青緑色透明釉）		良好	外面蓮弁文、内面見込印花文、高台内部露胎、
												細かな貫入が発達
44	51	ＳＫ０１５	青磁	水注				体部1/4	淡灰色（暗茶緑色透明釉）		良好	外面陰刻文、内面も施釉
44	52	ＳＫ０１５	朝鮮陶器	碗		6.3		底部のみ	淡茶色（青白色釉）		良好	高台・内面見込に砂目跡、全面施釉
44	53	ＳＫ０１５	明染付	皿		(6.0)		底部1/4	灰白色（淡青透明釉）		良好	高台内面は白色の不透明釉
46	1	ＳＸ０１０	須恵器	坏	(17.0)			口縁部1/7	灰黒色/灰色	精良	良好	
46	2	ＳＸ０１０	土師器	小皿	(9.0)			口縁部1/4	茶褐色	精良	良好	
46	3	ＳＸ０１０	土師器	坏	12.4	7.2	3.7	完形	淡灰黄色	精良	良好	底部回転糸切、外面煤付着
46	4	ＳＸ０１０	土師器	鍋				口縁部細片	淡茶色	細砂粒少量、角閃石、金雲母	良好	玉縁、外面煤付着
46	5	ＳＸ０１０	土師器	鍋				口縁部細片	茶褐色	1～3㎜の砂粒やや多い	やや良	玉縁
46	6	ＳＸ０１０	土師器	鍋				口縁部細片	淡赤茶色	1～2㎜の砂粒やや多い、角閃石、金雲母	不良	玉縁
46	7	ＳＸ０１０	土師器	鉢				口縁部細片	暗茶褐色	1㎜の砂粒やや多い、角閃石	良好	
46	8	ＳＸ０１０	瓦器	鍋				口縁部細片	暗褐色/淡茶色	精良	やや良	玉縁、外面煤付着
46	9	ＳＸ０１０	瓦質土器	鉢				口縁部細片	淡灰茶色	精良	不良	
46	10	ＳＸ０１０	白磁	皿		6.3		底部のみ	淡茶灰色（淡灰緑色釉）		良好	削出高台、外面底部無釉、内面見込蛇目状掻取
												内面掻取部および底脱、畳付に赤色顔料
46	11	ＳＸ０１０	土師器	錘	3.9（長）		1.0（径）	完存	明赤茶色	精良	良好	
47	1	ＳＸ０１６	土師器	鍋	(35.0)			口縁部1/10	淡茶褐色	1～2㎜の砂粒、角閃石、金雲母	良好	玉縁、外面煤付着
47	2	ＳＸ０１６	土師器	鍋	(48.0)			口縁部1/10	茶褐色	細砂粒少量	良好	玉縁、外面煤付着、内面炭化物付着
47	3	ＳＸ０１６	土師器	鍋				口縁部細片	茶褐色	1～2㎜の砂粒やや多い、角閃石、金雲母	やや良	玉縁、外面煤付着
47	4	ＳＸ０１６	土師器	鍋				口縁部細片	暗茶褐色	細砂粒少量、角閃石、金雲母	良好	玉縁、外面煤付着
47	5	ＳＸ０１６	土師器	鍋				口縁部細片	赤茶色	1㎜の砂粒やや多い、角閃石、金雲母	やや良	玉縁、外面煤付着
48	1	ＳＰ００６	土師器	鍋				口縁部細片	茶褐色	1～2㎜の砂粒やや多い、金雲母片、角閃石	やや良	玉縁、外面煤付着
48	2	検出時	土師器	錘	3.5（長）		1.1（径）	完存	赤茶色	精良	不良	

Tab.4　出土石器一覧

Fig.	No	遺構		器種	全長（cm）	全幅（cm）	器厚（cm）	重量（g）	石材	遺存量	時期	備考
31	37	ＳＤ００５Ｄ軸以北		挽臼（上）	(30.0)		6.7～8.5		凝灰岩	1/3		
36	24	ＳＤ０２５		挽臼（上）	(29.0)		7.7		安山岩	1/4		中央より外側に供給口、側面に持ち手
36	25	ＳＤ０２５		砥石				28.9	砂岩	細片		
36	26	ＳＤ０２５		砥石				34.7	砂岩	細片		
38	7	ＳＤ０３５						16.4	軽石			浮子？
45	54	ＳＫ０１５		茶臼（上）	(20.4)		11.0		安山岩	1/2		細工精巧

Fig.	No	遺構		器種	全長（cm）	全幅（cm）	器厚（cm）	重量（g）	石材	遺存量	時期	備考
45	55	ＳＫ０１５		砥石					砂岩（天草産？）	細片		

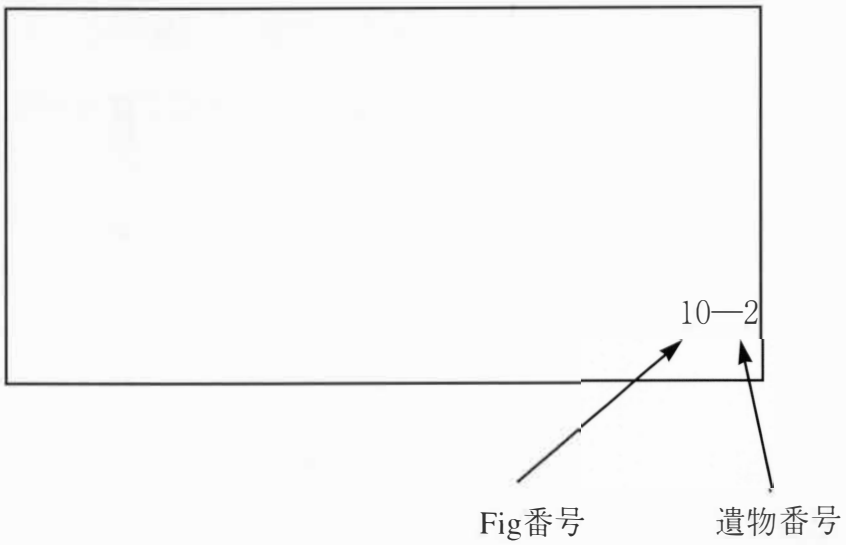
Tab.5　出土木器一覧

Fig.	No	遺構	種別	器種	全長（cm）	全幅（cm）	器厚（cm）	断面形	木材	遺存量		備考
27	1	ＳＢ０９５	木杭		27.3	6.0～8.0		楕円形		先端部風化激しいが、良好		ＳＰ031、柱を支える為の添木？
31	38	ＳＤ００５Ｄ軸以北	板材		20.2	4.8	1.1	長方形				
45	56	ＳＫ０１５	板材		23.0	6.2	2.5	台形		風化激しい		
46	12	ＳＸ０１０	板材		10.0	3.8	0.7					
46	13	ＳＸ０１０	角材		9.2		2.7			風化激しい		
46	14	ＳＸ０１０	木杭		16.0		2.7	円形		先端部のみ		護岸用木杭列

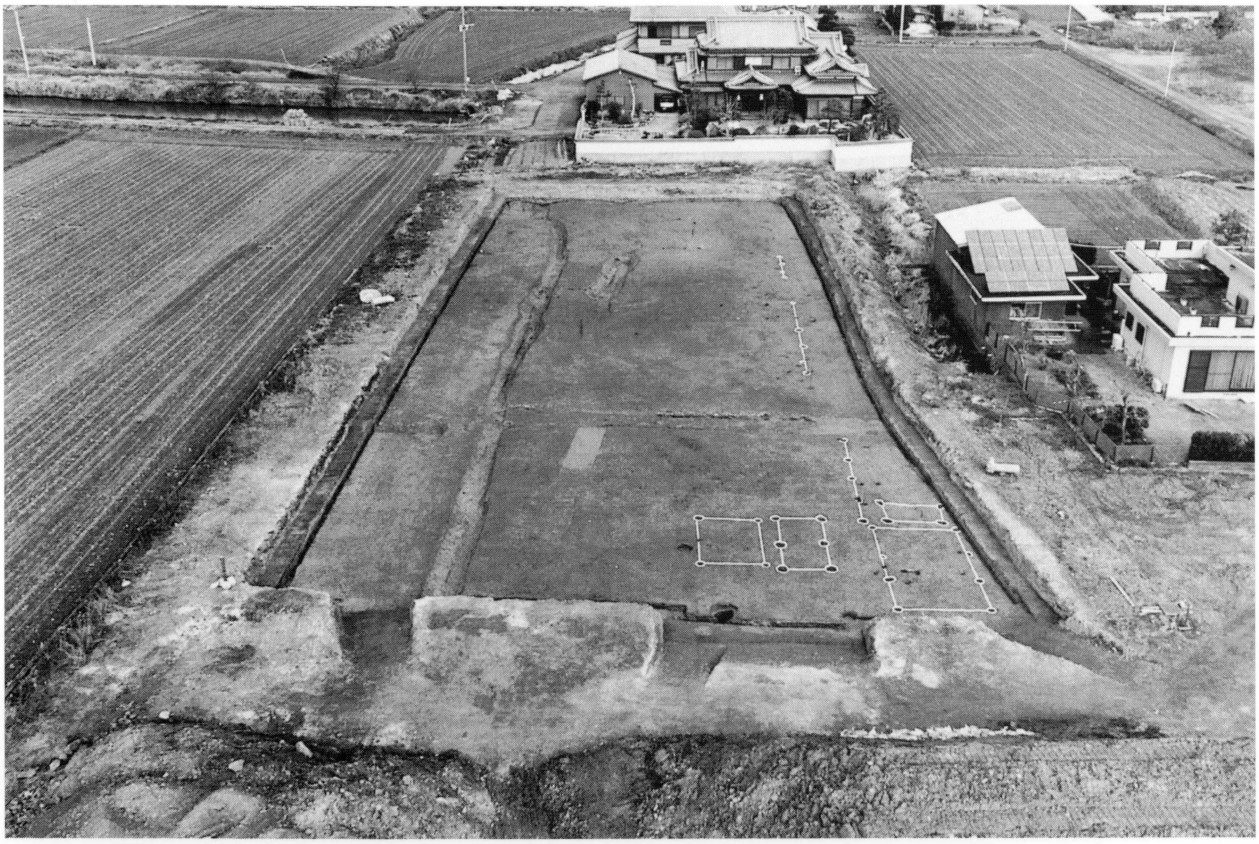
PLATE

凡　例

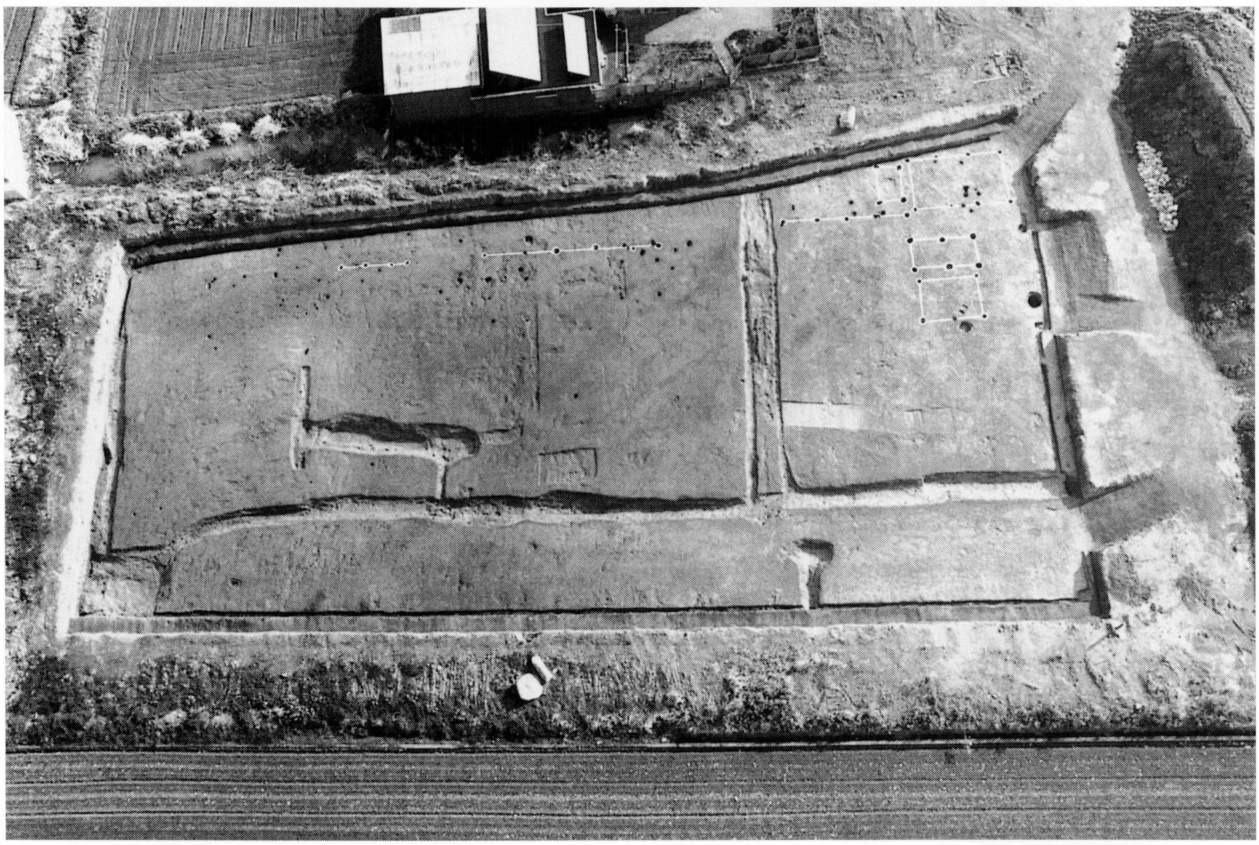
遺物写真右下の番号は、以下のとおりである。



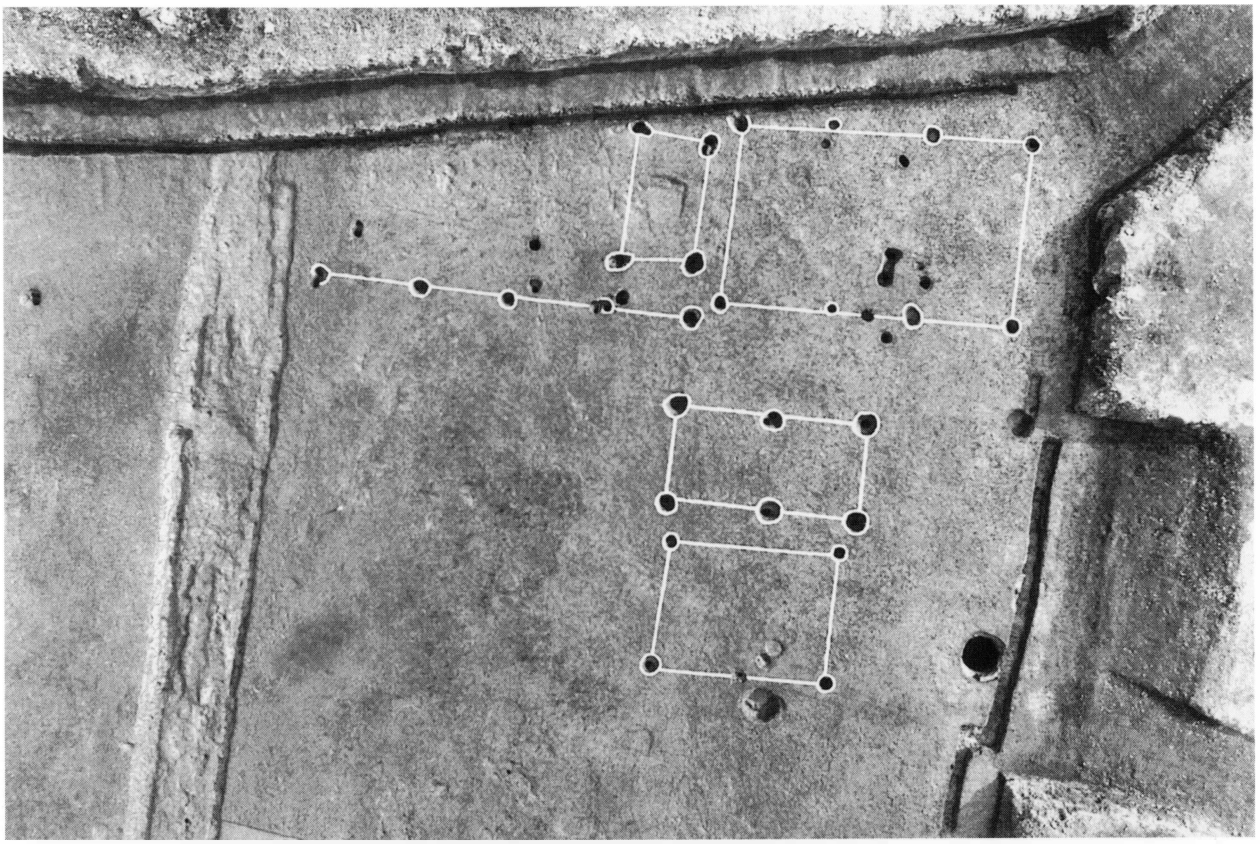
Pl. 1



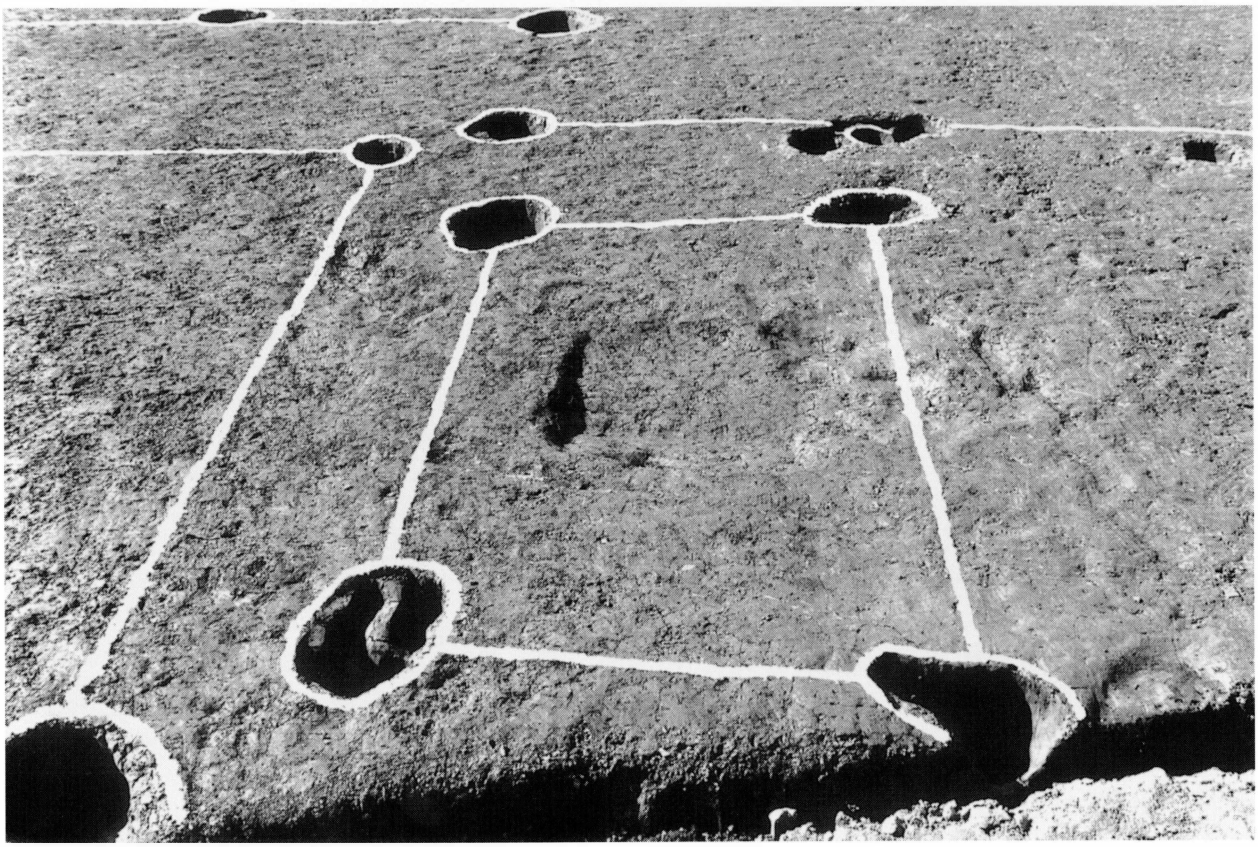
1　　中折地内栗遺跡　　全景　　（南から）



2　　中折地内栗遺跡　　全景　　（上空から・画面上方が東）

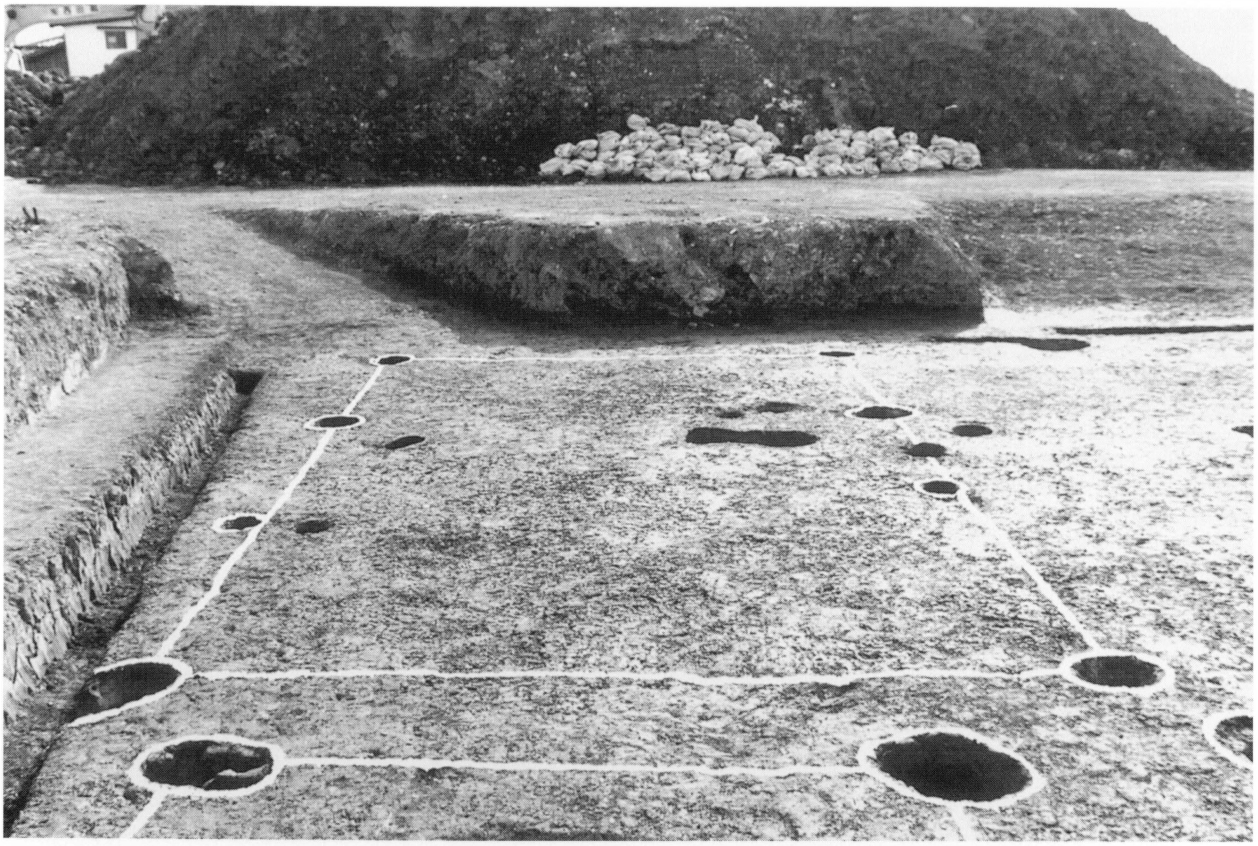


1　南側掘立柱建物群　（上空から・画面上方が東）

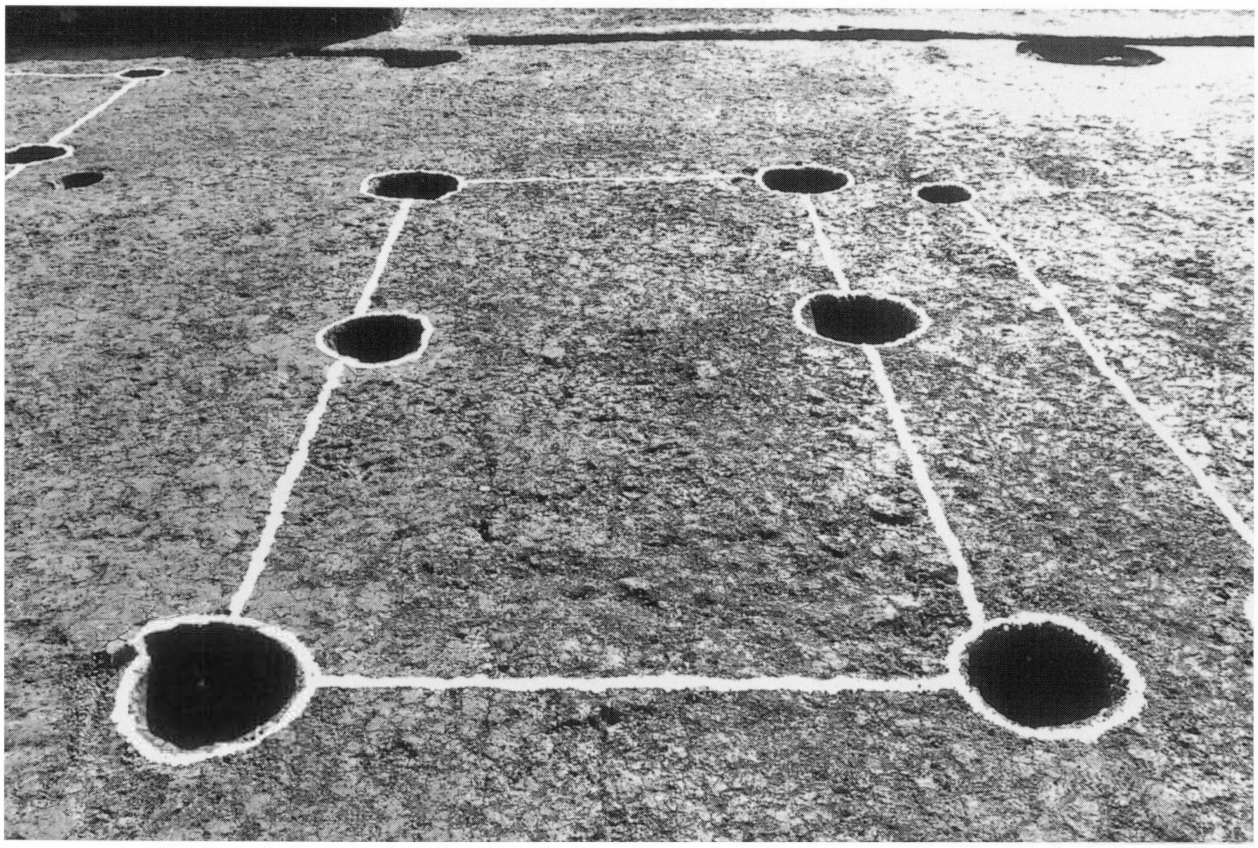


2　ＳＢ１００　（東から）

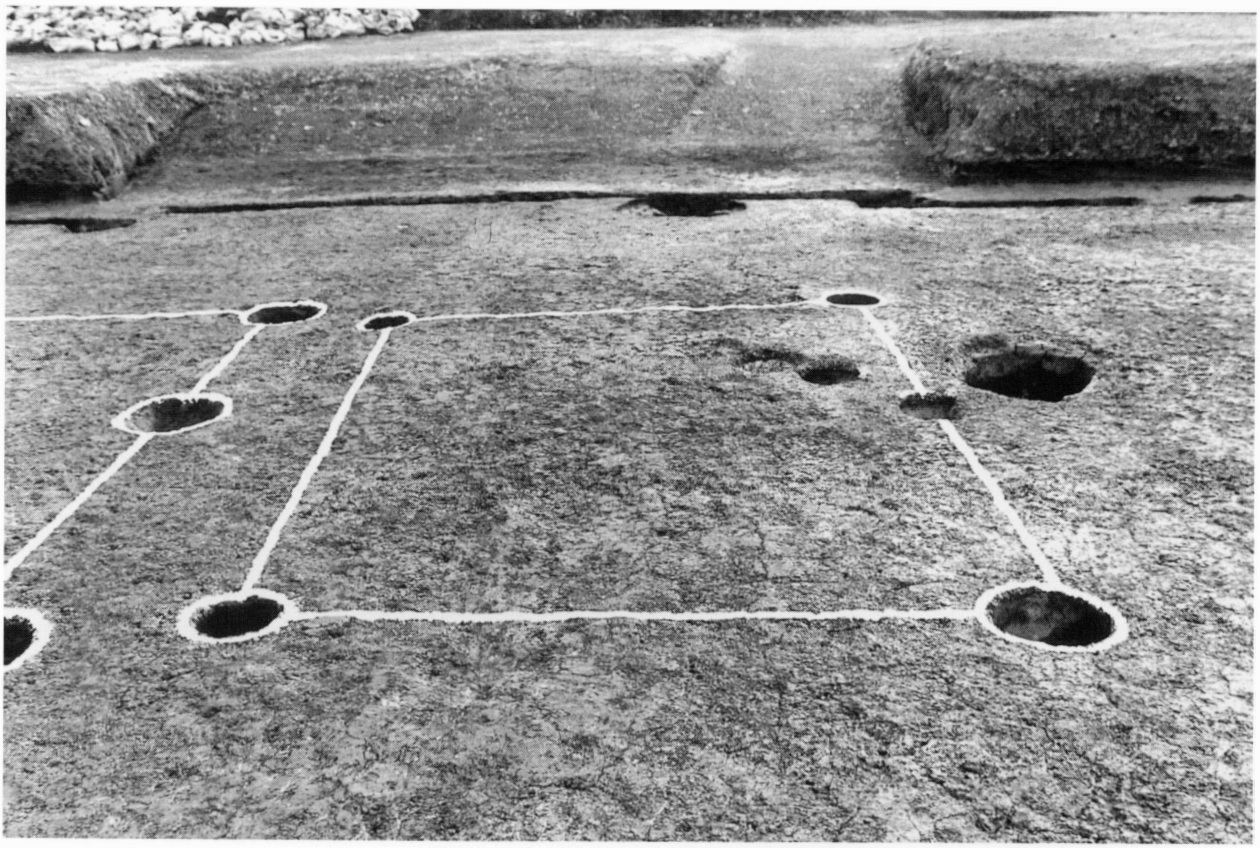
Pl. 3



1　SB105　（北から）



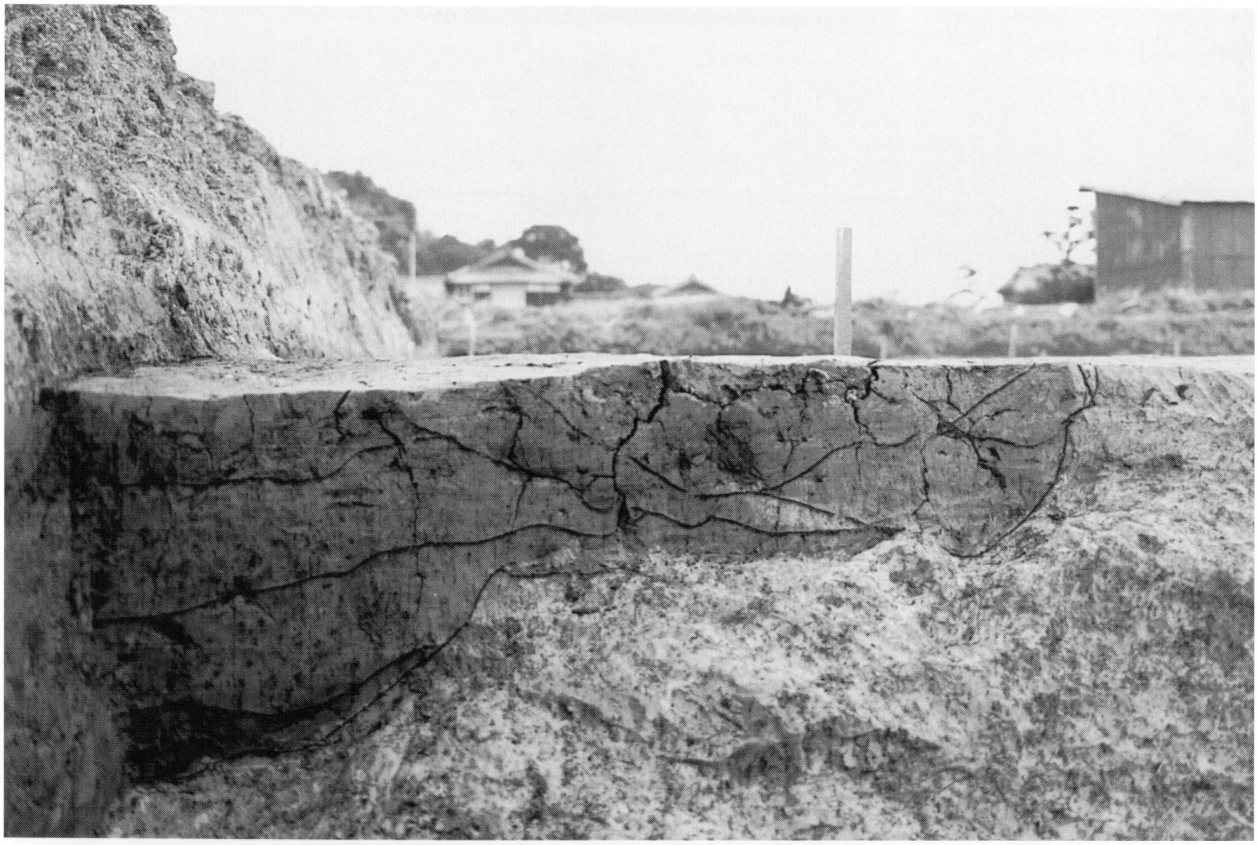
2　SB110　（北から）



1　　ＳＢ１１５　（北から）

2　　ＳＤ００１　　完掘状況　（東から）

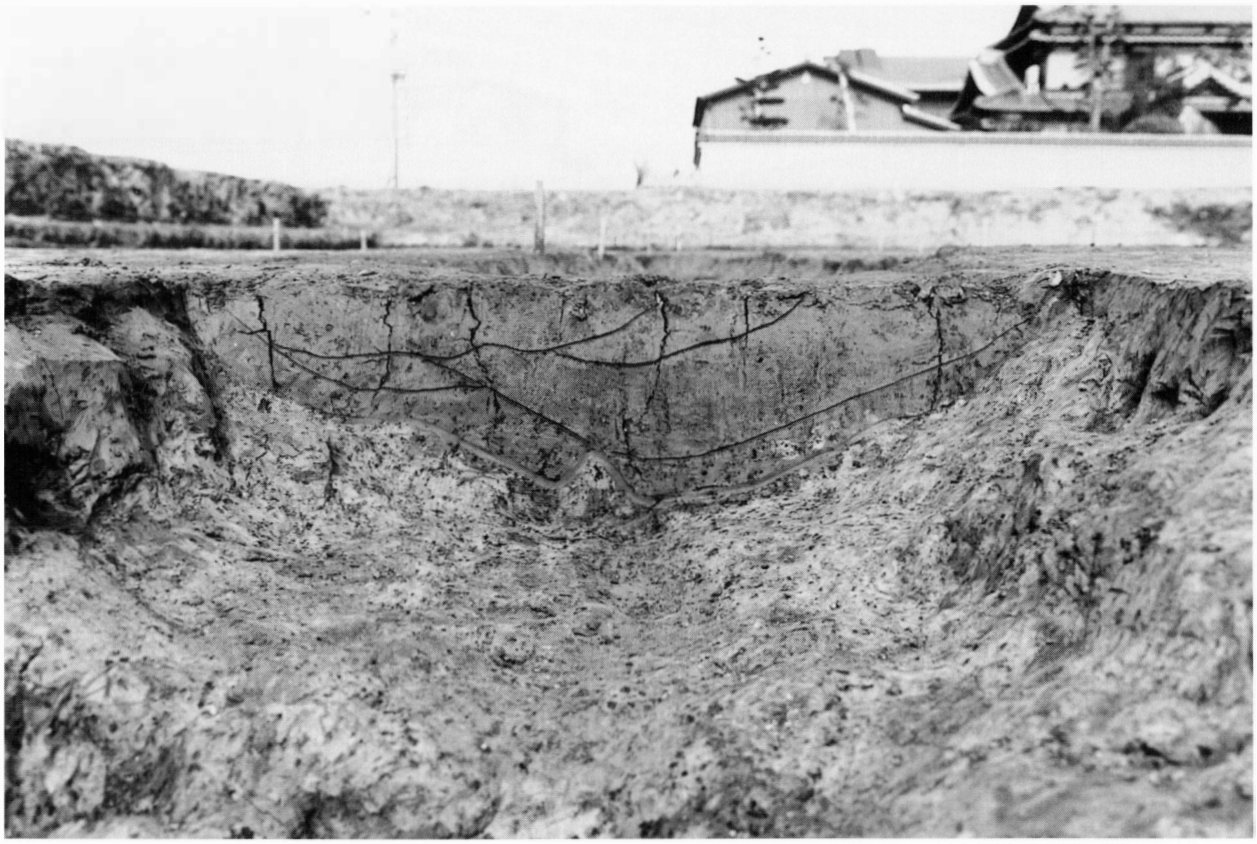
Pl.5



1　　ＳＤ００１　　Ａ軸土層断面　　（西から）

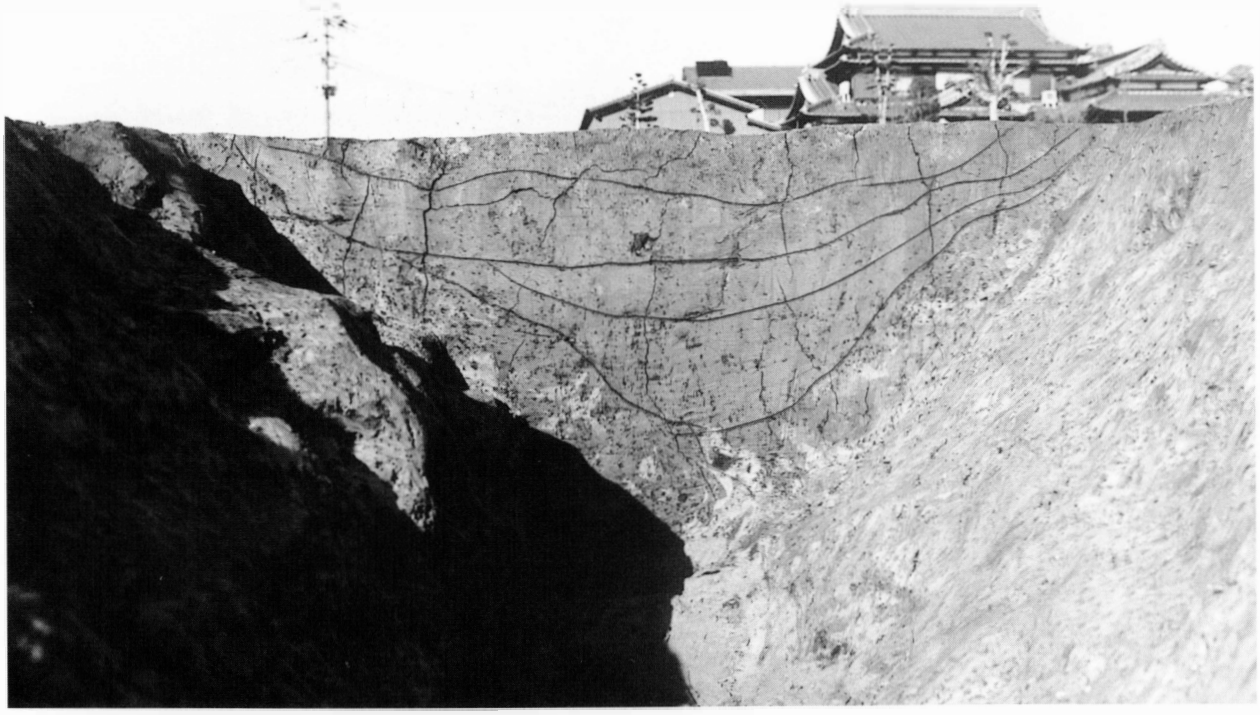
2　　ＳＤ００５　　完掘状況　　（南から）

1　　ＳＤ００５　　Ａ軸土層断面　　（南から）



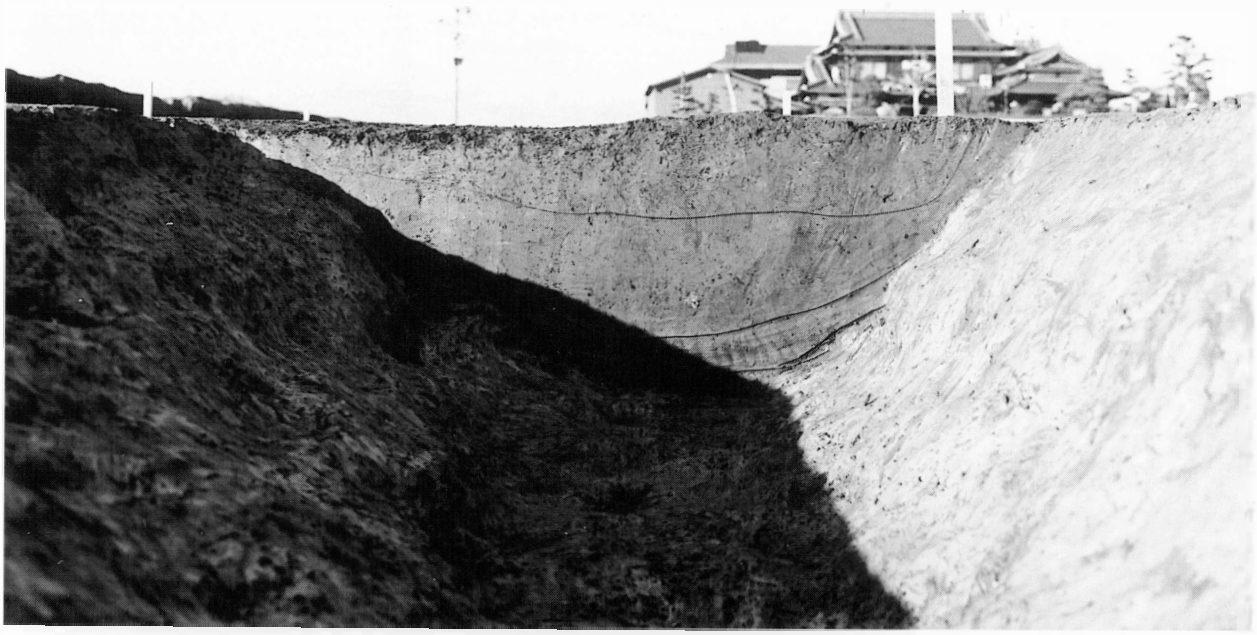
2　　ＳＤ００５　　Ｂ軸土層断面　　（南から）

Pl.7

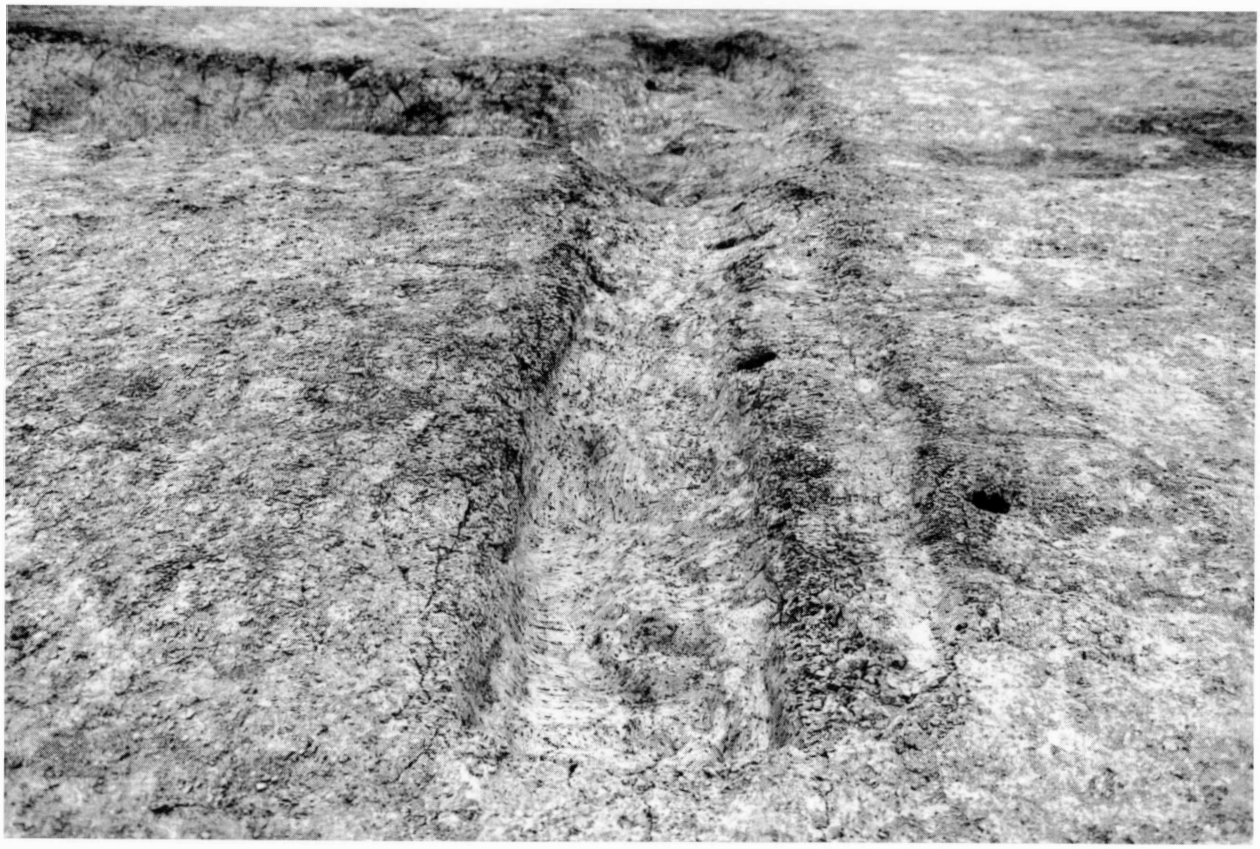


1　　ＳＤ００５　　Ｃ軸土層断面　　（南から）

2　　ＳＤ００５　　Ｄ軸土層断面　　（南から）



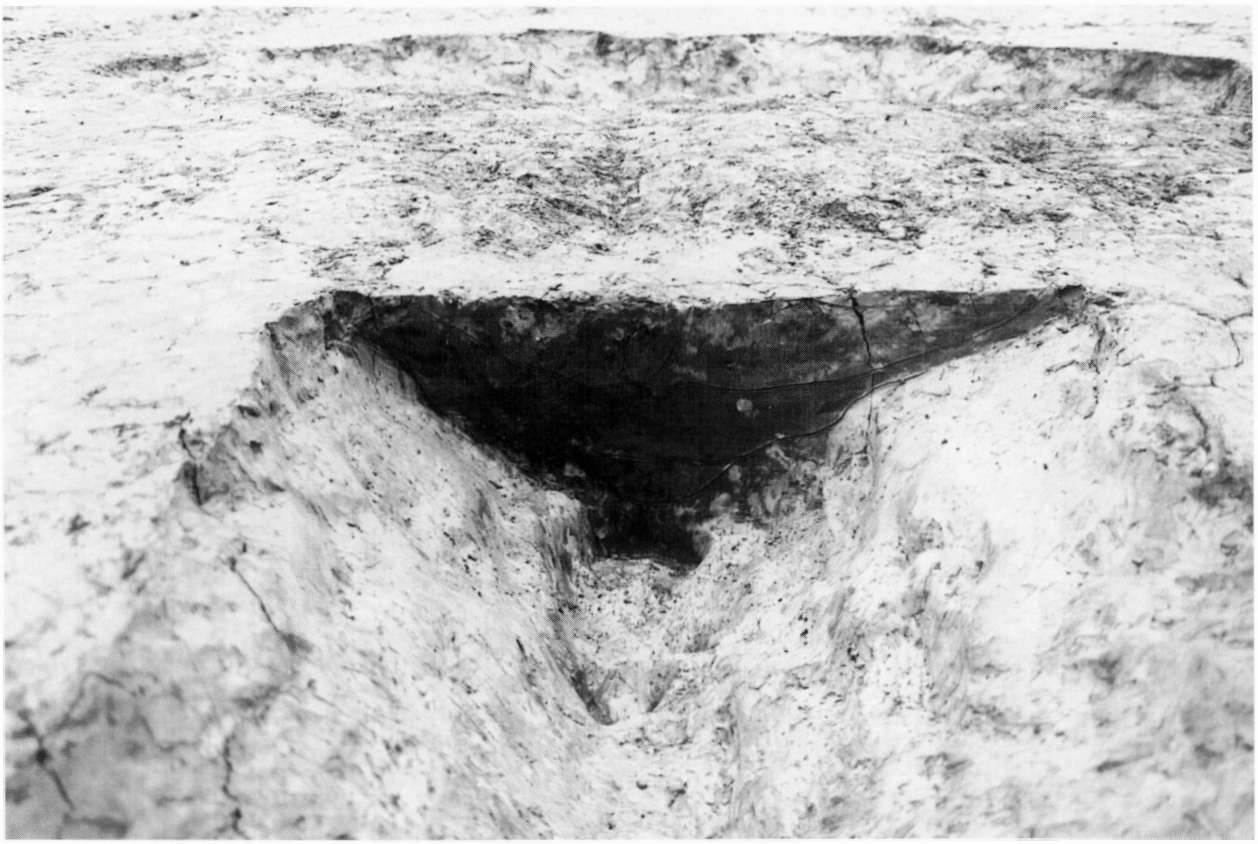
1　　ＳＤ００５　　Ｅ軸土層断面　　（南から）



2　　ＳＤ０２０　　完掘状況　　（東から）

Pl.9

1　　ＳＤ０２０　　土層断面　　（東から）



2　　ＳＤ０２２　　土層断面　　（西から）

1　ＳＤ０２５群　完掘状況　（東から）

2　ＳＤ０２５・０２８・０２９　土層断面　（西から）

Pl.11

1　ＳＤ０３５　土層断面　（東から）

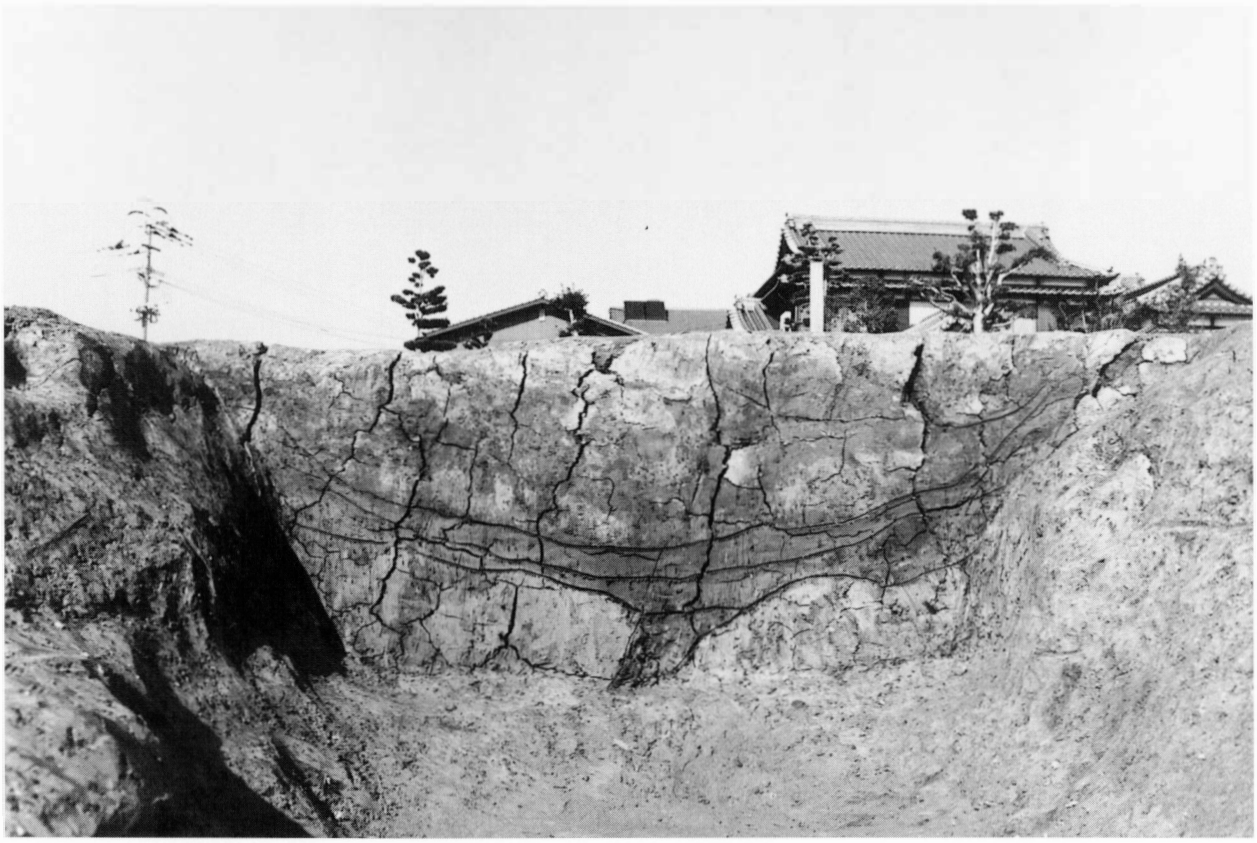
2　ＳＥ０４０　（北から）

1　ＳＥ０４０　土層断面　（北から）

2　ＳＫ０１５・ＳＸ０１６・ＳＤ０１７・０２０　完掘状況　（上空から・上方が東）

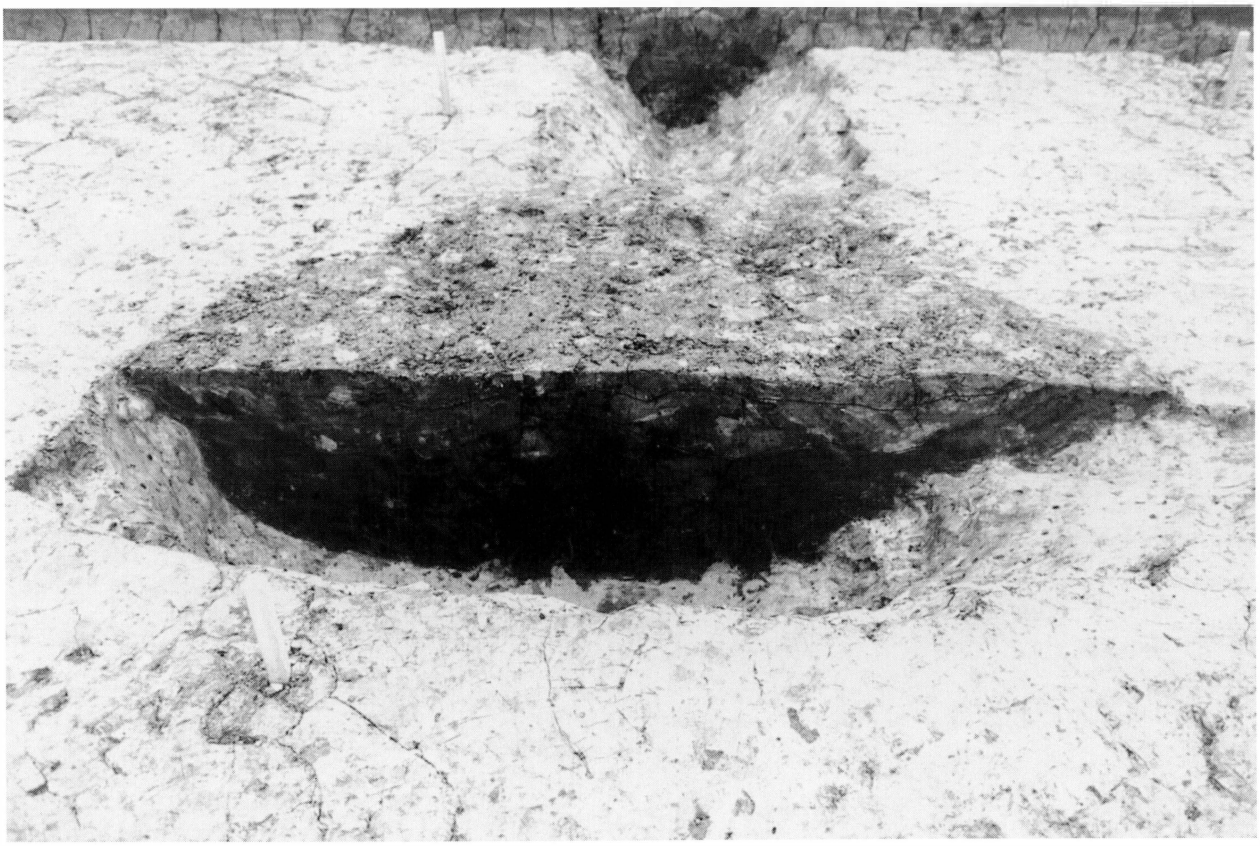
Pl.13

1　　ＳＫ０１５　　完掘状況　　（南から）



2　　ＳＫ０１５　　Ａ軸土層断面　　（南から）

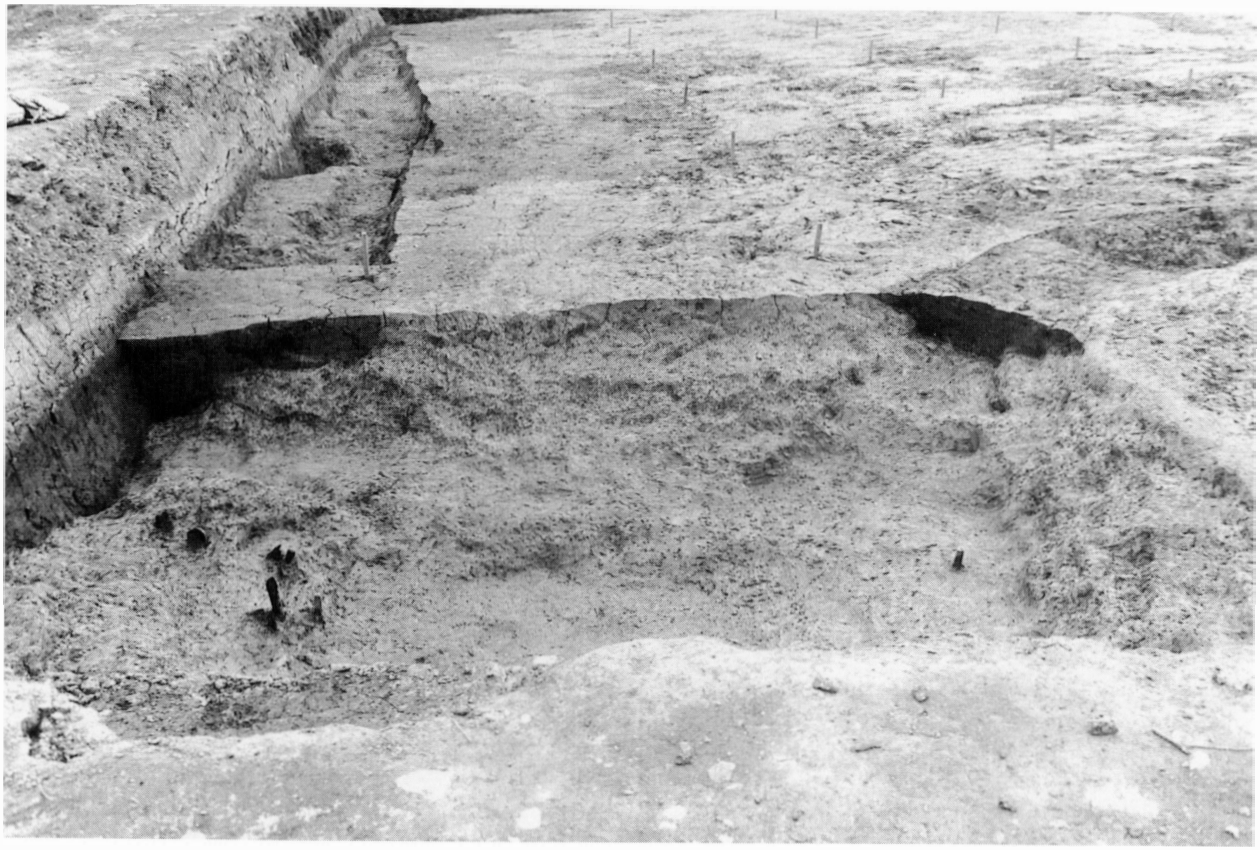
1　　ＳＫ０１５　　Ｂ軸土層断面　　（北から）



2　　ＳＫ０２１　　土層断面　　（東から）

Pl.15

1　　ＳＸ０１０　　完掘状況　　（北から）

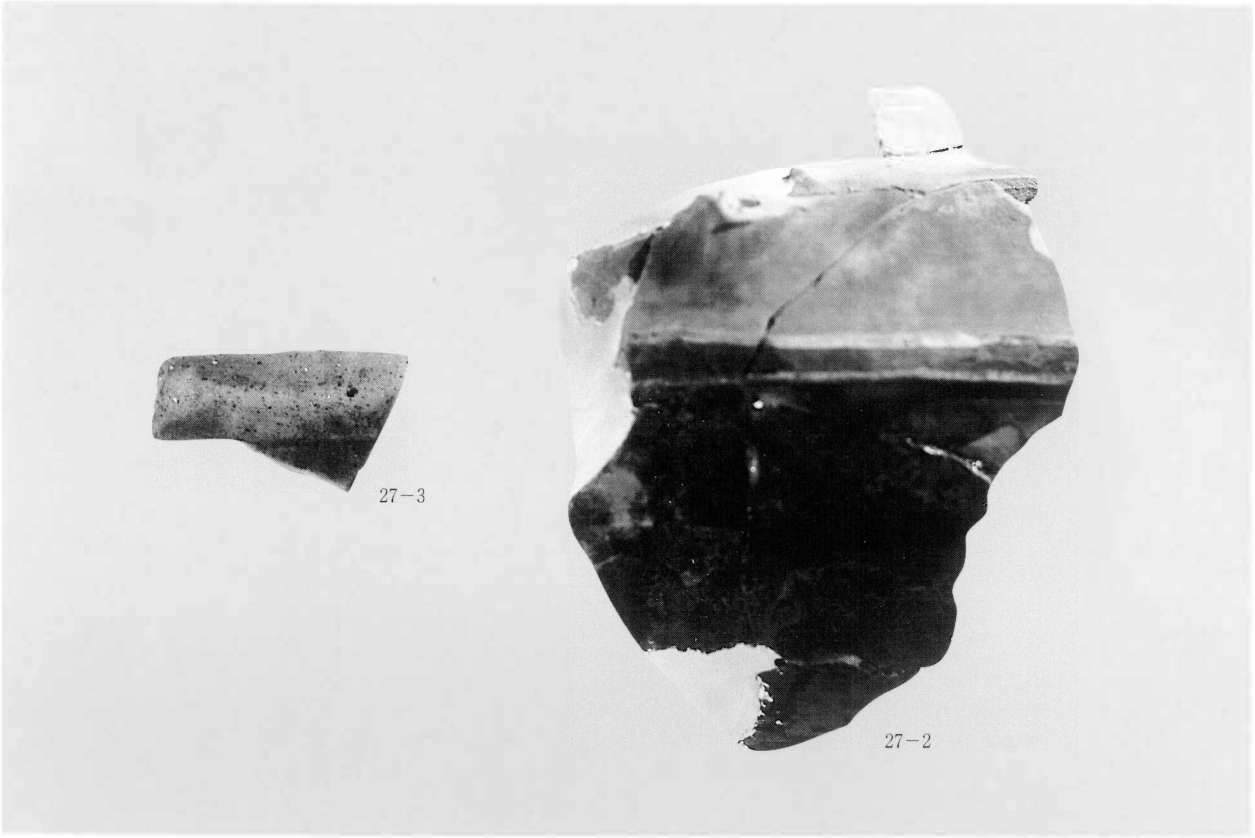


2　　ＳＸ０１０　　完掘状況　　（西から）

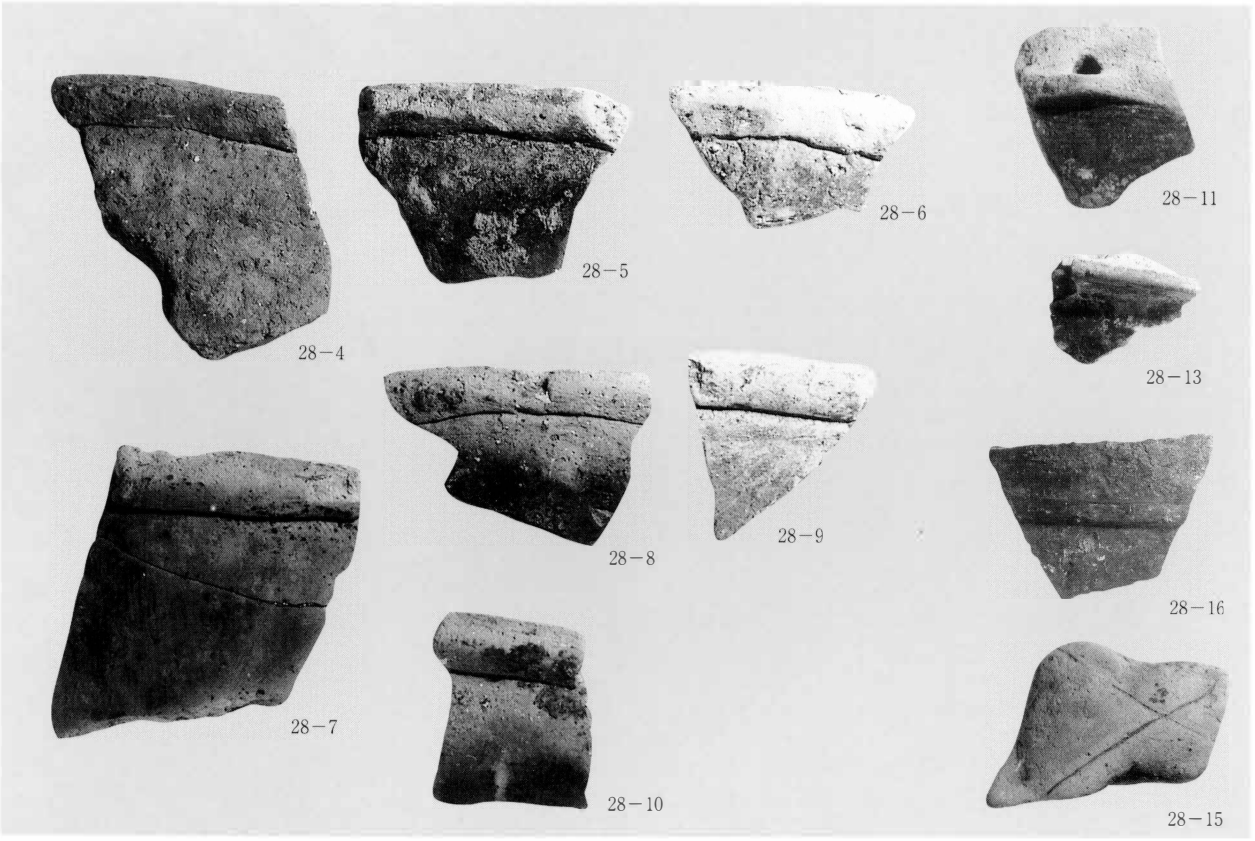
1　　ＳＸ０１０　　遺物出土状況（骨片）　　（南東から）

2　　ＳＸ０１０　　土師器坏出土状況　　（南東から）

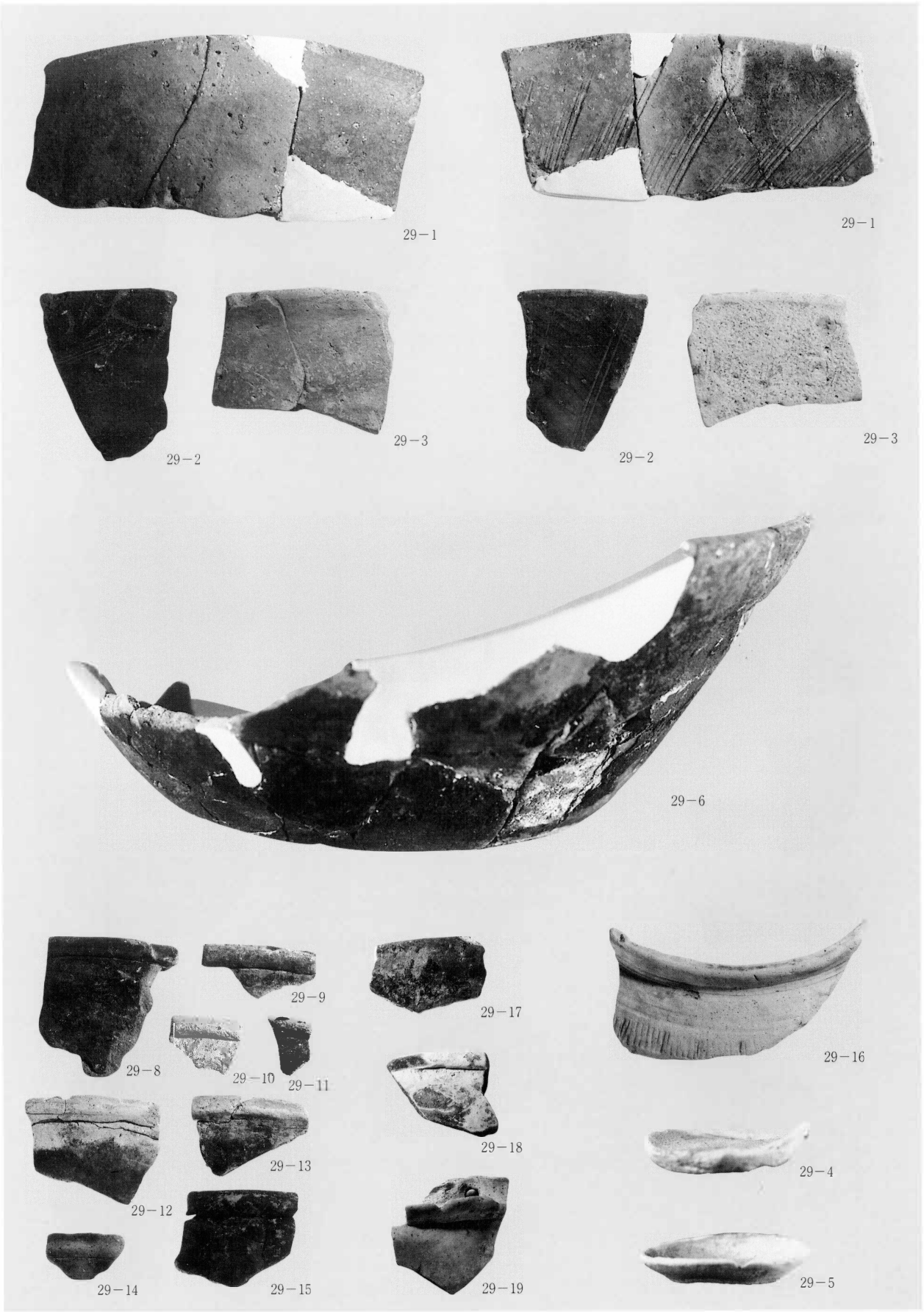
PL.17



1　　掘立柱建物群　　出土遺物

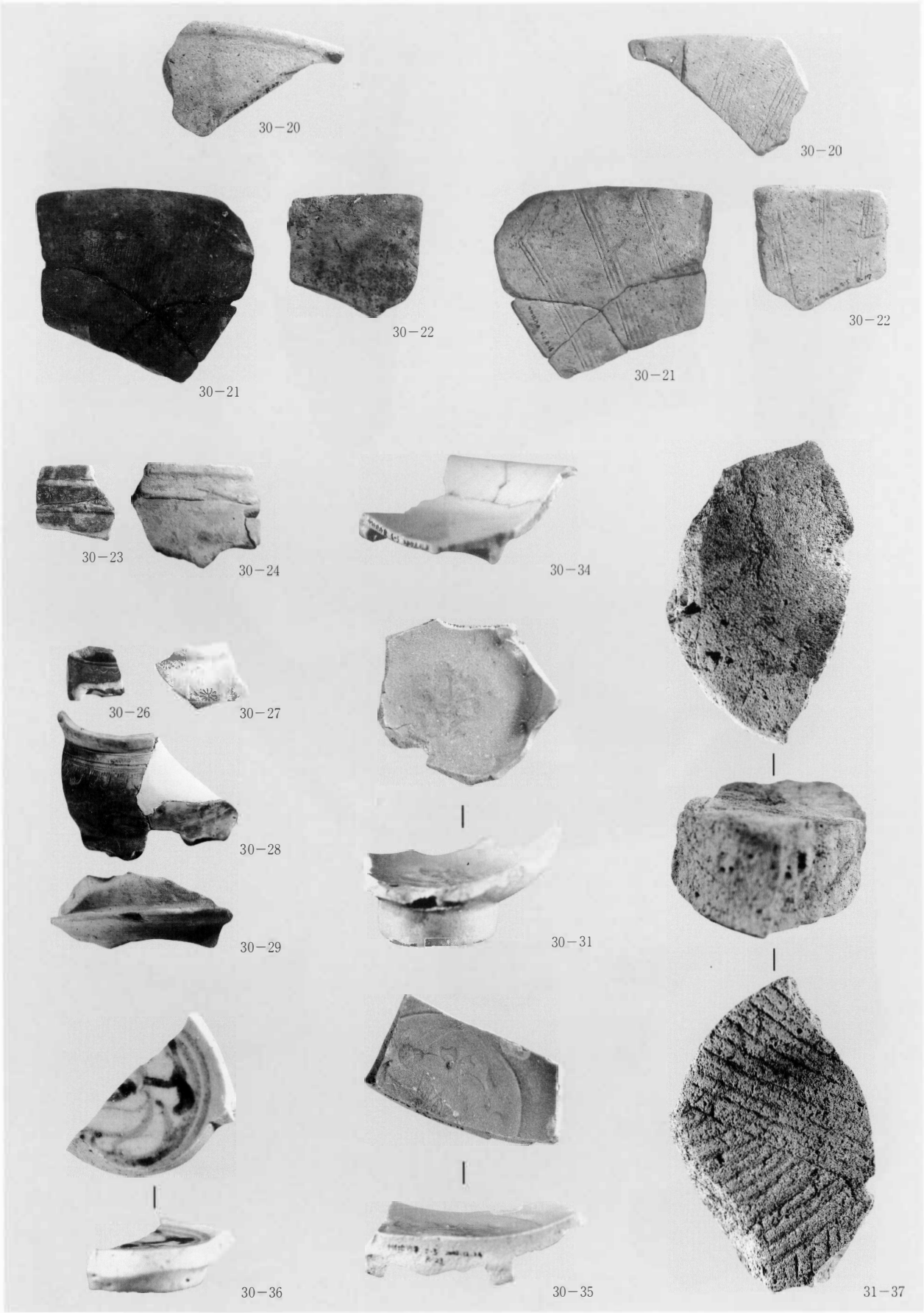


2　　ＳＤ００１　　出土遺物

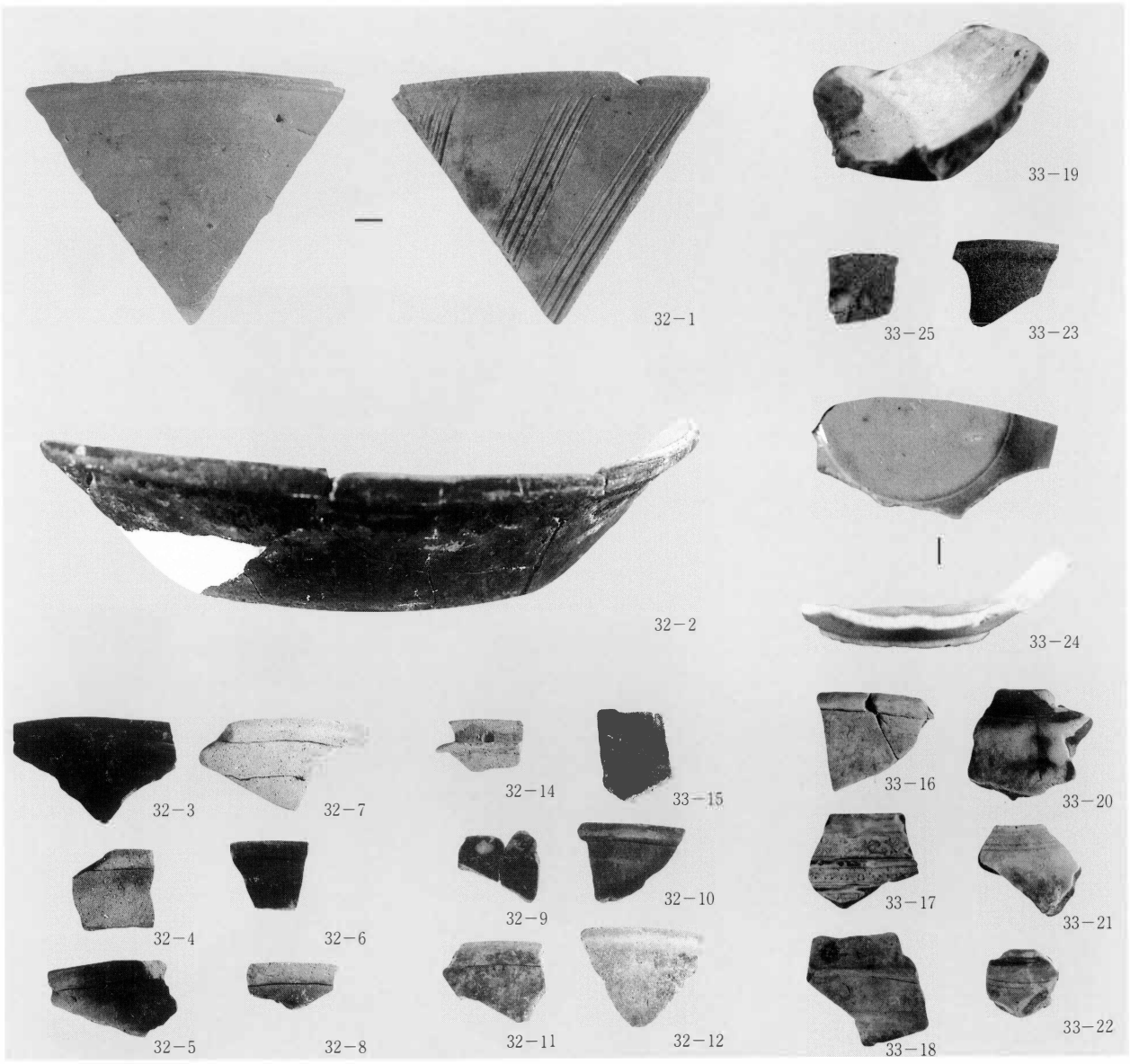


1　　ＳＤ００５Ｄ軸以北出土遺物（１）

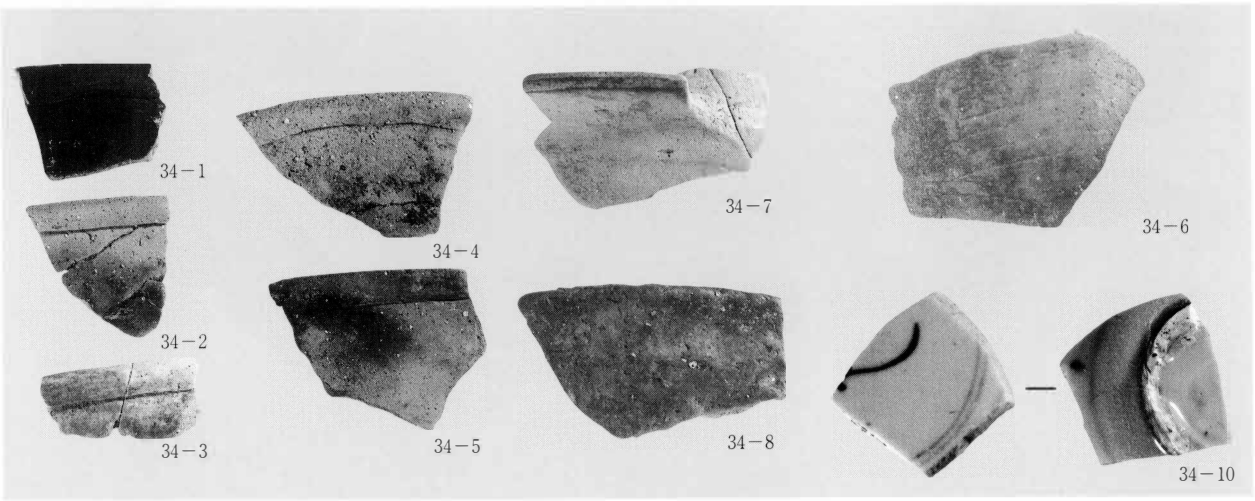
Pl.19



1　　ＳＤ００５Ｄ軸以北出土遺物（２）

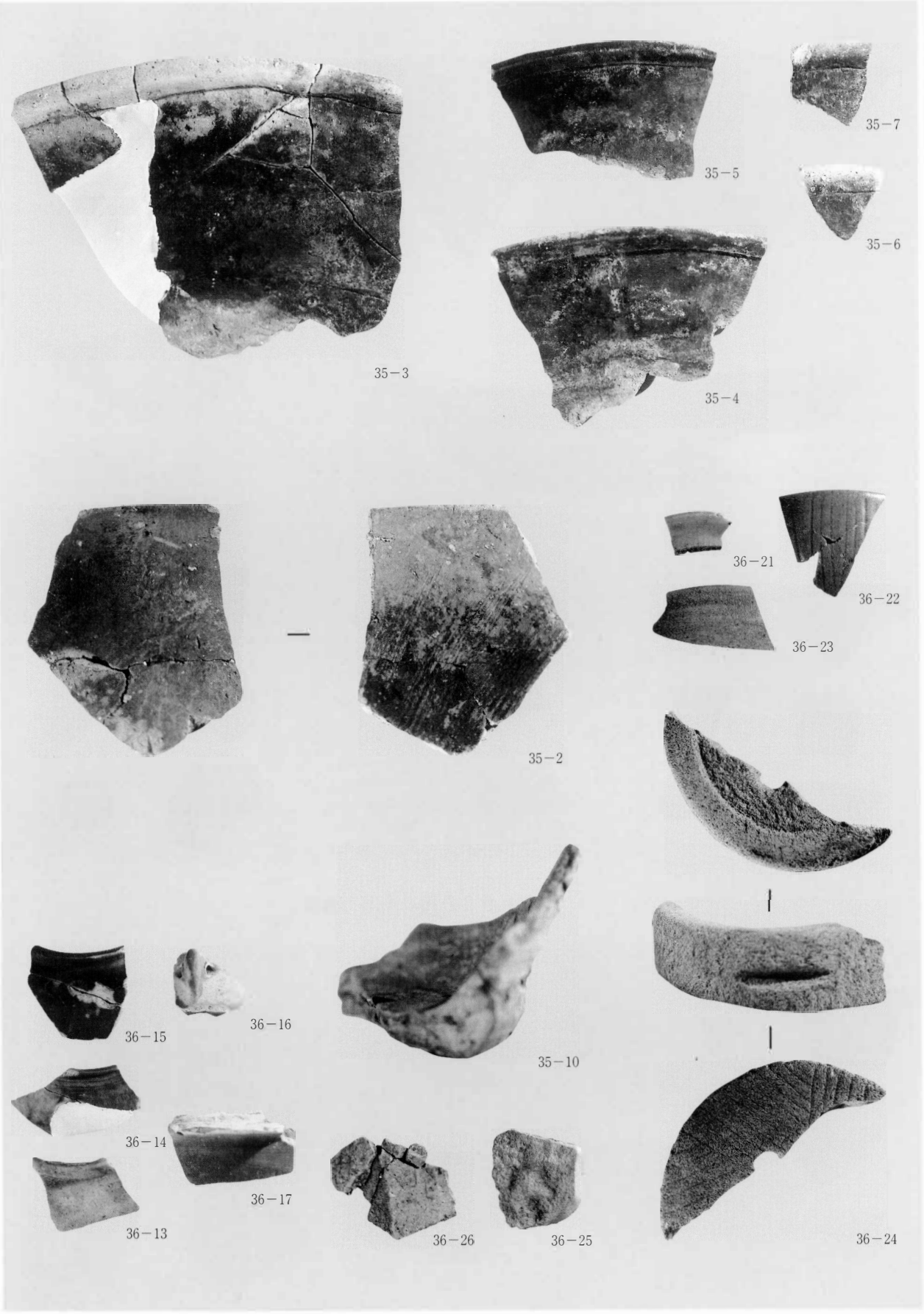


1　　ＳＤ００５Ｄ軸以南出土遺物

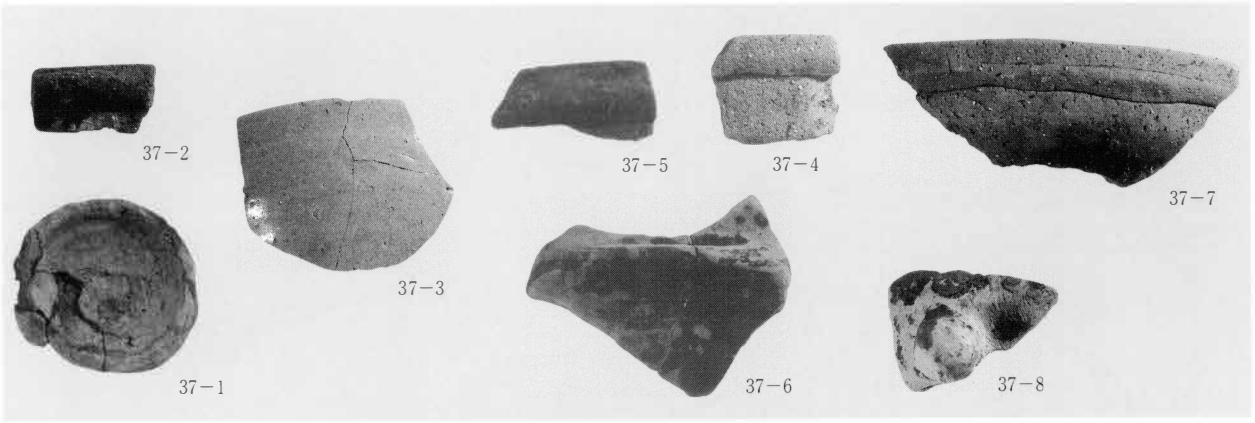


2　　ＳＤ０１７・０２０出土遺物

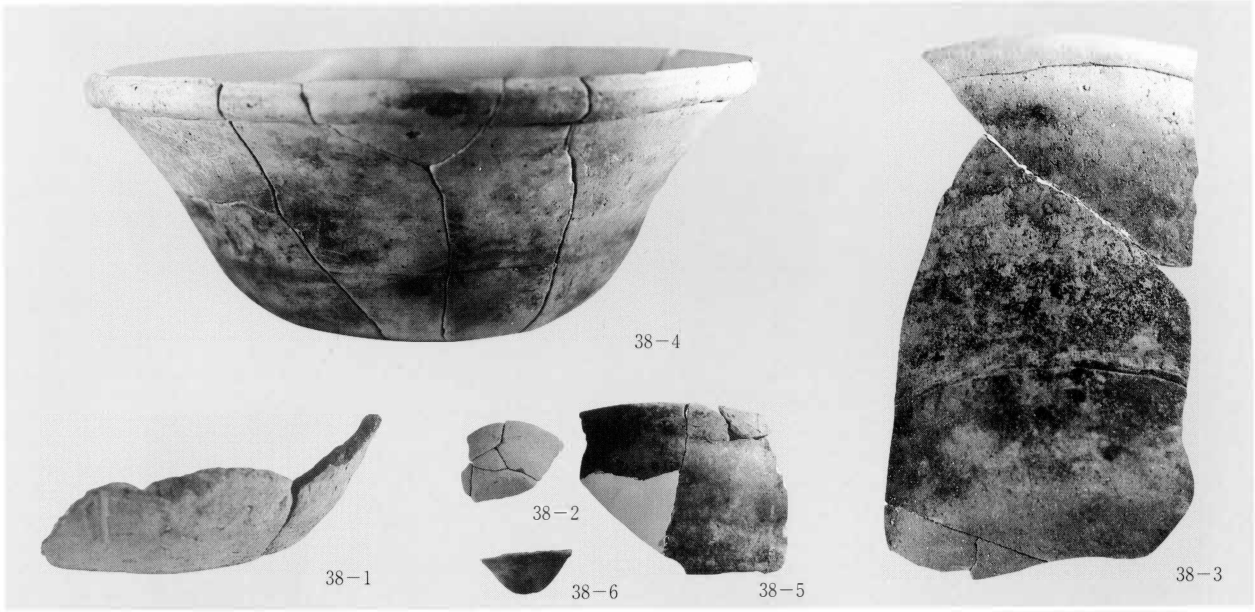
Pl.21



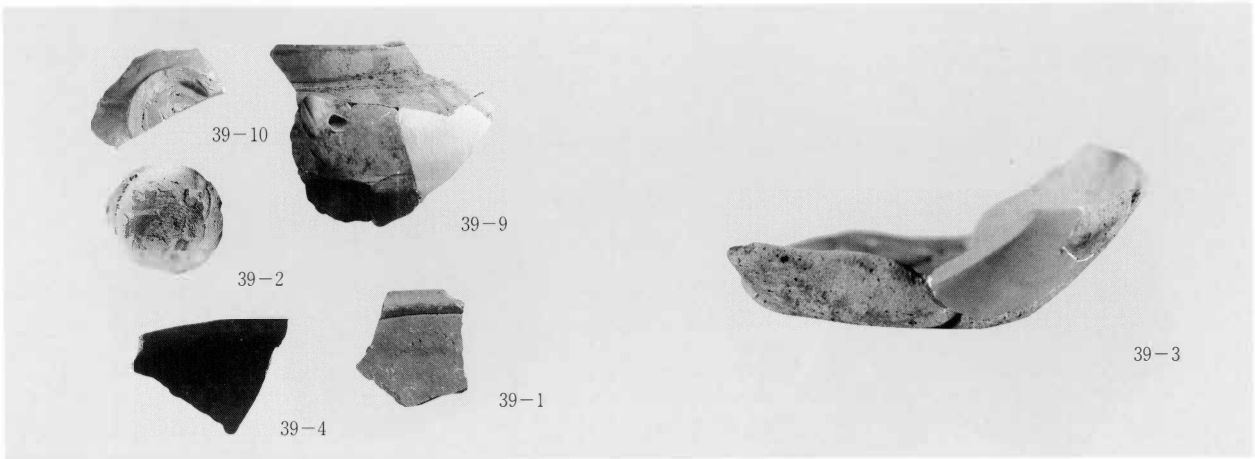
1　　ＳＤ０２５出土遺物



1　　SD027・028・030出土遺物

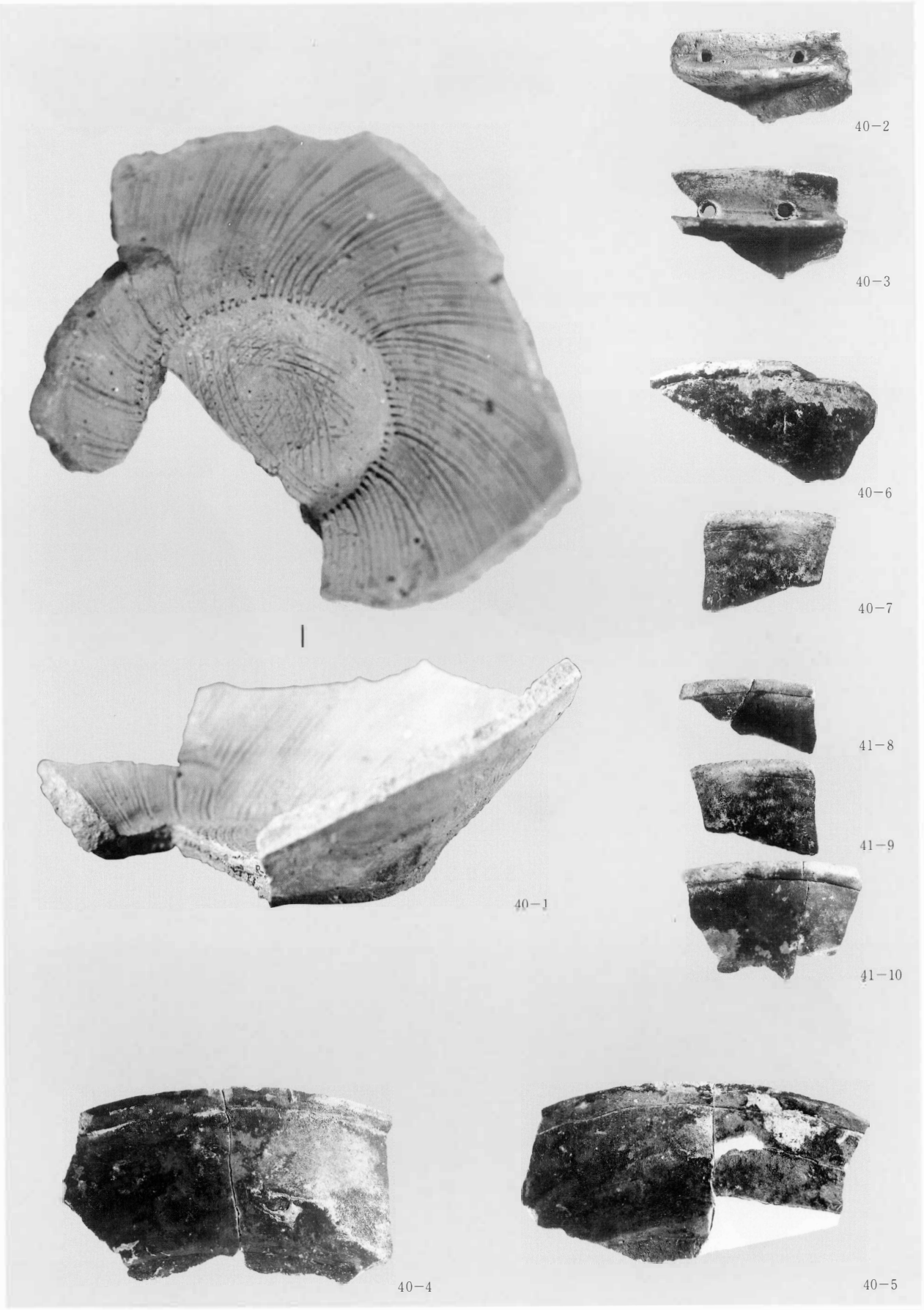


2　　SD035出土遺物

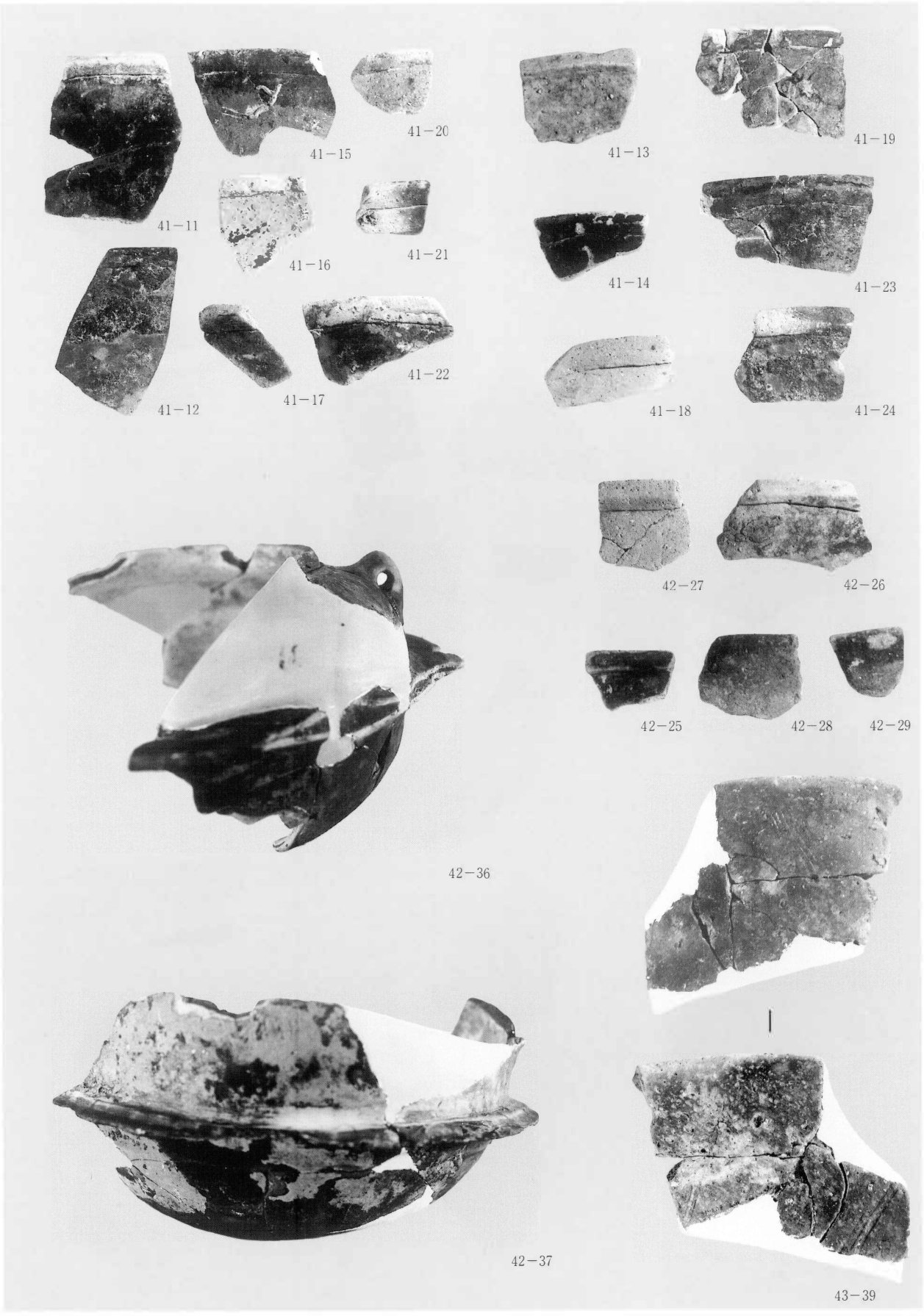


3　　SE040出土遺物

Pl.23

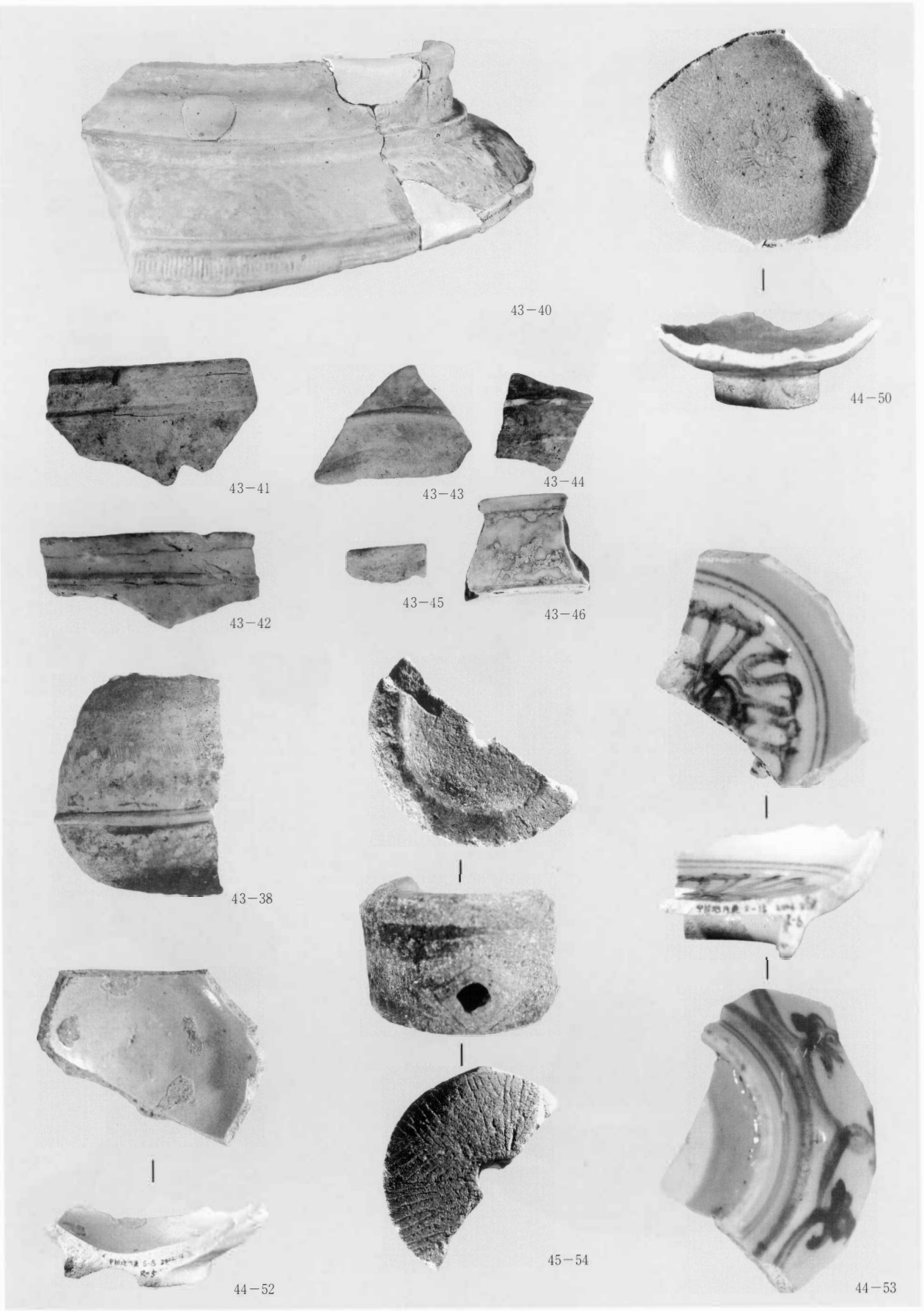


1　　ＳＫ０１５出土遺物（１）

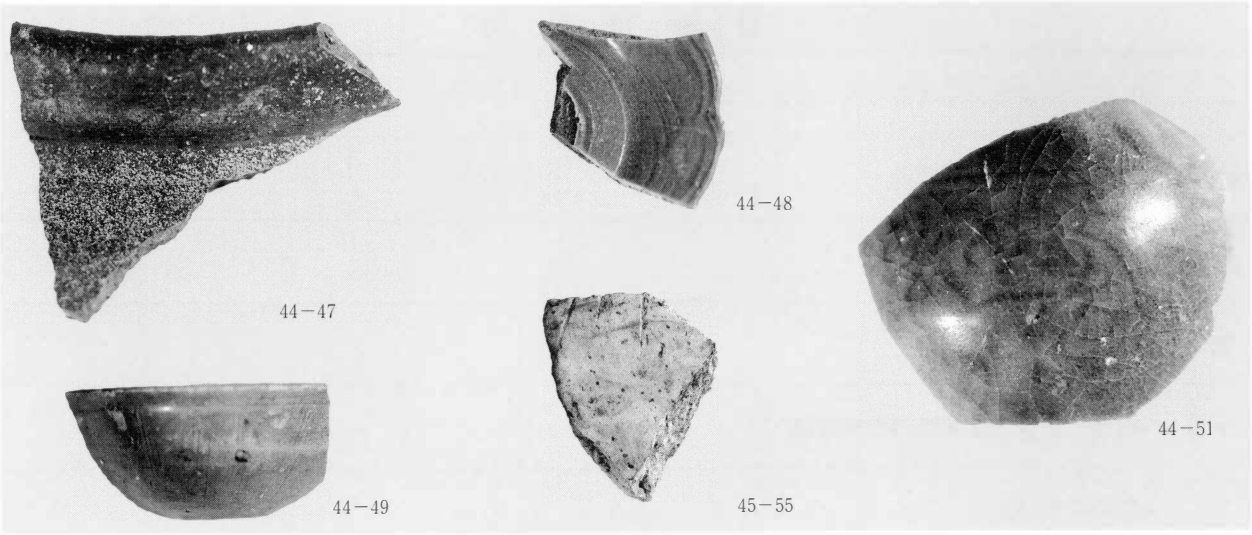


1　　ＳＫ０１５出土遺物（２）

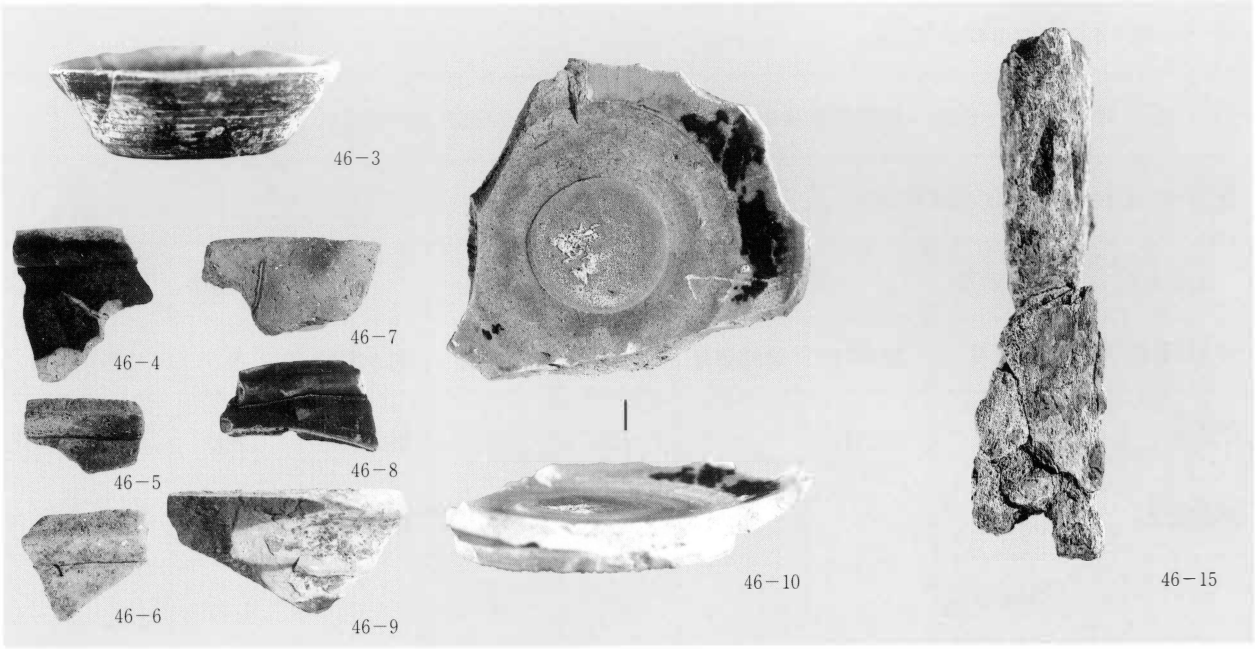
Pl.25



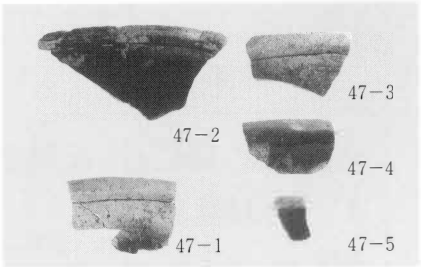
1　ＳＫ０１５出土遺物（３）



1　　ＳＫ０１５出土遺物（４）



2　　ＳＸ０１０出土遺物



3　　ＳＸ０１６出土遺物

中折地内栗遺跡

筑後市文化財調査報告書　第54集

平成16年３月31日　刊行

発行　筑後市教育委員会

福岡県筑後市大字山ノ井898

印刷　有限会社　新幸印刷

福岡県三井郡北野町富多121-9

TEL 0942-78-4715

中折地内栗遺跡　全体図　（S＝1／100）